# 京都府遺跡調査報告集

## 第132冊

１．俵野廃寺第２・３次
２．戸田遺跡
３．新庄遺跡第５次
４．長岡京跡左京第527次（7ANYSK-1地区）

２００９

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版　新庄遺跡第５次

⑴ 新庄遺跡遠景（東から）

⑵ ３区掘立柱建物跡ＳＢ 5303（上が東）

# 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成19・20年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部(現建設交通部)の依頼を受けて実施した俵野廃寺の発掘調査報告、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した戸田遺跡の発掘調査報告、京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けて実施した新庄遺跡第５次の発掘調査報告及び京都府流域下水道事務所の依頼を受けて実施した長岡京跡左京第527次の発掘調査報告４本を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成21年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理　事　長　　上　田　正　昭

# 例　　言

1．本書に収めた概要は下記のとおりである。

　1．俵野廃寺第２・３次

　2．戸田遺跡

　3．新庄遺跡第５次

　4．長岡京跡左京第527次（7ANYSK-1地区）

2．遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

| | 遺跡名 | 所在地 | 調査期間 | 経費負担者 | 執筆者 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1. | 俵野廃寺第２・３次 | 京丹後市網野町俵野 | 平19.10.17～平20.2.8<br>平20.4.30～平20.6.6 | 京都府土木建築部<br>（京都府建設交通部） | 村田和弘<br>肥後弘幸 |
| 2. | 戸田遺跡 | 福知山市字戸田 | 平19.11.28～平20.2.22<br>平20.4.23～平20.10.22 | 国土交通省近畿地方整備局 | 引原茂治<br>柴暁彦 |
| 3. | 新庄遺跡第５次 | 南丹市八木町新庄 | 平20.5.9～平20.9.12 | 京都府南丹土地改良事務所 | 辻本和美 |
| 4. | 長岡京跡左京第527次（7ANYSK-1地区） | 京都市伏見区淀大下津町 | 平20.7.22～平20.8.25 | 京都府流域下水道事務所 | 松井忠春 |

3．本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第６座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

　但し、戸田遺跡・長岡京跡左京第527次については、過去の調査との関係から、旧座標を用いている。

4．本書の編集は、調査第２課調査担当者の編集原案をもとに、調査第１課資料係が行った。

5．現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第１課資料係主任調査員田中彰が行った。

# 本 文 目 次

１．俵野廃寺第２・３次発掘調査報告 1
２．戸田遺跡発掘調査報告 31
３．新庄遺跡第５次発掘調査報告 51
４．長岡京跡左京第527次（7ANYSK-1地区）発掘調査報告 77

# 挿 図 目 次

**１．俵野廃寺第２・３次**

第１図　遺跡分布図 2
第２図　調査地周辺地形図 3
第３図　Ａ地区遺構配置図 4
第４図　Ａ地区土層断面図 5
第５図　Ａ地区瓦堆積南側遺物出土状況図・Ａ地区東西溝土層断面図
・Ａ地区礫敷き遺構上面遺物出土状況図 6
第６図　Ｂ・Ｃ地区遺構配置図 7
第７図　Ｂ地区北側壁面土層断面図 8
第８図　Ｂ地区北側遺物出土状況図 9
第９図　Ｂ地区東側護岸施設実測図 10
第10図　Ｃ地区土層断面図 11
第11図　Ｃ地区遺物出土状況図 12
第12図　Ｃ地区東側護岸施設実測図 13
第13図　Ｃ地区南北溝内遺物出土状況図 14
第14図　出土遺物実測図　土器(1) 15
第15図　出土遺物実測図　土器(2) 16
第16図　出土遺物実測図　瓦(1) 17
第17図　出土遺物実測図　瓦(2) 18
第18図　出土遺物実測図　瓦(3) 19
第19図　出土遺物実測図　瓦(4) 20
第20図　出土遺物実測図　瓦(5) 21
第21図　出土遺物実測図　瓦(6) 22
第22図　出土遺物実測図　瓦(7) 23

第23図　出土遺物実測図　瓦(8)----24
第24図　出土遺物実測図　瓦(9)----25
第25図　出土遺物実測図　瓦(10)----26
第26図　丸瓦・平瓦部分写真----27
第27図　出土遺物実測図　木製品----28

２．戸田遺跡

第１図　調査地位置図----31
第２図　調査区配置図----33
第３図　試掘トレンチ柱状断面図----34
第４図　Ａ地区平面図----36
第５図　Ａ地区検出遺構実測図----37
第６図　Ｂ地区・Ｃ地区平面図----39
第７図　Ｂ地区・Ｃ地区南壁断面図----40
第８図　出土遺物実測図１(試掘トレンチ)----42
第９図　出土遺物実測図２(試掘トレンチ)----43
第10図　出土遺物実測図３(Ａ地区)----45
第11図　出土遺物実測図４(Ａ地区)----46
第12図　出土遺物実測図５(Ｂ地区ＳＤ22)----48
第13図　出土遺物実測図６(Ｂ・Ｃ地区)----49

３．新庄遺跡第５次

第１図　周辺遺跡分布図----52
第２図　調査地位置図----54
第３図　１区・２区土層断面図----55
第４図　３区・４区土層断面図----56
第５図　１区遺構配置図右京第902次尾流地区調査地位置図----57
第６図　１区竪穴式住居跡ＳＨ5177実測図----58
第７図　１区・３区土坑実測図----59
第８図　３区遺構配置図----60
第９図　３区建物跡ＳＢ5302実測図----62
第10図　３区建物跡ＳＢ5305実測図----63
第11図　３区掘立柱建物跡ＳＢ5303実測図----65
第12図　３区溝ＳＤ5301実測図----67
第13図　２区・４区遺構配置図----68

第14図　４区竪穴式住居跡ＳＨ5401実測図 ----------69
第15図　４区掘立柱建物跡ＳＢ5402・5403実測図----------69
第16図　出土遺物実測図 ----------71
第17図　掘立柱建物跡ＳＢ5303柱間寸法 ----------74

４．長岡京跡左京第527次（7ANYSK-1地区）

第１図　調査地位置図----------77
第２図　調査地平面図・B地区西壁断面図----------79
第３図　土地利用変遷図 ----------80

# 図 版 目 次

１．俵野廃寺第２・３次

図版第１　(1)調査地遠景（南上空から）　(2)Ｂ地区瓦堆積検出状況（北東から）
図版第２　(1)調査地近景（北から）　(2)Ａ地区全景（北から）
(3)Ａ地区瓦堆積検出作業風景（北から）
図版第３　(1)　Ａ地区瓦堆積南側遺物出土状況（北から）
(2)　Ａ地区瓦堆積南側軒丸瓦（48）出土状況（北東から）
(3)Ａ地区瓦堆積南側軒丸瓦(52)出土状況（北東から）
図版第４　(1)Ａ地区礫敷き遺構全景（北から）　(2)Ａ地区礫敷き遺構検出作業風景（北西から）
(3)Ａ地区礫敷き遺構軒丸瓦(50)出土状況（東から）
図版第５　(1)Ｂ地区全景（北から）　(2)Ｂ地区瓦堆積南側検出状況（西から）
(3)Ｂ地区瓦堆積北側検出状況（西から）
図版第６　(1)Ｂ地区東側軒丸瓦(54・55)・平瓦出土状況（西から）
(2)Ｂ地区護岸施設検出状況（南西から）
(3)Ｂ地区護岸施設検出状況（南西から）
図版第７　(1)現地説明会風景（北東から）　(2)Ｃ地区全景（南西から）
(3)Ｃ地区護岸施設検出状況（南から）
図版第８　(1)Ｃ地区軒丸瓦(58)出土状況（西から）
(2)Ｃ地区軒丸瓦(57)・丸瓦(69)出土状況（西から）
(3)Ｃ地区南北溝内木製品(78)出土状況（北東から）
図版第９　出土遺物　土器(1)
図版第10　出土遺物　土器(2)
図版第11　出土遺物　瓦(1)

図版第12　出土遺物　瓦(2)
図版第13　出土遺物　瓦(3)
図版第14　出土遺物　瓦(4)
図版第15　出土遺物　瓦(5)
図版第16　出土遺物　木製品

## ２．戸田遺跡

図版第１　(1)調査前全景(西から)　(2)Ａ地区調査前全景(北東から)
(3)Ｂ地区調査前全景(東から)
図版第２　(1)調査前全景(北西から)　(2)調査地全景(空撮・南から)
図版第３　(1)調査地遠景(空撮・東から)　(2)調査地遠景(空撮・西から))
図版第４　(1)Ａ地区全景(空撮・上が北)　(2)Ｂ・Ｃ地区全景(空撮・上が北)
図版第５　(1)Ａ地区全景(南西から)　(2)Ａ地区土坑ＳＫ07(南から)
(3)Ａ地区石組溝ＳＸ08(南東から)
図版第６　(1)Ａ地区池状遺構ＳＸ510(南東から)
(2)Ａ地区池状遺構ＳＸ510(南西から)
(3)Ａ地区池状遺構ＳＸ510部分(南東から)
図版第７　(1)Ｂ地区全景(西から)　(2)Ｂ地区溝ＳＤ22遺物出土状況(西から)
図版第８　(1)Ｂ地区全景(南東から)　(2)Ｂ地区溝ＳＤ22遺物出土状況(南東から)
(3)Ｃ地区溝群(北東から)
図版第９　(1)２トレンチ全景(南から)　(2)２トレンチ断割り断面(南東から)
(3)４トレンチ拡張部分(南から)
図版第10　(1)７トレンチ全景(南から)　(2)11トレンチ全景(北から)
(3)15トレンチ全景(北西から)
図版第11　(1)16トレンチ南半部(北西から)　(2)17トレンチ全景(北から)
(3)20トレンチ検出石組遺構(東から)
図版第12　出土遺物(1)瓦器・土師器
図版第13　出土遺物(2)土器・陶磁器
図版第14　(1)出土遺物(3)中国製陶磁器、外面
(2)出土遺物(3)中国製陶磁器、内面
図版第15　(1)出土遺物(4)肥前陶磁器、外面　(2)出土遺物(4)肥前陶磁器、内面
図版第16　(1)出土遺物(5)土器・国産陶器、外面
(2)出土遺物(5)土器・国産陶器、内面

## ３．新庄遺跡第５次

図版第１　(1)新庄遺跡調査地遠景(上が北)　(2)新庄遺跡調査地遠景(上が西)
図版第２　(1)１区調査地全景(東から)　(2)１区調査地全景(上が東)
図版第３　(1)１区竪穴式住居跡ＳＨ5177(北東から)
(2)１区竪穴式住居跡ＳＨ5177(上が南東)
図版第４　(1)１区竪穴式住居跡ＳＨ5177(北西から)
(2)１区竪穴式住居跡ＳＨ5177(南西から)
(3)１区竪穴式住居跡ＳＨ5177内土坑ＳＫ5190(南西から)
図版第５　(1)１区調査地西部柱穴群(南から)　(2))１区土坑ＳＫ5190(西から)
(3)１区土坑ＳＫ5179(東から)
図版第６　(1)１区土坑ＳＫ5104(東から)　(2)１区土坑ＳＫ5143(東から)
(3)１区土坑ＳＫ5173(東から)
図版第７　(1)１区集石遺構ＳＸ5158(南西から)
(2)１区集石遺構ＳＸ5158(西から)
(3)１区調査地北部粘土採掘土坑群(東から)
図版第８　(1)２区調査地全景(南から)　(2)２区調査地全景(上が北)
図版第９　(1)２区調査状況(南から)　(2)２区調査状況(東から)
(3)２区西部柱穴状遺構(南西から)
図版第10　(1)３区調査地全景(上が東)　(2)３区調査地西部遺構群(東から)
図版第11　(1)３区調査地東部遺構群(南東から)
(2)３区建物跡ＳＢ5302(右)、ＳＢ5305(左)(北から)
図版第12　(1)３区建物跡ＳＢ5302・5305検出状況(東から)
(2)３区建物跡ＳＢ5302・5305検出状況(南東から)
(3)３区建物跡ＳＢ5302・5305(左側)(北から)
図版第13　(1)３区建物跡ＳＢ5302(北から)　(2)３区建物跡ＳＢ5302(西から)
(3)３区建物跡ＳＢ5302竈・土坑Ｋ２(西から)
図版第14　(1)３区建物跡ＳＢ5305(北から)　(2)３区建物跡ＳＢ5305(西から)
(3)３区建物跡ＳＢ5305竈(西から)
図版第15　(1)３区掘立柱建物跡ＳＢ5303(西から)
(2)３区掘立柱建物跡ＳＢ5303(南から)
図版第16　(1)３区掘立柱建物跡ＳＢ5303(南から)
(2)３区掘立柱建物跡ＳＢ5303(上が西)
図版第17　(1)掘立柱建物跡ＳＢ5303柱穴Ｐ５断ち割り(南から)
(2)同柱穴Ｐ５底部土器埋納状況(北から)
(3)同柱穴Ｐ５土器埋納状況(北から)
図版第18　(1)掘立柱建物跡ＳＢ5303柱穴Ｐ２(南から)

(2)同柱穴Ｐ４(南から)　(3)同柱穴Ｐ６(南から)
(4)同柱穴Ｐ７(南から)　(5)同柱穴Ｐ９(西から)
(6)同柱穴Ｐ12(南から)　(7)同柱穴Ｐ13(南から)
(8)同柱穴Ｐ17(西から)
図版第19　(1)３区溝ＳＤ53001(南西から)　(2)３区溝ＳＤ53001(北東から)
(3)３区溝ＳＤ53001断面(南西から)
図版第20　(1)３区土坑ＳＫ5304(南から)　(2)３区土坑ＳＫ5306(北から)
(3)３区土坑ＳＫ5309(北から)
図版第21　(1)４区調査地全景(南から)　(2)４区調査地全景(上が西)
図版第22　(1)４区調査地全景(東から)
(2)４区竪穴式住居跡ＳＨ5401・掘立柱建物跡ＳＢ5402(北から)
(3)４区竪穴式住居跡ＳＨ5401床面石斧出土状況(南から)
図版第23　(1)４区竪穴式住居跡ＳＨ5401(南から)
(2)４区竪穴式住居跡ＳＨ5401竈(南から)
(3)４区竪穴式住居跡ＳＨ5401竈断ち割り(南から)
図版第24　出土遺物(1)
図版第25　(1)出土遺物(2)内面　(2)出土遺物(2)外面
図版第26　(1)出土遺物(3)内面　(2)出土遺物(3)外面

４．長岡京跡左京第527次(7ANYSK-1地区)

図版第１　(1)調査前全景(東から)　(2)調査前全景(南西から)
(3)調査地全景(南から)
図版第２　(1)調査地全景(東から)　(2)調査地全景(西から)
(3)Ａ地区埋土堆積状況(北から)
図版第３　(1)Ａ地区全景(東から)　(2)Ａ地区溝検出状況(北から)
(3)Ａ地区遺構検出状況(北から)
図版第４　(1)Ｂ地区全景(東から)　(2)Ｂ地区溝検出状況(南から)
(3)Ｂ地区埋土堆積状況(東から)

# 1.俵野廃寺第２・３次発掘調査報告

## １．はじめに

今回の調査は、俵野川地域防災対策事業（緊急河川整備）に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて当調査研究センターが行った。俵野廃寺は、京丹後市網野町俵野に所在する白鳳期の古代寺院である。丹後地域で、現在、確認されている寺院は、奈良時代の丹後国分寺跡と俵野廃寺の２か所のみであり、飛鳥時代の寺院としては俵野廃寺のみである。

当事業に伴う俵野廃寺の調査は、平成18年度から実施している。平成18年度には工事対象地内において150㎡の試掘調査を行い、２地点において多量の瓦堆積を確認した[注1]。平成19年度は、試掘調査の成果を受けて、遺構・遺物を確認した地点に調査区を設定し、調査を実施した（第２次調査）。第２次調査は、平成19年10月17日から平成20年２月８日まで実施した。調査面積は600㎡である。平成20年度は、第３次調査として遺跡範囲の北限に当たる地点で調査を実施した。現地調査は、平成20年４月30日から平成20年６月６日まで実施した。調査面積は100㎡である。現地説明会は、第２次調査時の平成19年１月27日に開催した。

調査は、調査第２課課長補佐兼第３係長石井清司ならびに同調査員村田和弘が担当し、現地調査は村田が担当した。執筆は、主に村田が担当し、一部、調査第１課長兼調査第２課長肥後弘幸が担当した。

調査に際しては、京都府教育委員会ならびに京丹後市教育委員会をはじめとする諸機関ならびに地元の方々に、ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝したい[注2]。

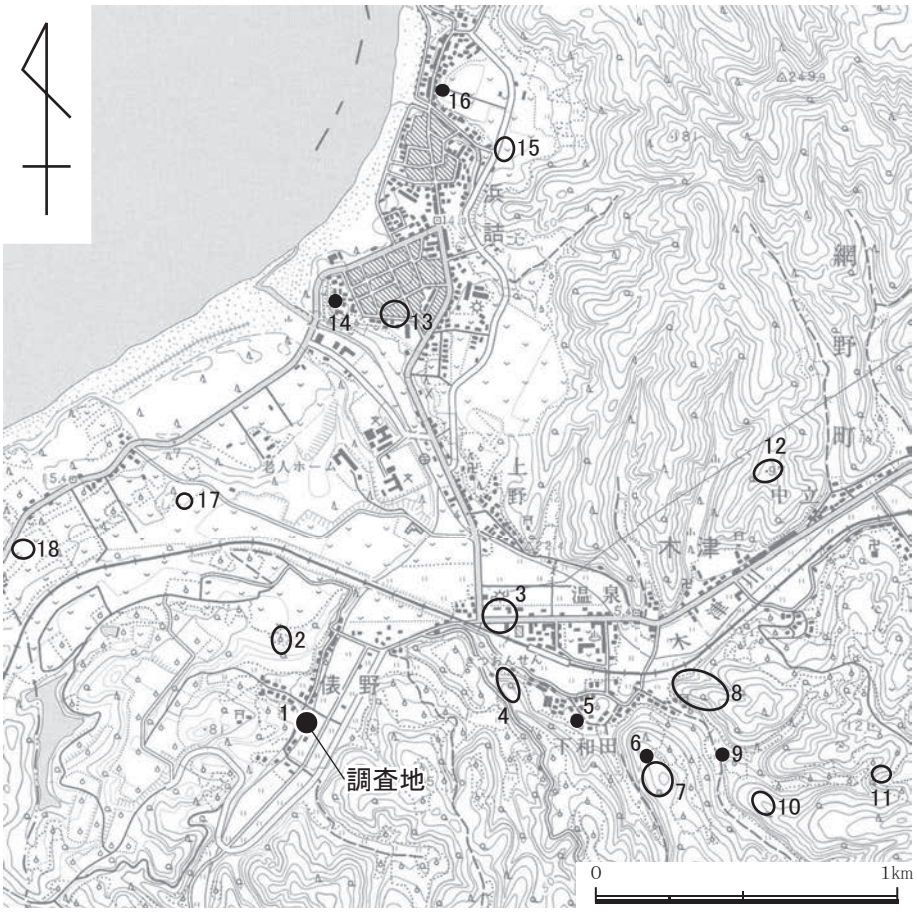
なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

## ２．歴史・地理的環境

俵野廃寺が所在する京丹後市網野町は、丹後半島西部に位置し、約17kmにわたって日本海に面している。中心部の網野付近には、北流する福田川に沿って小さな平野部があり、町域西部の木津温泉周辺にも平野部があるが、それ以外は山間地である。

俵野廃寺は、北近畿タンゴ鉄道宮津線丹後木津温泉駅より西へ約700mにある北に開口する幅約150mほどの狭い谷筋の西側丘陵の裾部に立地している。俵野川は、現在は西側丘陵の裾部に沿うように流れているが、大正11年に行われた流路の変更工事前まで、谷の中央部を流れていた。

俵野廃寺の周辺の日本海に面したところでは、昭和32年に発掘調査が行われ縄文時代後期（約3,000～4,000年前）の貝塚や竪穴式住居跡が発見された浜詰遺跡、丘陵上には浜詰古墳群や大泊古墳群・はやし古墳などが存在する。平野部の木津川流域では、縄文時代前期～弥生時代中期、古




１．**俵野廃寺（今回の調査地）**　２．丹ノ谷古墳群　３．松ヶ崎遺跡
４．大森城跡　５．下和田古墳　６．女布谷西古墳　７．下和田Ｂ城跡
８．下和田Ａ城跡　９．売布神社経塚　10．女布谷古墳群　11．天王山古墳群
12．中館城跡　13．浜詰遺跡　14．浜詰経塚　15．浜詰古墳群
16．はやし古墳　17．月出遺跡　18．柴古遺跡

第１図　遺跡分布図（国土地理院S=1/25,000　久美浜）

墳時代～奈良時代の複合集落遺跡である松ヶ崎遺跡、丘陵上には下和田古墳や下和田Ａ・Ｂ城跡、大森城跡などが分布している（第１図）。

## ３．調査の経緯

### （１）俵野廃寺の発見

俵野廃寺は、大正11年の俵野川流路変更工事の際に発見された寺院跡である。当時、河川の付け替え工事での掘削中に、塔の心礎と思われる礎石と土器、複弁蓮華文軒丸瓦などが採取された。発見された心礎は、「木津村誌」木津村誌編集委員会編（1986年）には、径約1.8m、高さ0.58mを測り、ほぼ円形の自然石の上面を削平し、中央に約径0.15m、深さ0.16mの舎利孔を穿つものであったと記されている。そのほかに、心礎の付近には布目瓦の破片が層になって埋まっていたと瓦が発見された状況が記載されている。さらに、昭和24年頃には、礎石が発見された位置より10mほど北側での護岸工事の際に柱根数本と鬼瓦が発見された。また、昭和58年に俵野川改修護岸

工事が行なわれた際には、暗褐色の地層からほぼ完形の重弧文軒平瓦や布目の平瓦、須恵器などが発見されている。(注3)

俵野廃寺は、発見された鋸歯文のある複弁蓮華文軒丸瓦、重弧文の軒平瓦、細かい布目痕、格子のタタキ痕などの特徴から、飛鳥・白鳳時代にあたる７世紀後半の丹後地域最古の古代寺院として注目されている遺跡であるが、これまでに発掘調査は行われていなかった。さらに、地名では調査地の周辺の字名に、塔の坪、寺口、寺屋敷、防垣などの寺院を思わせる地名が残っている。また、与謝郡成相寺に伝わる「正徳元年」(1288年)の「丹後国諸庄郷保惣田数帳」には、木津の条下に「一町三段旦経寺十八町五段百八十歩同帰院」と記載されており、古くからこの地に寺院があったことが推定されていた。

これまで発掘調査は行なわれていなかったため、伽藍配置や寺域などの詳細については不明である。なお、遺跡地図には寺域の規模は、礎石発見地を中心に100m前後四方と想定され、遺跡範囲として記載されている。(注4)

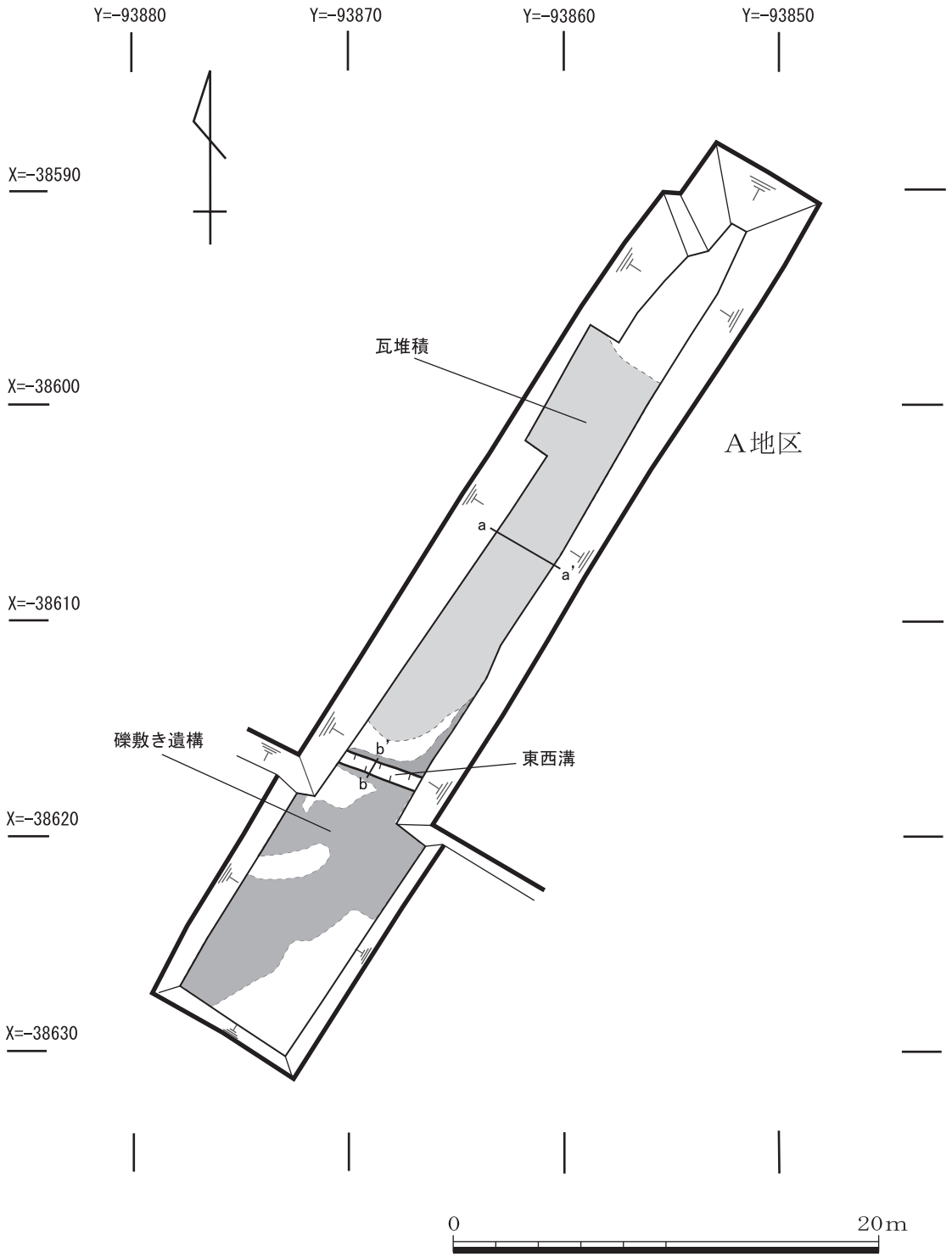
### (２)調査経過

当センターでは、俵野川地域防災対策事業(緊急河川整備)に伴い本格的な調査を平成18年度から３度にわたって実施している。平成18年度の第１次調査は、遺跡の範囲確認と遺構の遺存状態の確認のための試掘調査を実施した。平成19年度には、第２次調査として、遺構を確認した地点を中心に調査区を拡張し調査を実施し、平成20年度に第３次調査を遺跡範囲の北限において実施した(第２図)。

第１次調査は、３か所に試掘トレンチを設定して行った。その結

第２図　調査地周辺地形図

果、北側で設定した試掘①と心礎が発見された付近に設定した試掘②で、多量の瓦が堆積する層をトレンチ全域で検出した。南側に設定した試掘③では、幅約1.5mで、長さ約50mのトレンチを設定し、トレンチの北側において、旧水田の床土直下で拳大の礫層を確認し、上面において瓦の散布を確認した。トレンチの南側は、現地表面から約1.2mまで一部であるが掘削したが、河川の氾濫による粘土と砂の堆積層を確認したのみで、遺構・遺物は確認できなかった。試掘結果




第３図　A地区遺構配置図

を受けて、関係機関との協議のうえ、平成19年度(第２次調査)の調査範囲を決定した。

第２次調査は、多量の瓦堆積を確認した試掘①・②の調査範囲を拡張して実施した。着手順に試掘②を拡張した調査区をＡ地区、試掘①を拡張した調査区をＢ地区と呼称し、調査を実施した。

まず、現地表面から遺構が確認できた面の直上まで、重機による掘削を行い、それ以降は人力による掘削作業を行った。Ａ地区では、調査区内の中央部分において、多量の瓦の堆積を確認した。瓦は小片から完形品に近いものまで出土し、少量であるが須恵器・土師器などの土器も出土した。南側では、後世の削平によって部分的に消失していたが、拳大の礫が敷き詰められた状態を広範囲で検出した。Ｂ地区では、試掘①を中心とする広範囲で瓦の堆積状況を確認した。東側では、杭が南北方向にならんだ護岸施設と思われる遺構を確認した。

第３次調査は、Ｂ地区の北側に隣接して調査区を設定し、Ｃ地区として調査を実施した。調査は、第２次調査までと同様に遺構面直上までを重機で掘削し、それ以降は人力で掘削を行った。検出した遺構は、西側で瓦の堆積、東側では南北方向の溝や杭列を検出した。

なお、出土した遺物の整理作業および概要報告作成については、協議のうえ、平成20年度に第２・３次調査の成果をまとめて報告することとなった。

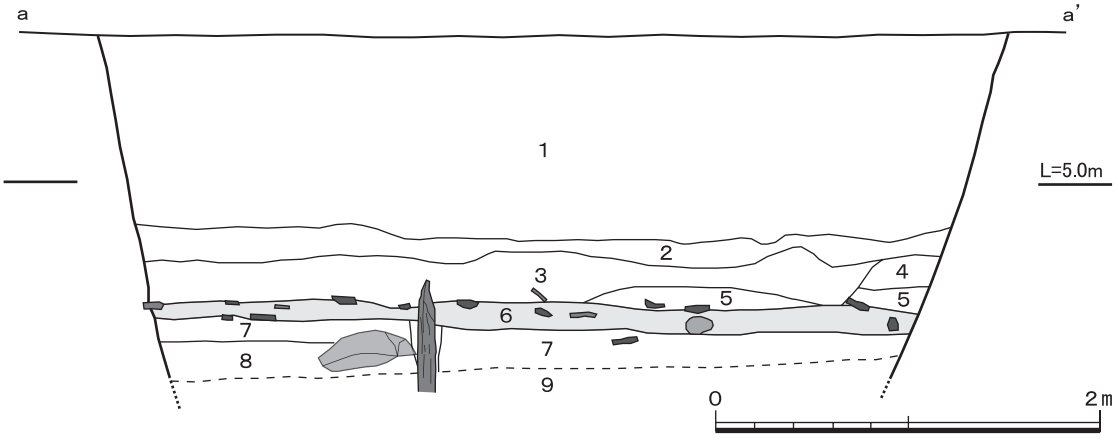
## ４．調査概要

### （１）第２次調査

平成19年度の調査は、前年度の試掘調査で瓦堆積を確認した試掘①・②を拡張し、Ａ・Ｂ地区として調査を実施した。

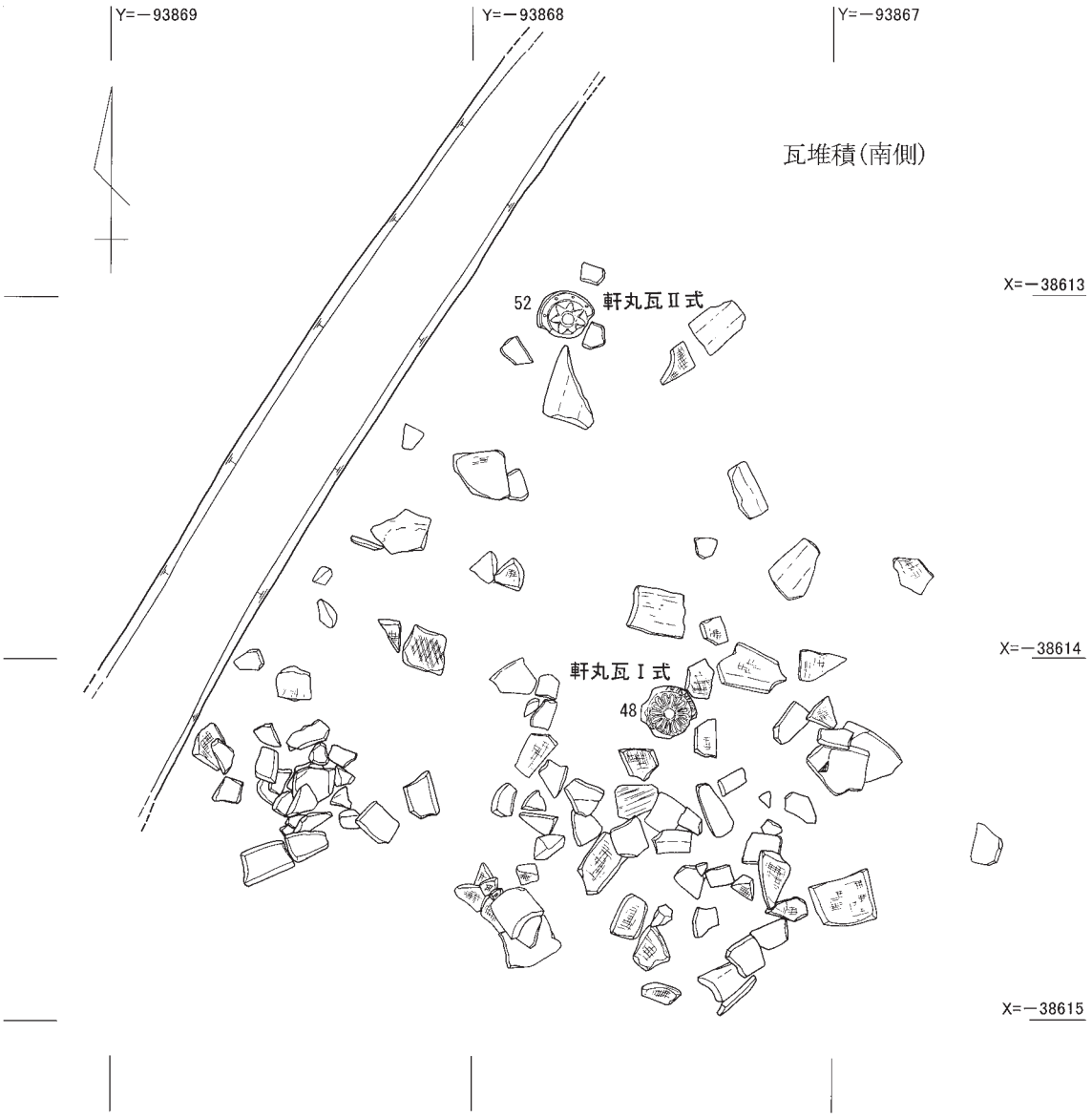
#### ①Ａ地区

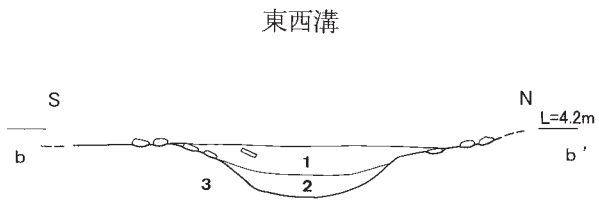
現地表面より約1.4mの深さで遺構面を確認した。Ａ地区の中央部分において、南北約20mの広範囲で瓦堆積を検出した。また、南側では５～10cmほどの大きさの礫からなる礫敷き遺構を広範囲で検出した(第３・４図)。



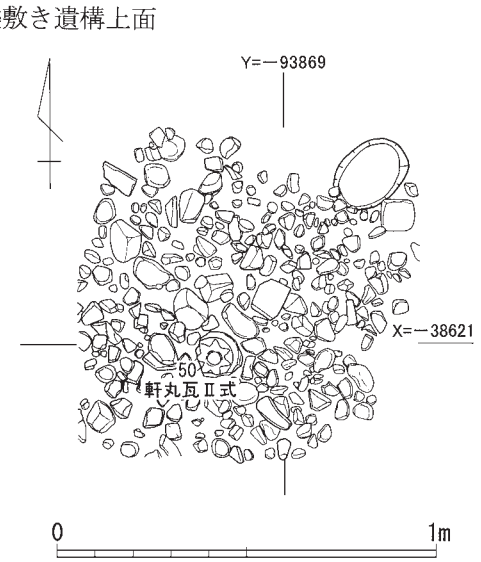

１．黄褐色粘質土(造成による盛土)
２．暗灰褐色粘土(旧耕作土)
３．暗茶褐色粘土(旧耕作床土)
４．灰褐色粘土
５．暗灰褐色粘土
６．黒灰色粘質土(瓦堆積層)
７．暗青灰色粘性砂質土(多量の礫混入)
８．黒灰色粘土
９．暗茶灰色砂

第４図　Ａ地区土層断面図



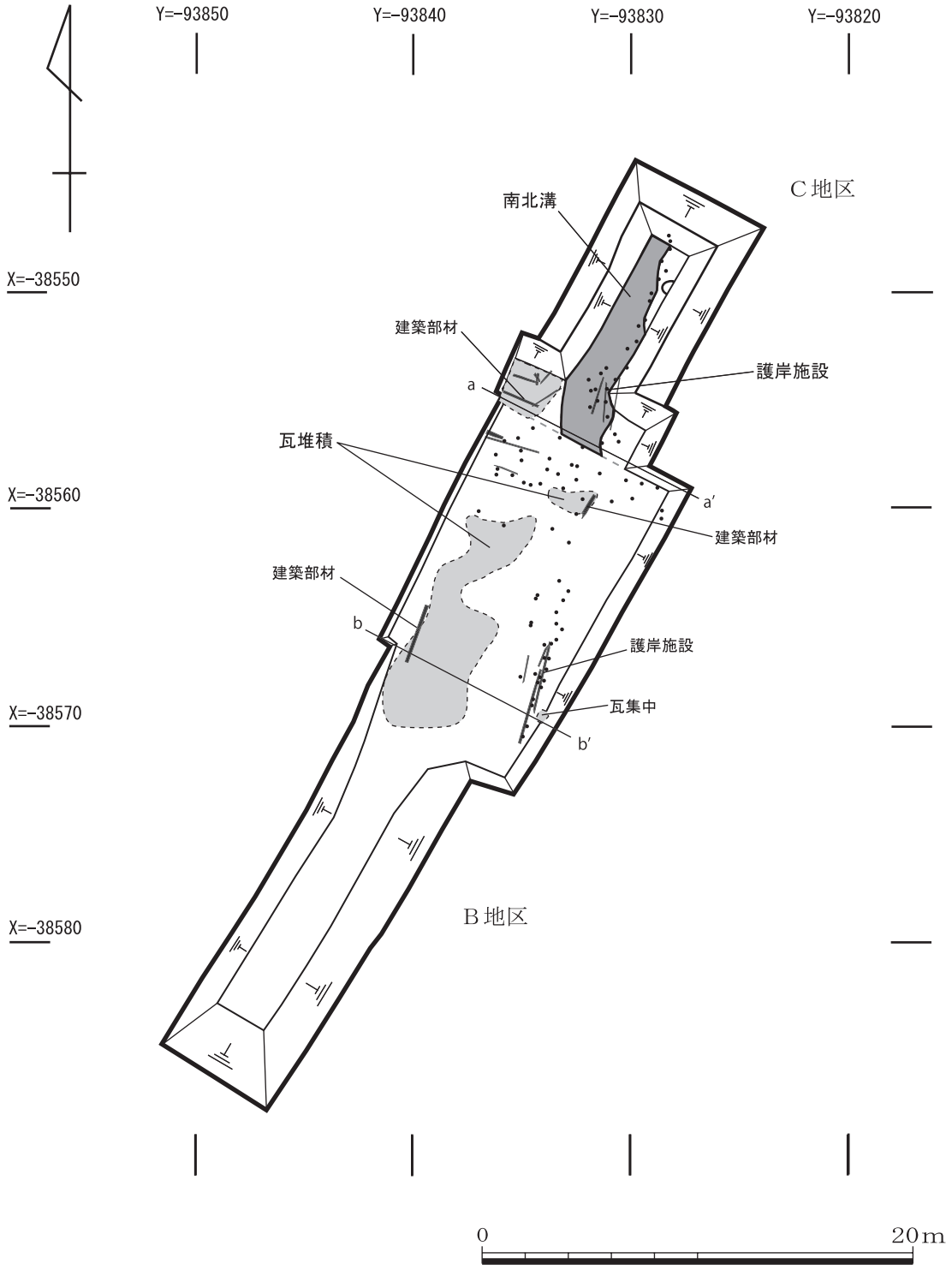




1. 黒灰色粘質土(粘性が強い、瓦片を含む)
2. 暗青灰色粘土(白灰色粒を含む)
3. 暗青灰色粘質土(礫を含む)

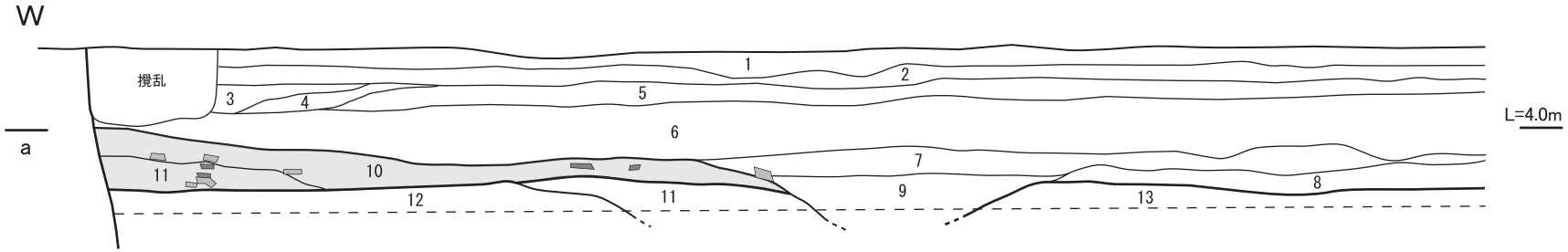


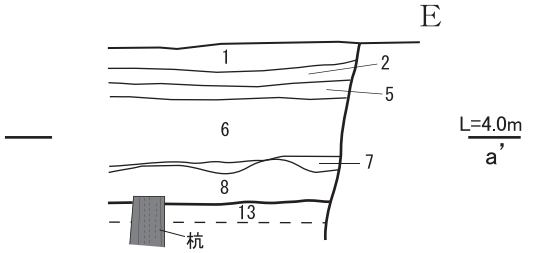

第５図　Ａ地区瓦堆積南側遺物出土状況図(上)・Ａ地区東西溝土層断面図(左下)
Ａ地区礫敷き遺構上面遺物出土状況図(右下)(1/20)

**瓦堆積**　堆積層の厚さは15～20cmを測り、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・熨斗瓦などが出土した。瓦の堆積は、北端から南へ15mほどまでは厚く堆積していたが、南側残りの５mについては疎らに散布されている程度の状況であった。瓦堆積の範囲の南側では、これまでに発見されている複弁蓮華文軒丸瓦（以後、報告上「軒丸瓦Ⅰ式」とする）とは瓦当の文様が異なる七葉の花弁を持つ形式の軒丸瓦（以後、「軒丸瓦Ⅱ式」とする）が出土した（第５図上）。また、若干であるが

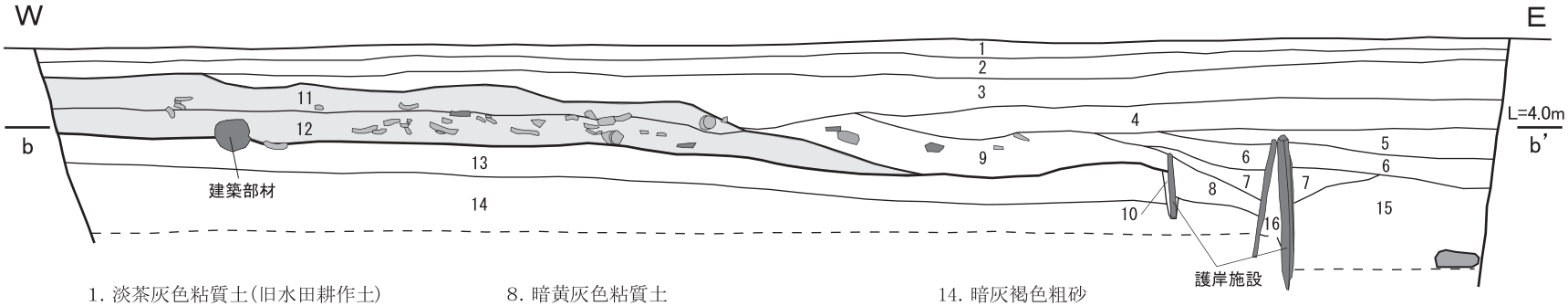



第６図　B・C地区遺構配置図



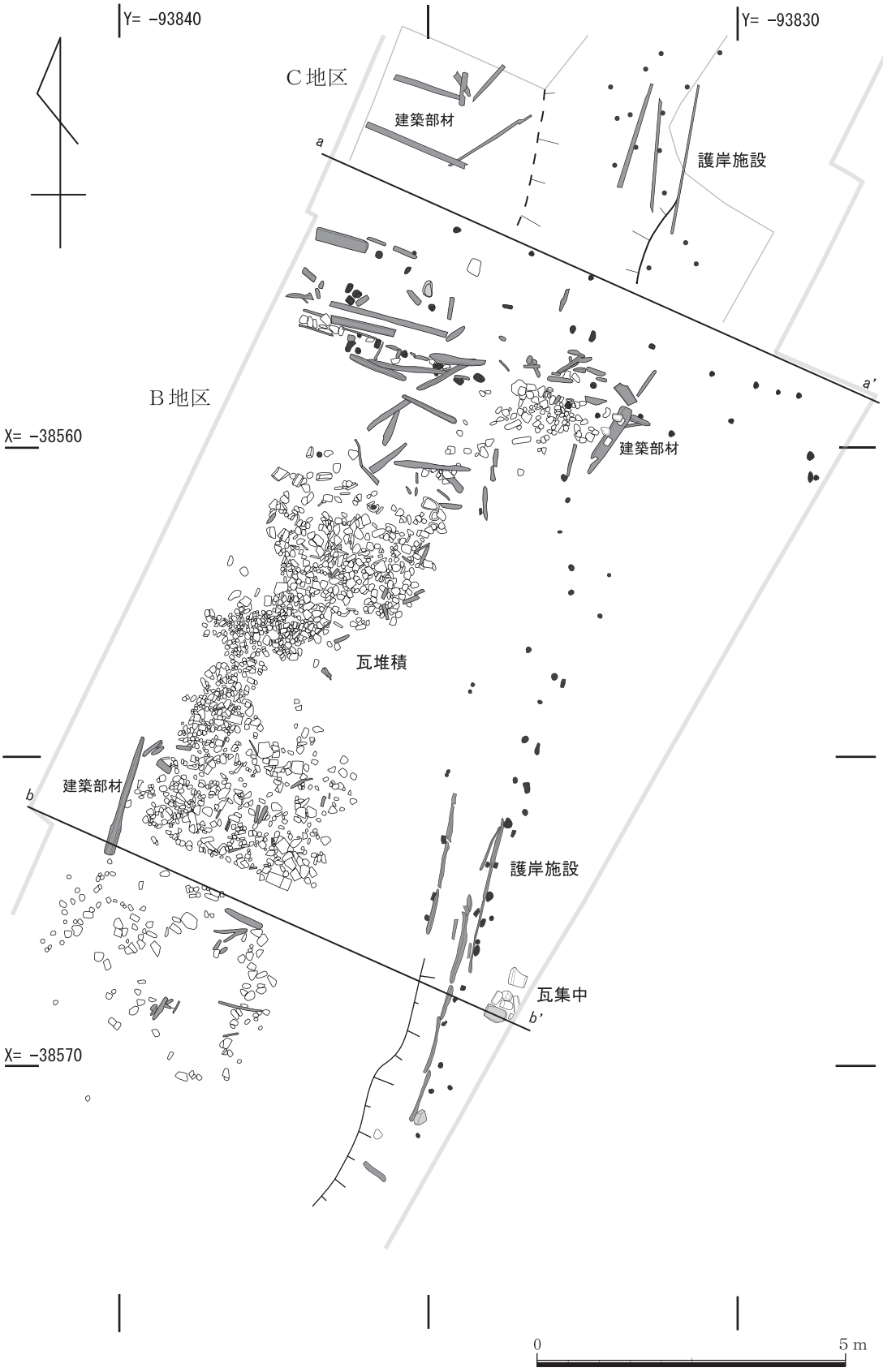




1．淡茶褐色粘砂（旧水田耕作土）
2．淡茶灰色粘質土（旧水田耕作土）
3．暗茶灰色粘土
4．黒褐色粘土
5．淡灰色粘土(旧水田床土)
6．暗灰色粘土
7．暗灰色粘土(やや濁る、木片を含む)
8．淡黒灰色粘土(遺物・木片を含む)
9．淡青灰色粘性砂(木片を多く含む)
10．黒灰色粘土(遺物・木片を多く含む)
11．淡灰色粘性砂(木片を含む)
(10・11は瓦堆積層)
12．暗青灰色粗砂(木片を含む)
13．淡青灰色細砂

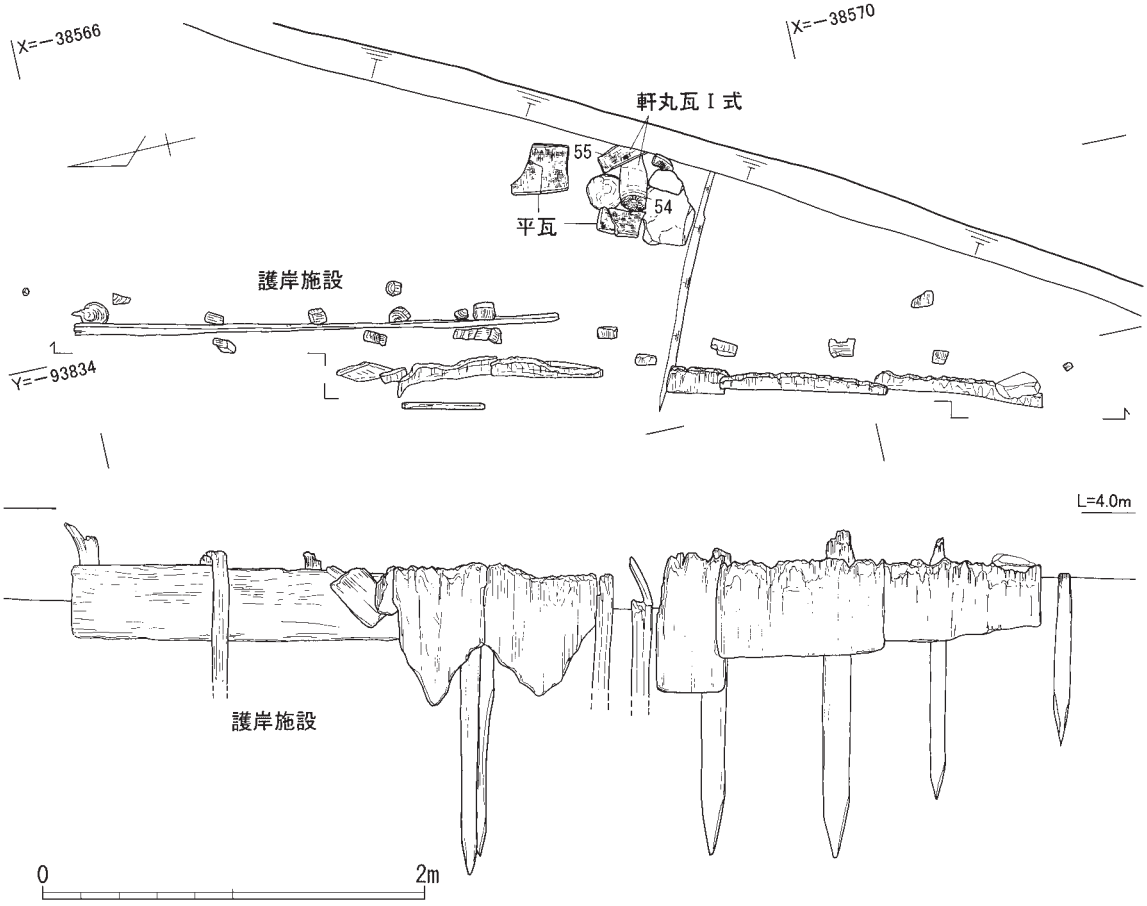



1. 淡茶灰色粘質土(旧水田耕作土)
2. 淡灰色粘土(旧水田床土)
3. 淡灰色粘土
4. 淡灰褐色粘質土(木片を少し含む)
5. 淡黄灰色粘性砂質土
6. 暗褐色粘質土
7. 淡褐色粘性砂質土
8. 暗黄灰色粘質土
9. 暗灰褐色粘質土(遺物・木片を含む)
10. 淡灰色粘土
11. 黒灰色粘土(遺物・木片を多く含む)
12. 淡灰色粘性砂(遺物・木片を含む)
(11・12は瓦堆積層)
13. 暗青灰色粗砂(木片を含む)
14. 暗灰褐色粗砂
15. 暗青灰色粘性砂
16. 暗灰色粘質土

第７図　Ｂ地区土層断面図




第８図　Ｂ地区北側遺構配置図




第９図　Ｂ地区東側護岸施設実測図

瓦堆積の上層部および上面から平安時代の土器が出土し、瓦堆積の下層部および直下層から飛鳥時代の土器が出土した。

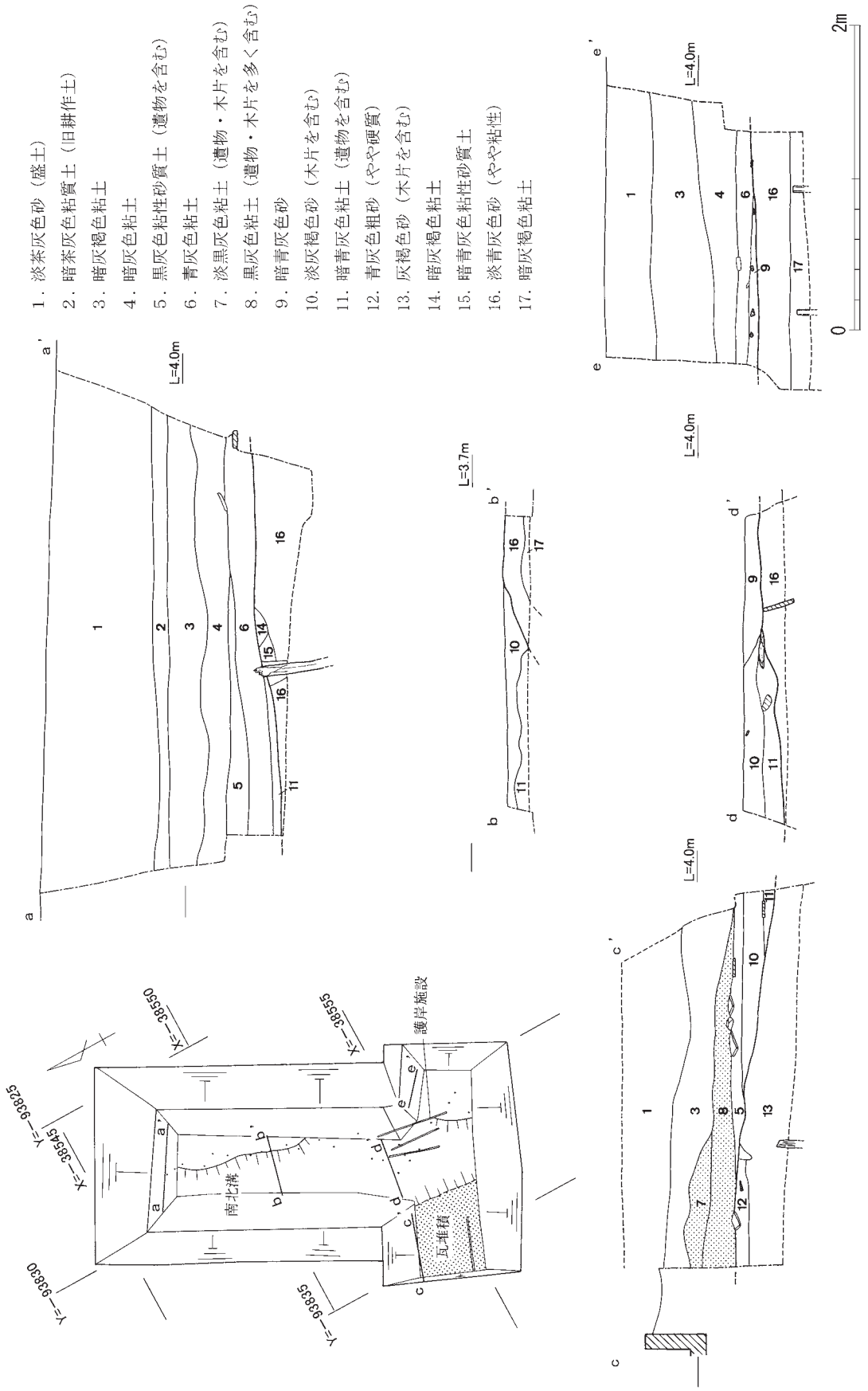
**東西溝**　幅約0.8m、深さ約0.15mを測る。N110°Eを測る。この溝を境に、北側では瓦堆積が広がり、南側では礫敷きが広がる。溝の埋土の１層には、瓦が多く混じる黒灰色粘質土があり、この層が瓦堆積層と同一のものと考えられる（第５図左下）。これらの状況から、建物域と礫敷きの広場的な空間を区分けする溝であった可能性が考えられる。

**礫敷き遺構**　調査区の南側で、広範囲にわたって５～10cmほどの大きさの礫が敷き詰められた状態を検出した。礫の上面では、少量ではあるが軒丸瓦Ⅱ式などの瓦や土器の破片が礫に挟まった状態で出土した（第５図右下）。広範囲におよぶ礫敷きは、表面にはほとんど凹凸がなく、平面を意識して敷き詰められている状態であった。一部、礫がない部分は、後世の田畑の開墾等で削平を受け消失したと考えられる。

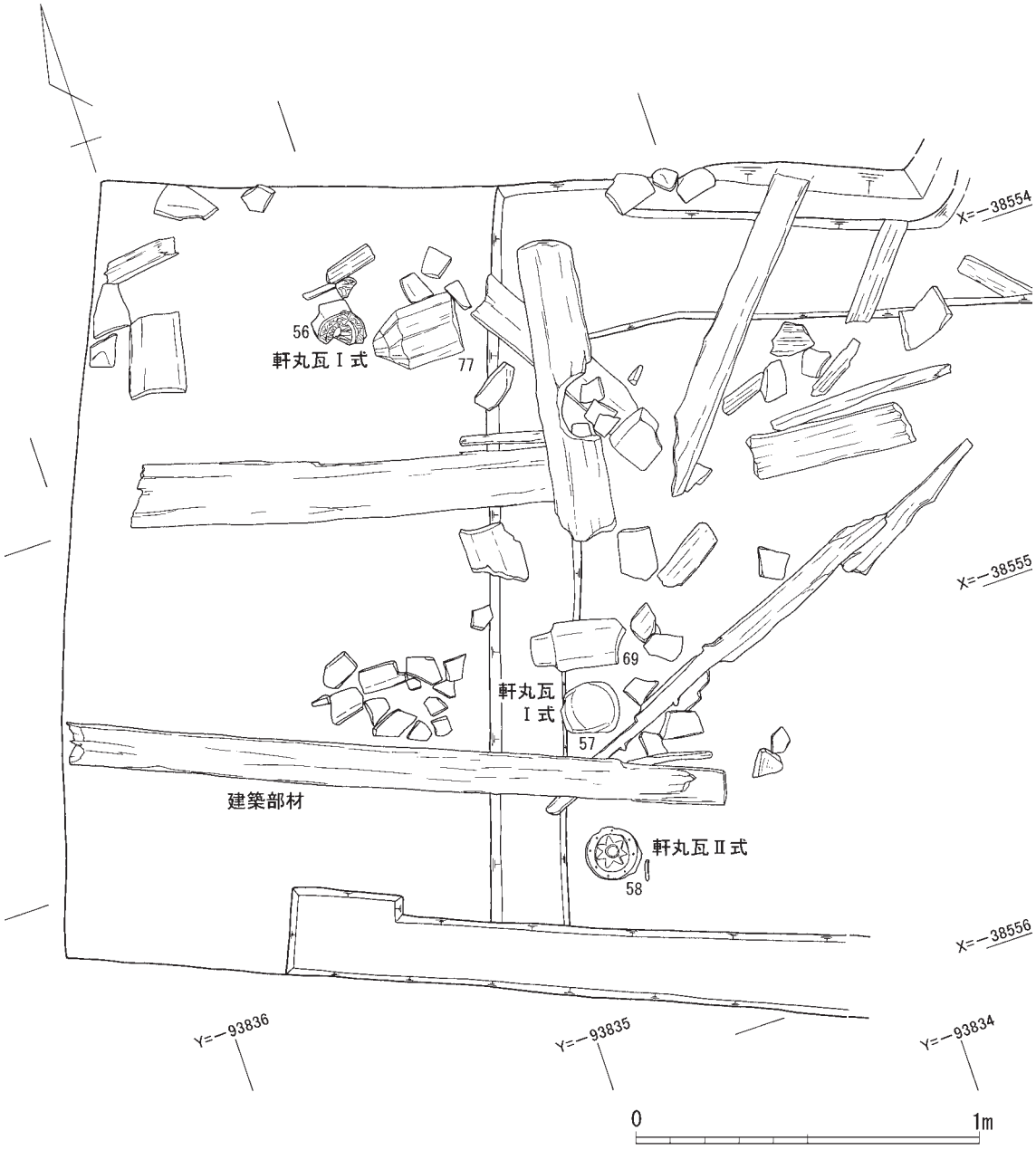
②Ｂ地区

現地表面から約0.4～0.6mの深さで遺構面を確認した。Ｂ地区の西側半分で、広範囲で瓦の堆積を検出し、東側では南北方向に杭が並ぶ護岸施設と思われる遺構を検出した（第６・７図）。

**瓦堆積**　瓦の堆積層の厚さは15～30cmを測り、Ａ地区より堆積が厚いが小片が比較的多い。瓦には丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・熨斗瓦などがある。軒丸瓦は、軒丸瓦Ⅰ式のみ出土してい




第10図　Ｃ地区土層断面図

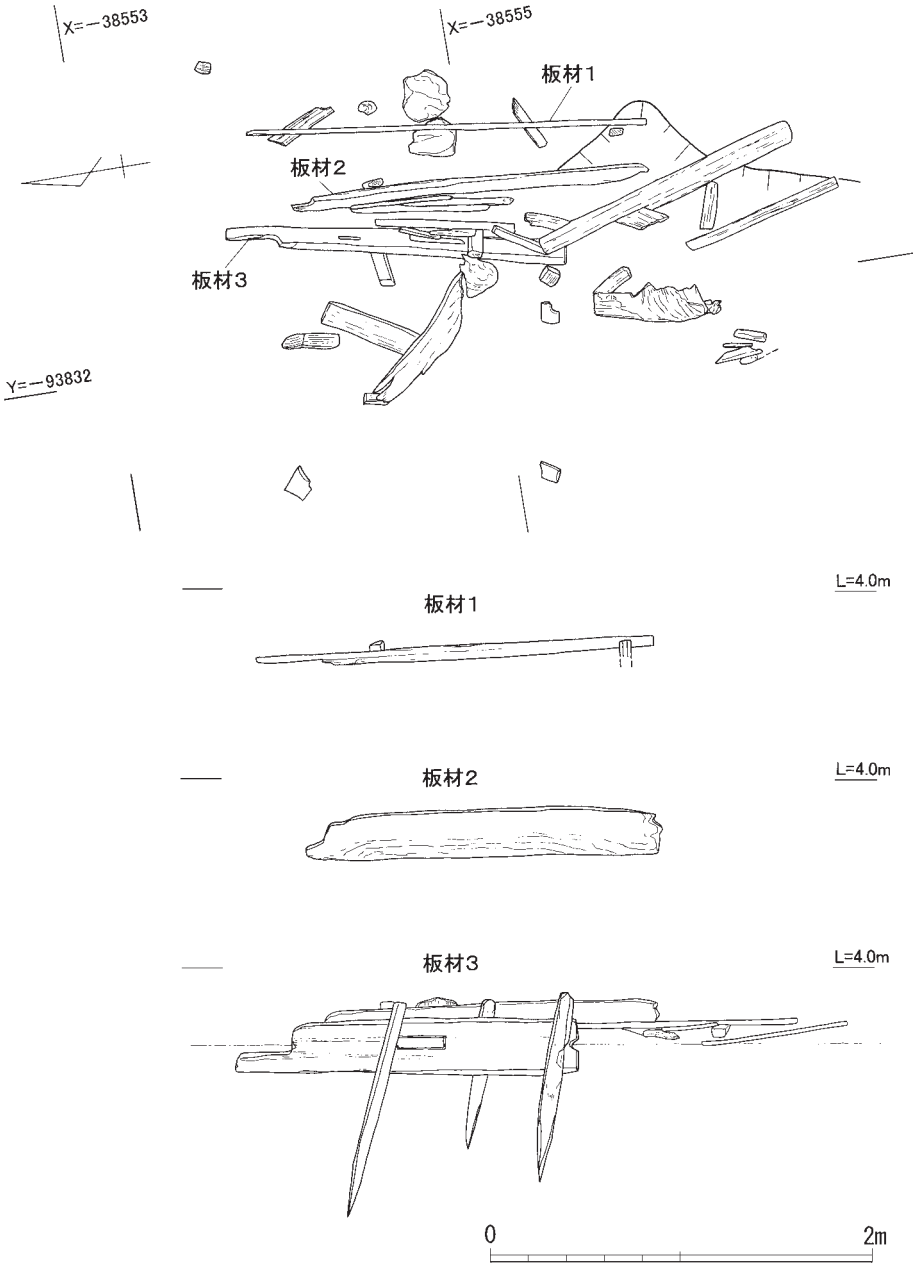



第11図　C地区遺物出土状況図

る。また、若干であるが瓦堆積の上層部および上面から平安時代の土器が出土、瓦堆積の下層部および直下層から飛鳥時代の土器が出土した。また、建築部材と思われる柱材や木材片が多く出土した(第８図)。

**護岸施設**　調査区の東側で南北方向の杭列を検出した。一部には横板が残っており、河川からの氾濫を防ぐために設けられた護岸施設と考えられる(第９図)。杭には丸材と角材があり、太さ長さともに不揃いのものであり、そのなかには枘穴が残るものもあり再利用されたものと考えられる。また、横板のなかには矢板のように下部の先端を尖らせたものもあり、当時の護岸の状態が確認できた。さらに、瓦堆積の北側には東西方向にも杭列があり、部分的に板材が残っているところもあったが、瓦堆積の北側と東側は湧水が多く、溝などの遺構は検出できなかった。

この護岸の杭や横板の上に瓦堆積層が被っていることから、寺がまだ存続していた時期か瓦が片づけられる以前に設けられたものと思われる。また、護岸施設の東側の調査区の東端部では、完形に近い軒丸瓦Ⅰ式が２点と平瓦が２点がまとまって出土した。




第12図　C地区東側護岸施設実測図

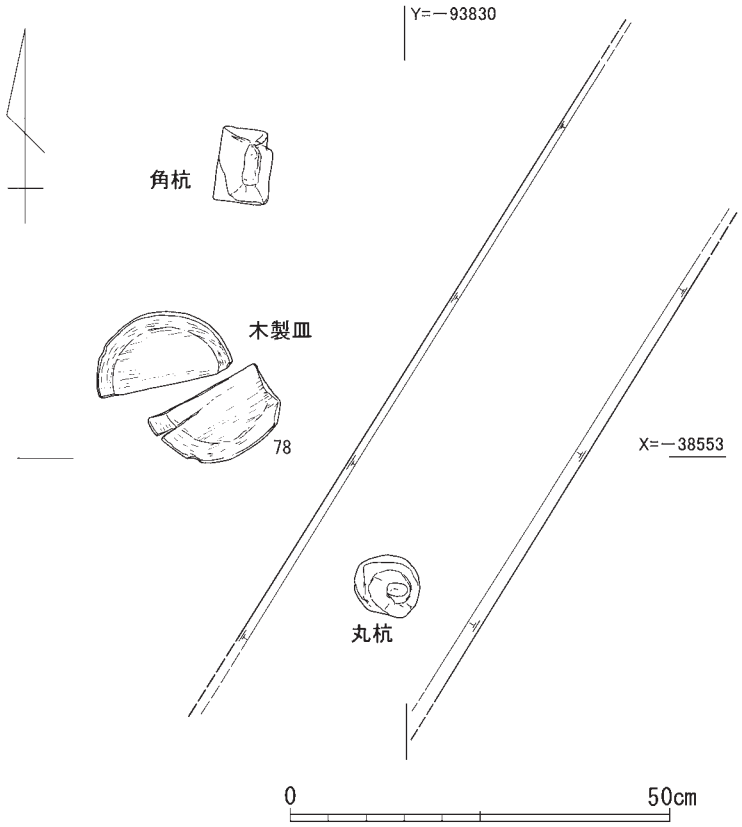
**（２）第３次調査**

Ｃ地区は、遺跡範囲の北限に位置している。調査区は、Ｂ地区の北側に隣接して設定した（第６・10図）。

**瓦堆積**　西側では、瓦や土器などが出土する層を確認した。第２次調査の瓦堆積に比べると遺物量は少ないが、瓦や土器のほかに、建築部材を含む木材が出土した。軒丸瓦では軒丸瓦Ⅰ式２点のほかに、軒丸瓦Ⅱ式が１点出土した（第11図）。第２次調査では、Ａ地区の瓦堆積南端部でしか軒丸瓦Ⅱ式は出土していなかった。遺跡北部での出土は唯一である。また、瓦堆積の下層部および直下層から飛鳥時代の土器が出土した。調査区の北半部では、瓦の堆積は確認できなかった。

**護岸施設**　Ｂ地区で検出した南北方向にならぶ護岸施設の北側に延びる延長部分を検出した。杭列は、２列に打たれており、一部分ではあるが横板が残るところがある（第12図）。使われている杭や板材には枘穴が残っており、再利用の可能性が高いと思われる。

**南北溝**　調査区中央で、杭列の西側で同方向の幅約2.5mの溝を検出した。深さは0.2mを測り、




第13図　C地区南北溝内木製品出土状況図

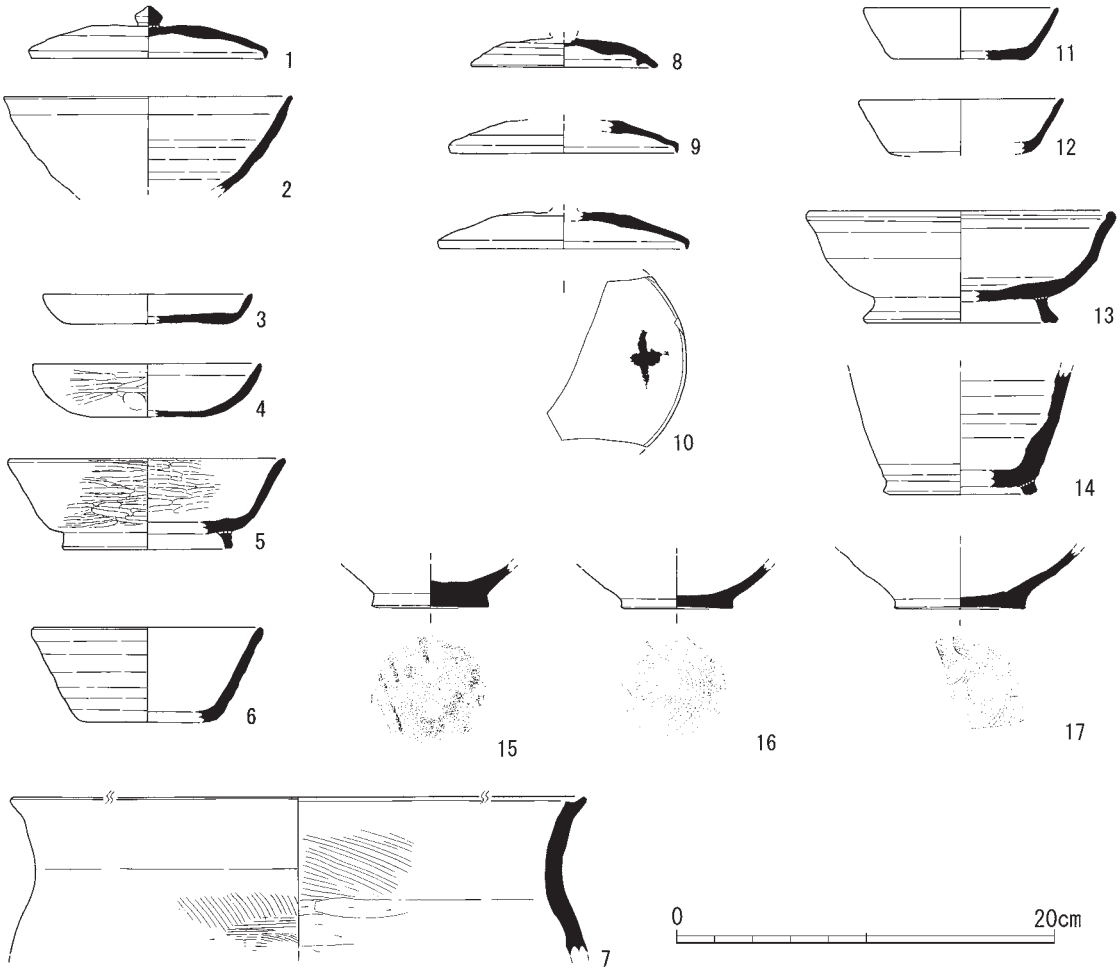
溝内からは、多くの量の土器が出土した。また、木製の皿が出土した（第13図）。溝の埋土には、木材片が多く含まれており、水が流れて堆積したことがわかる。

## 5．出土遺物

### （1）土器類（第14・15図）

1～17は、第2次調査で出土した土器である。1・2は、A地区で出土した。1は、瓦堆積層（第4図6層）から出土した宝珠形のつまみをもつ須恵器の蓋である。2は、礫敷きの上面から出土した須恵器の杯である。3～17は、B地区で出土した土器である。3は、瓦堆積層（第7図断面b11層）から出土した土師器の皿である。4は、瓦堆積層（第7図断面b12層）から出土した土師器の杯である。外面にはミガキ調整がみられる。5は、瓦堆積の上面（第7図断面b11層）で出土した土師器の高台付きの杯である。内外面には、ミガキ調整が施されている。6は、瓦堆積の上面（第7図断面a10層）で出土した須恵質の椀と思われる。胎土はやや軟質であり、色調は黒灰色である。7は、瓦堆積の下部（第7図断面a11層）で出土した土師器の甕で、口縁部から頸部にかけての破片である。8～10は、須恵器の蓋である。8・9は、瓦堆積の下部（第7図断面b11層）で出土した。10は、瓦堆積の北側にある東西方向の杭列の板材付近で出土した。内面には、漆で「十」字の記号が記されている。11･12は、瓦堆積層（第7図断面b12層）から出土した須恵器の杯である。13は、瓦堆積の下層（第7図断面b12層）から出土した高台付きの杯で、口径が15.9cm、器高は5.9cmと大型である。14は、瓦堆積の南辺部で出土した須恵器の壺の底部である。15～17は、瓦堆積の上部（第7図断面b11層）で出土した須恵器の椀で、底部は糸切り高台である。

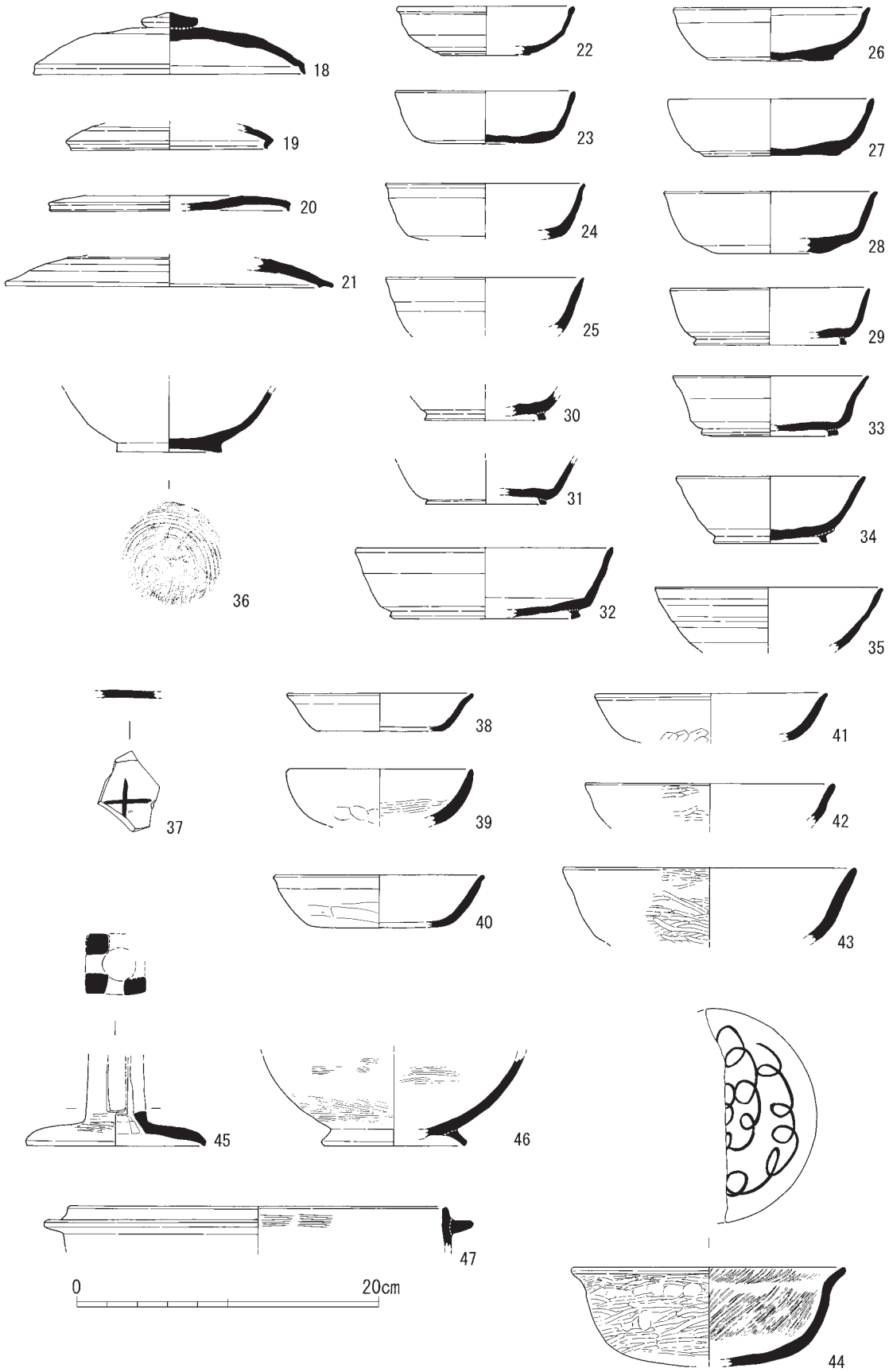
18～47は、第3次調査で出土した土器である。18～21は、瓦堆積層直下（第10図5層）から出土した須恵器の蓋である。22～28は、瓦堆積の下部および下層（第10図8・12層および5・12層）から出土した須恵器の杯である。29～34は、瓦堆積の下部および下層から出土した高台をもつ須恵器の杯である。35・36は、瓦堆積（第10図8層）から出土した。35は須恵器の椀の口縁部と思われる。36は須恵器の椀で、底部には糸切り痕がある。37は、瓦堆積層（第10図8層）から出土した須恵器の破片で、外面に墨書で「十」字の記号が書かれている。38は、瓦堆積層（第10図7層）から



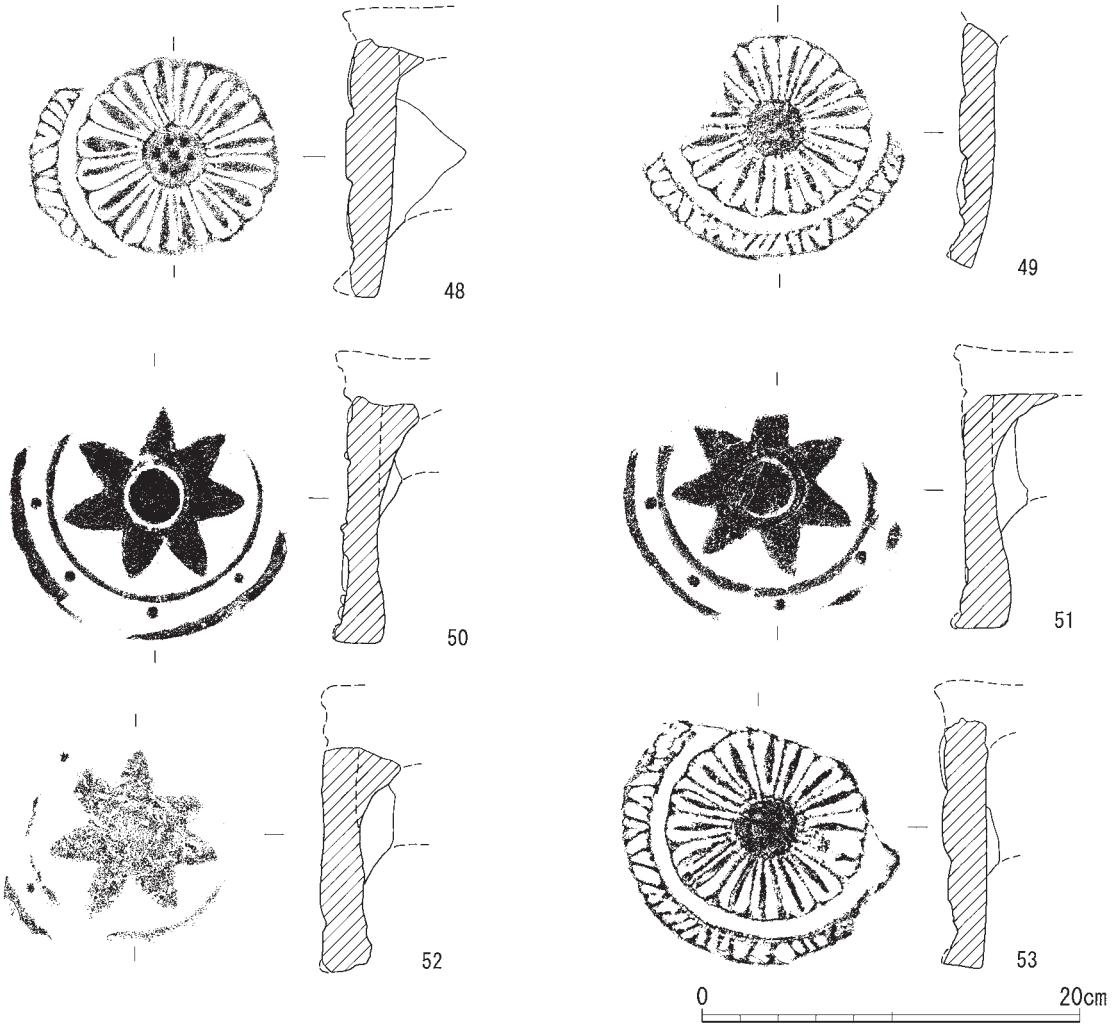

第14図　出土遺物実測図　土器(1)

出土した土師器の皿である。39～42は、瓦堆積層の下部および下層から出土した土師器の杯である。41・42の底部外面にはヘラケズリ後ナデの調整がみられる。43は、南北溝(第10図11層)から出土した土師器の杯の口縁部と思われる。磨滅が著しいがミガキの調整痕がみえる。44は、南北方向の溝の底から出土した土師器の杯である。外面には、横方向のミガキ調整があり、内面には口縁部から底部にかけて放射状暗文、底部には螺旋暗文が施されている。45は、南北溝から出土した土師質の土器で、高杯の脚部と思われる。長方形の透かしが４方向にある。内外面には赤色の顔料が塗られている。46は、南北溝から出土した土師質の壺か鉢と思われるが、底部に高台が付く。この土器の内外面にも、赤色の顔料が塗られている。47は、瓦堆積(第10図７層)の上面で出土した土師器の羽釜の口縁部である。

今回の調査で出土した遺物のなかで、瓦堆積層の下層部や直下層から出土した土器は、寺が存続していた時期を示すものと思われる。この土器群を観察すると、７世紀末から８世紀初めごろにまとまっている。第１次調査で報告した土器で、高台をもつ須恵器杯Ｂが７世紀後半と、古い要素はあるにしても全体的に考えると寺の造営時期は、若干下る可能性も考えられる。また、瓦堆積の上面や上層で出土した土器は、寺の廃絶あるいは廃絶後の再堆積の時期で、平安時代中期(10世紀代)と思われる。




第15図　出土遺物実測図土器(2)

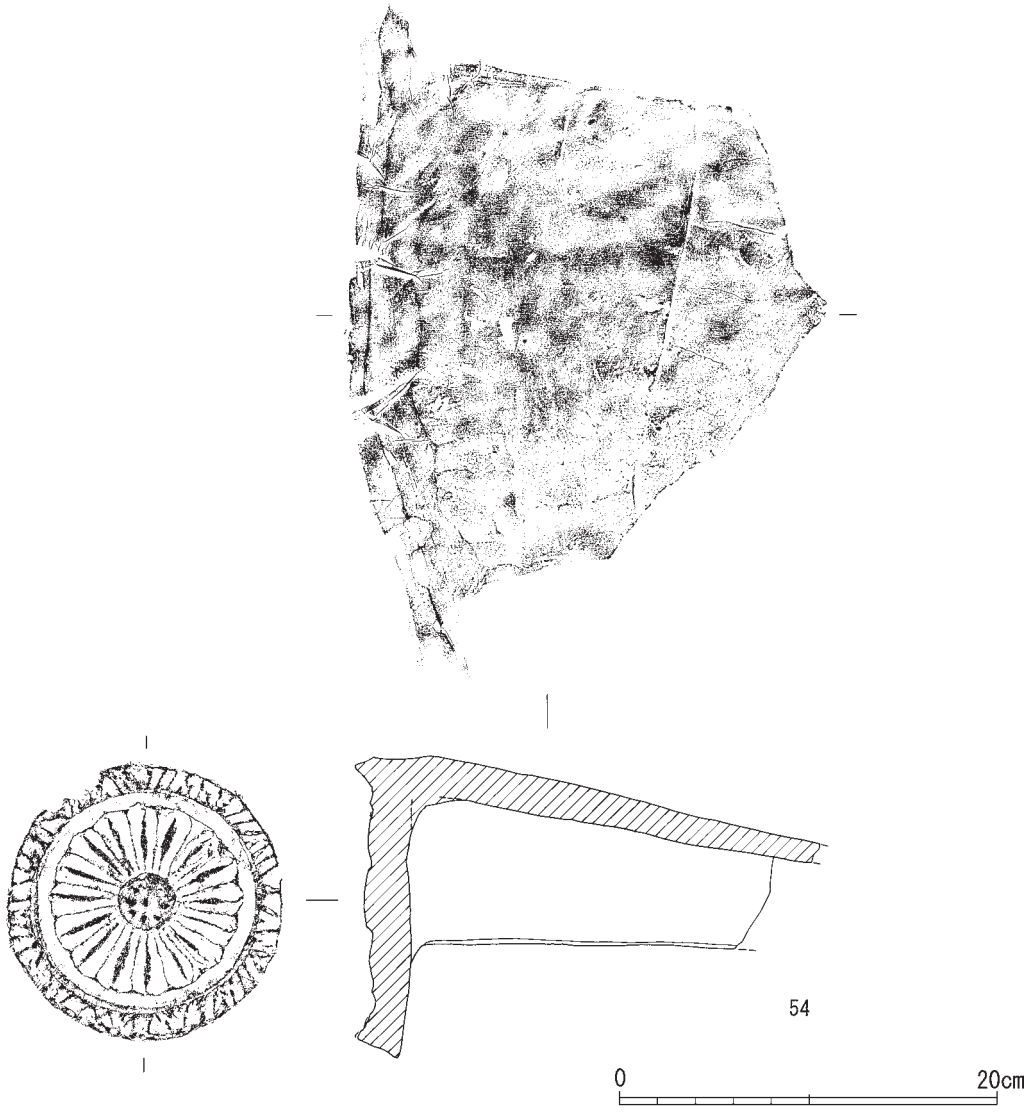



第16図　出土遺物実測図　瓦(1)

（２）瓦類（第16～26図）

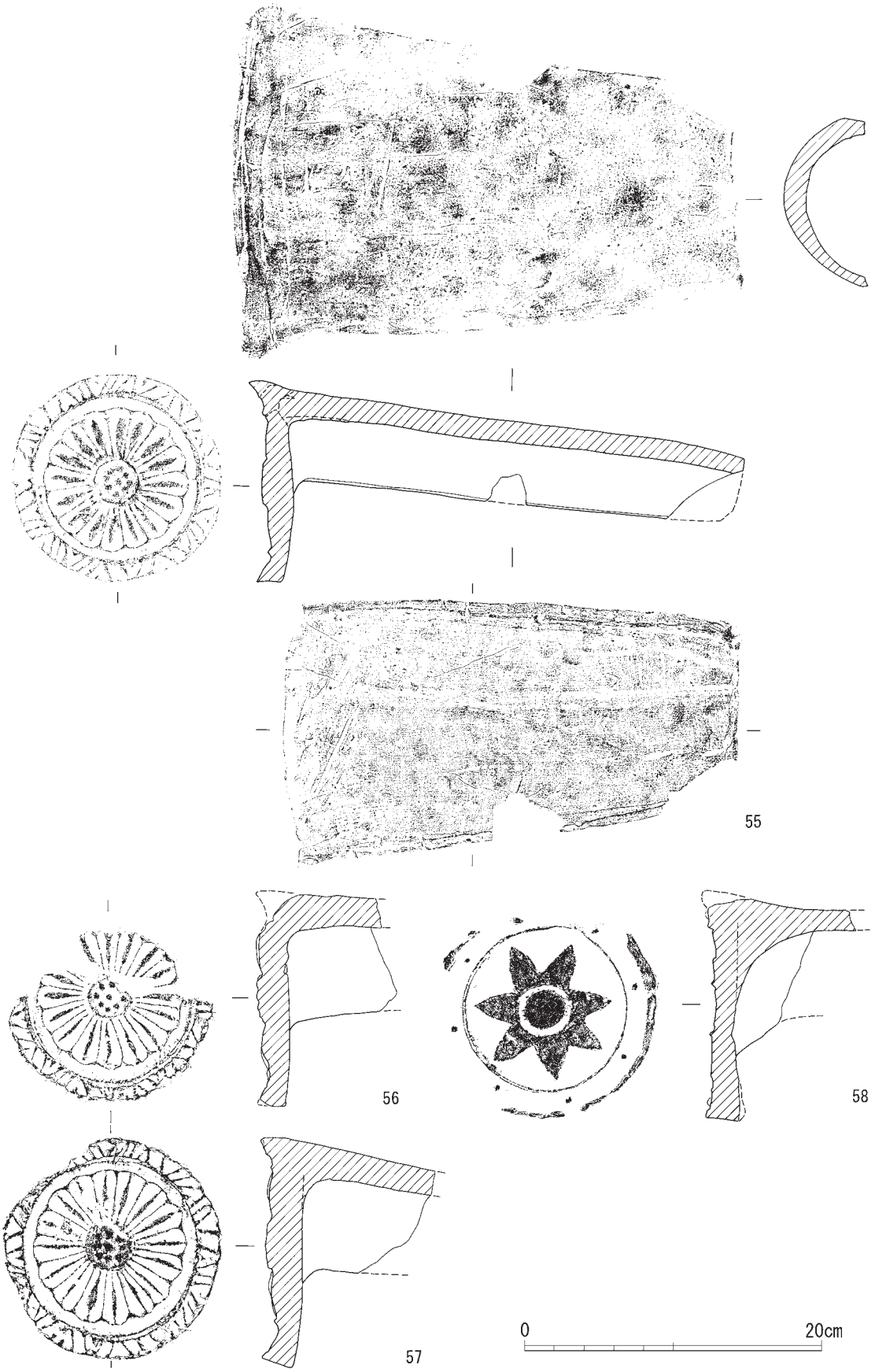
**軒丸瓦・軒平瓦**　48～58は軒丸瓦で、48～52はＡ地区、53～55はＢ地区、56～58はＣ地区から出土した。48は、軒丸瓦Ⅰ式とした複弁蓮華文で八葉の花弁をもつ軒丸瓦で、Ａ地区の瓦堆積から出土した（第５図上）。49は、瓦堆積層から出土した。軒丸瓦Ⅱ式とした七葉の花弁をもつ軒丸瓦である。50は、南側で検出した礫敷き遺構の上面から出土した（第５図右下）。瓦当面の磨滅が著しい。51は、瓦堆積から出土した。52は、48に近接して出土している（第５図上）。48・52が出土した地点は瓦堆積の範囲の南側の出土量が比較的少ない地点である。53は、Ｂ地区の瓦堆積から出土した。瓦当面の花弁部分に５mm程の石がみえる。54・55は、瓦堆積の東側で検出した護岸施設の杭列のさらに東側で、平瓦２点とともに出土した（第９図）。55は、瓦当に丸瓦がつく完全に近い状態で出土した。外面は、タタキののち調整痕をナデ消されており、内面は布目痕が残る。56～58は、Ｃ地区の瓦堆積から出土した（第11図）。58は、北側で唯一出土した軒丸瓦Ⅱ式である。

軒丸瓦は、２種類の瓦当の文様があり、軒丸瓦Ⅰ式（48・49・53～57）は、これまで発見されて

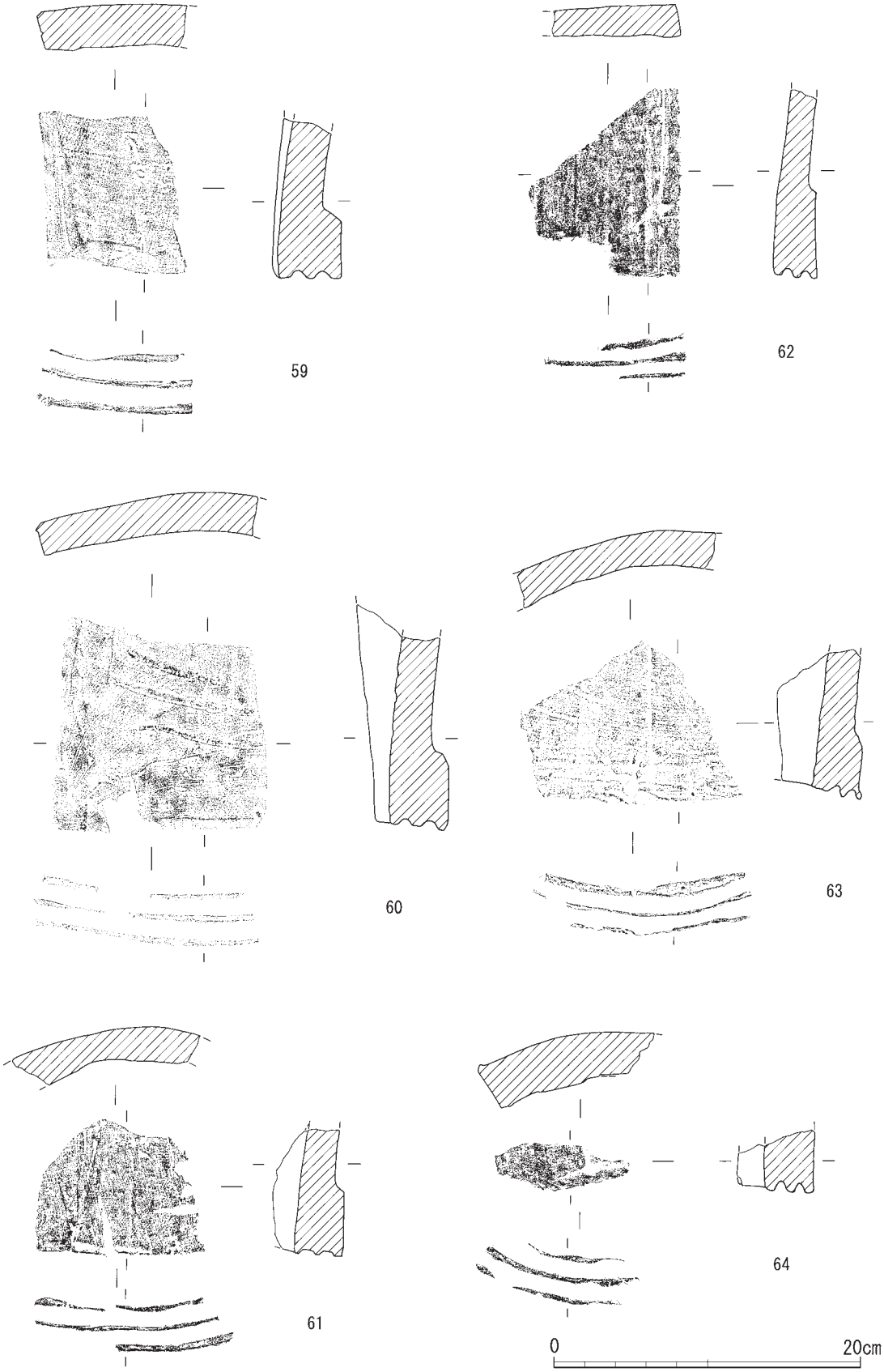



第17図　出土遺物実測図　瓦(2)

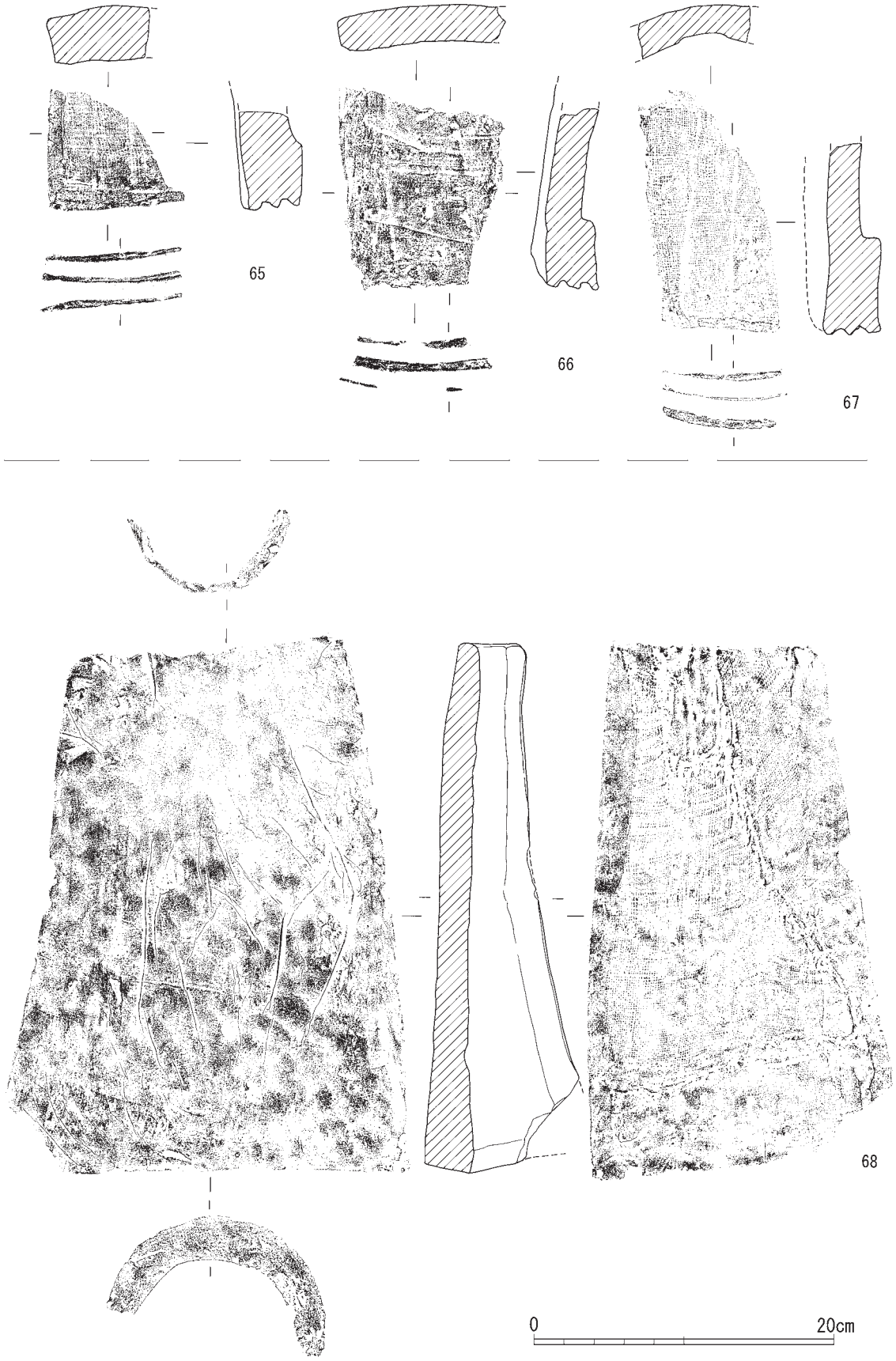
いる軒丸瓦と同笵のものである。瓦当の直径は14.6cmを測る。瓦当の文様は、複弁で八葉の花弁をもち、周縁に３本一組で交互に向きを変える変形した鋸歯文があり、川原寺式の系統と考えられる。瓦当の文様は複雑であるが、花弁の稜線や調整などは雑で、胎土にも５mm程の石が混じっている。瓦当の貼り付けに関しても花弁の位置が個々に異なる。また、焼成も須恵質に近い良く焼かれたものから乳白色の焼きが甘いものまである。もう一方の軒丸瓦Ⅱ式(50～52・58)は、瓦当面の文様は素弁の七葉の花弁で周縁に鋸歯文はなく、８個の珠文があり、軒丸瓦Ⅰ式(複弁蓮華文)とは別の系統のものと思われる。瓦当の直径は15.1cmを測り、出土した４点の色調は、すべて乳白色に近く、焼成が甘いものである。どういった経緯で２種類の軒丸瓦が使用されたのかは不明であるが、軒丸瓦Ⅱ式(七葉の花弁)は近畿北部にも同系列のものはなく珍しいもので興味深い。59～67は軒平瓦で、59～64はＡ地区の瓦堆積、65～67はＢ地区の瓦堆積から出土した。俵野廃寺で出土する軒平瓦の文様は、重弧文である。軒平瓦に関しては、完形に近いものはなく破片が多い。瓦当面は型引きによって二本の弧線を描く。顎は、段顎型式で瓦当の厚さはそれぞ



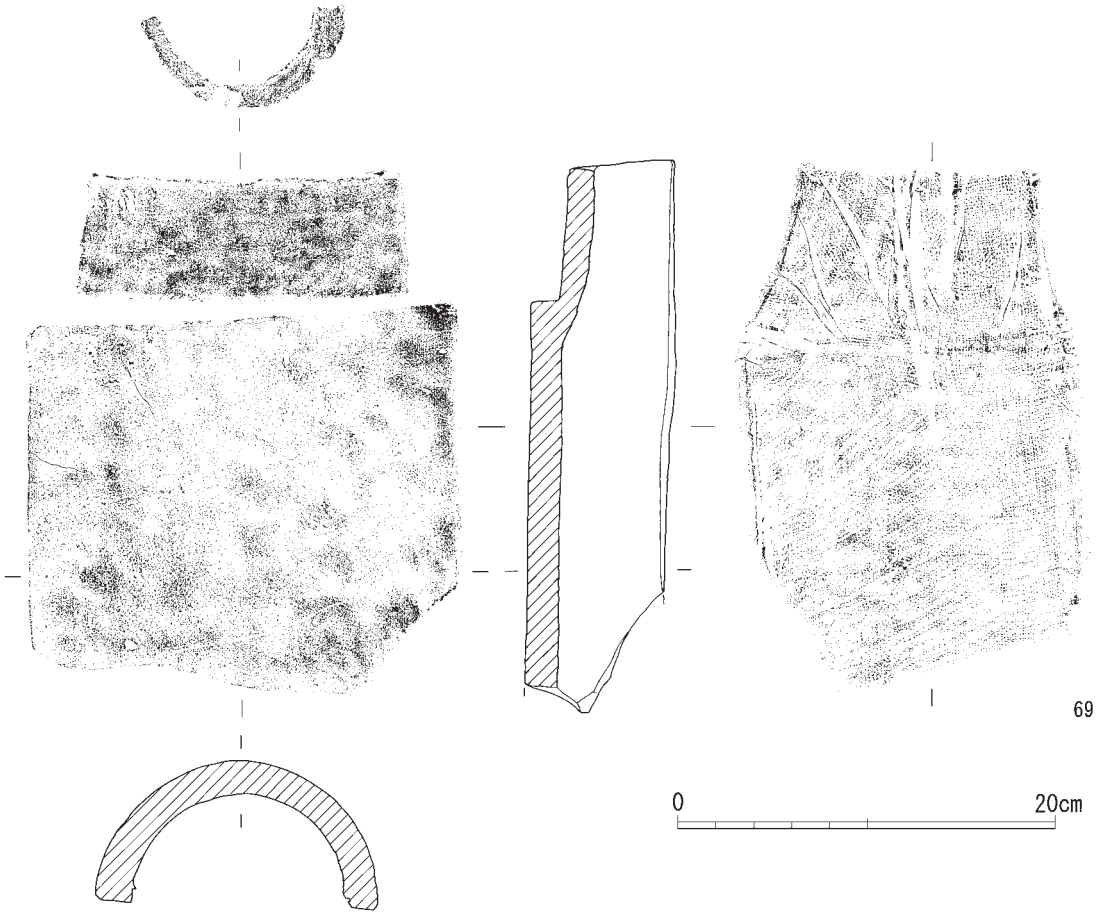

第18図　出土遺物実測図　瓦(3)




第19図　出土遺物実測図　瓦(4)




第20図　出土遺物実測図　瓦(5)




第21図　出土遺物実測図　瓦(6)

れ異なる。調整は表面には細かい布目痕や桶巻きの枠板圧痕が残る。裏面は瓦当部の粘土貼り付け痕跡やナデ消し痕がみられる。

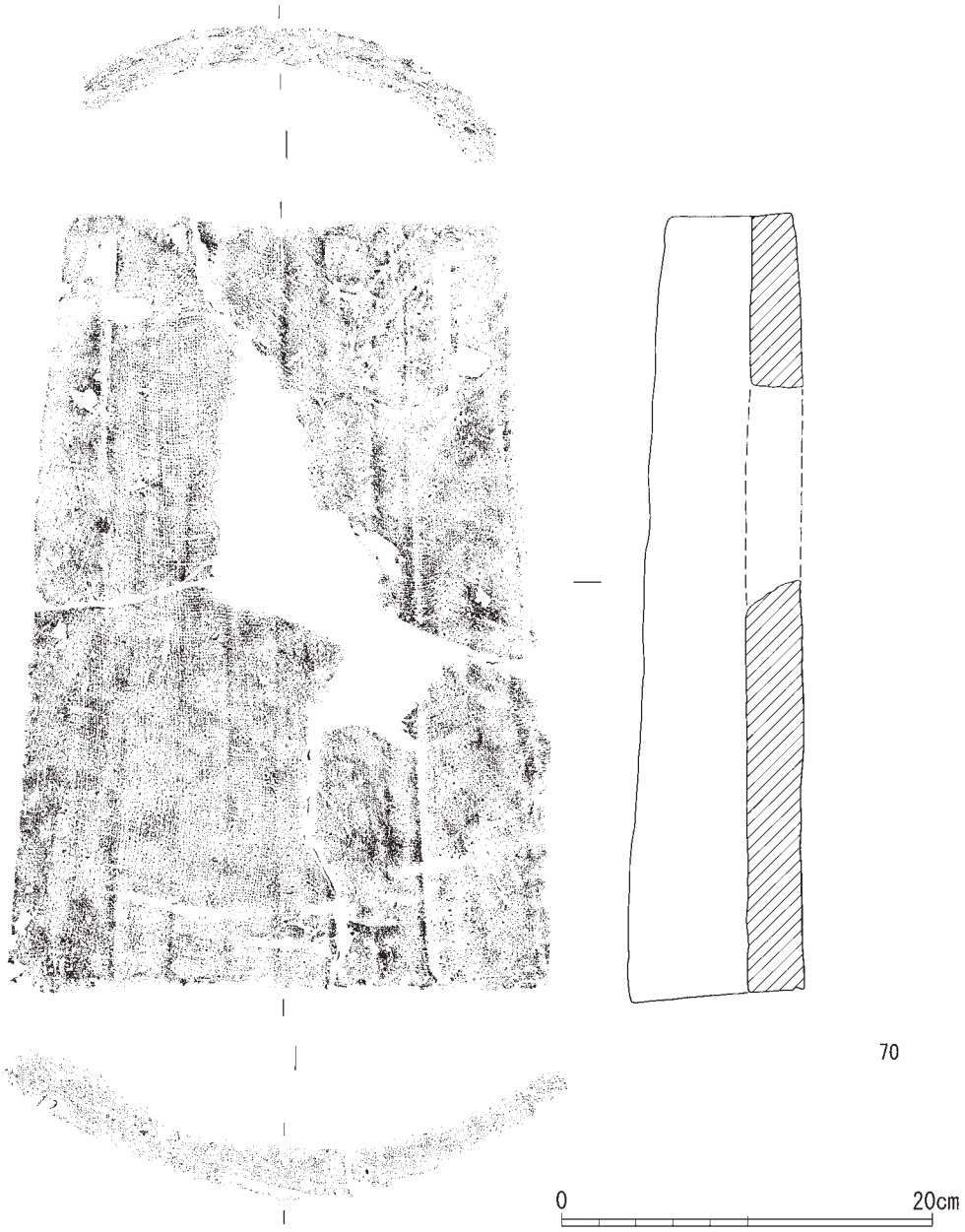
（村田和弘）

**丸瓦・平瓦**　出土遺物コンテナ190箱の大半は、古代の丸瓦および平瓦である。これら全てを資料化することはできないので、以下の作業により資料化に努めた。

1)丸瓦については、隅部の総数を把握するとともに、量の少ない玉縁式瓦については全点対象とし、行基葺き式については、狭端部もしくは広端部が完存しているもの、側面16.0cm以上あるものを対象とした。それ以外に、隅部が鉤状の形状をもつもの３点を資料とした。資料総数は238点である。

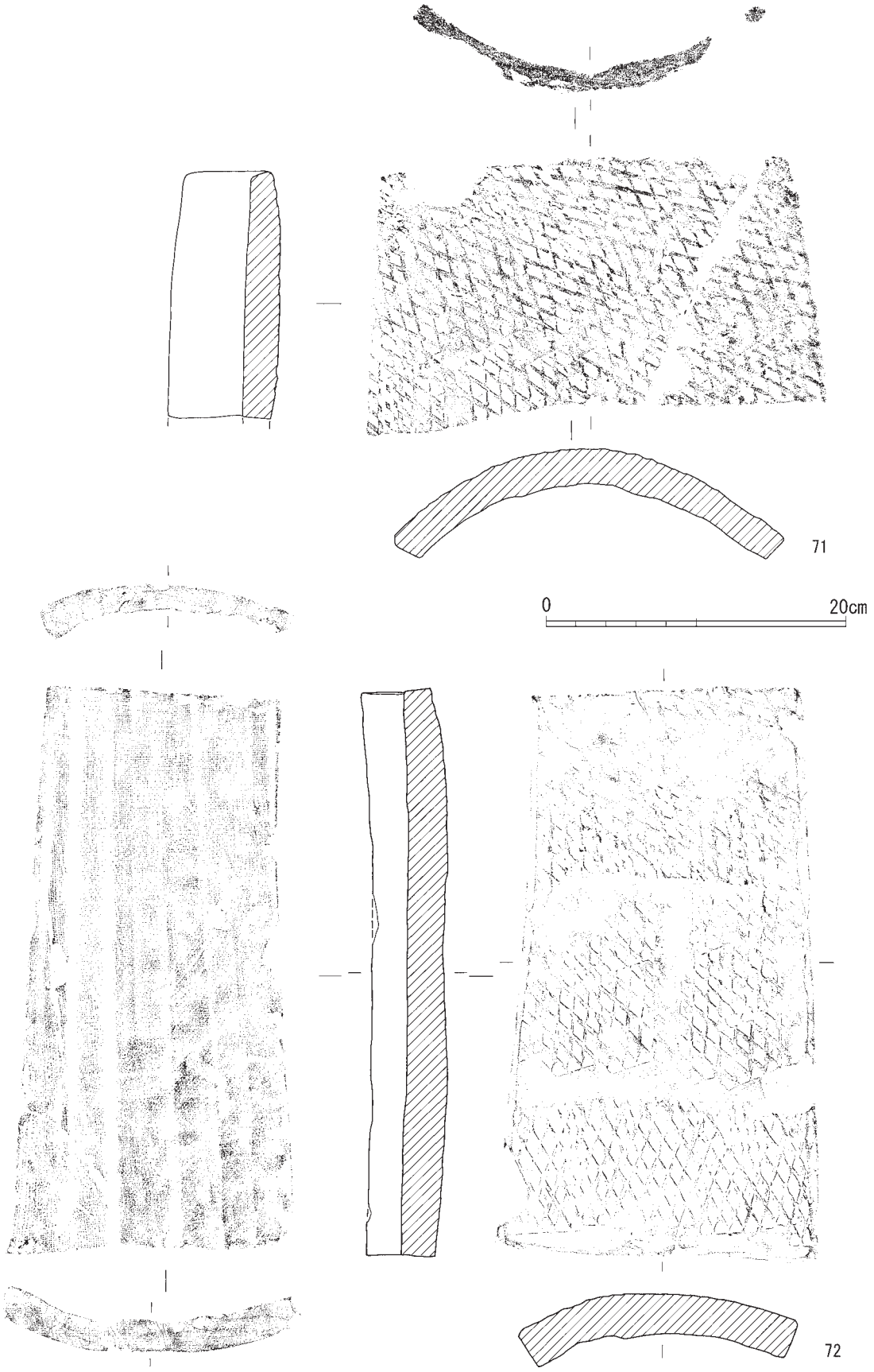
2)平瓦については、熨斗瓦が含まれていることが予想されたので、隅部の総数を把握するとともに、狭端部12.0cm以上、広端部13.0cm以上、側面16.0cm以上を測るもの及び熨斗瓦のうち対応する両側面が残っているものを抽出した。資料総数は167点である。

3)丸瓦、平瓦の総隅数は、それぞれ1979と696である。４で割った数は、それぞれ、495と174(いずれも小数点以下四捨五入)である。出土した丸瓦、平瓦の総数は、それぞれ495枚、174枚と想定する。丸瓦と平瓦の比率は、３対１である。

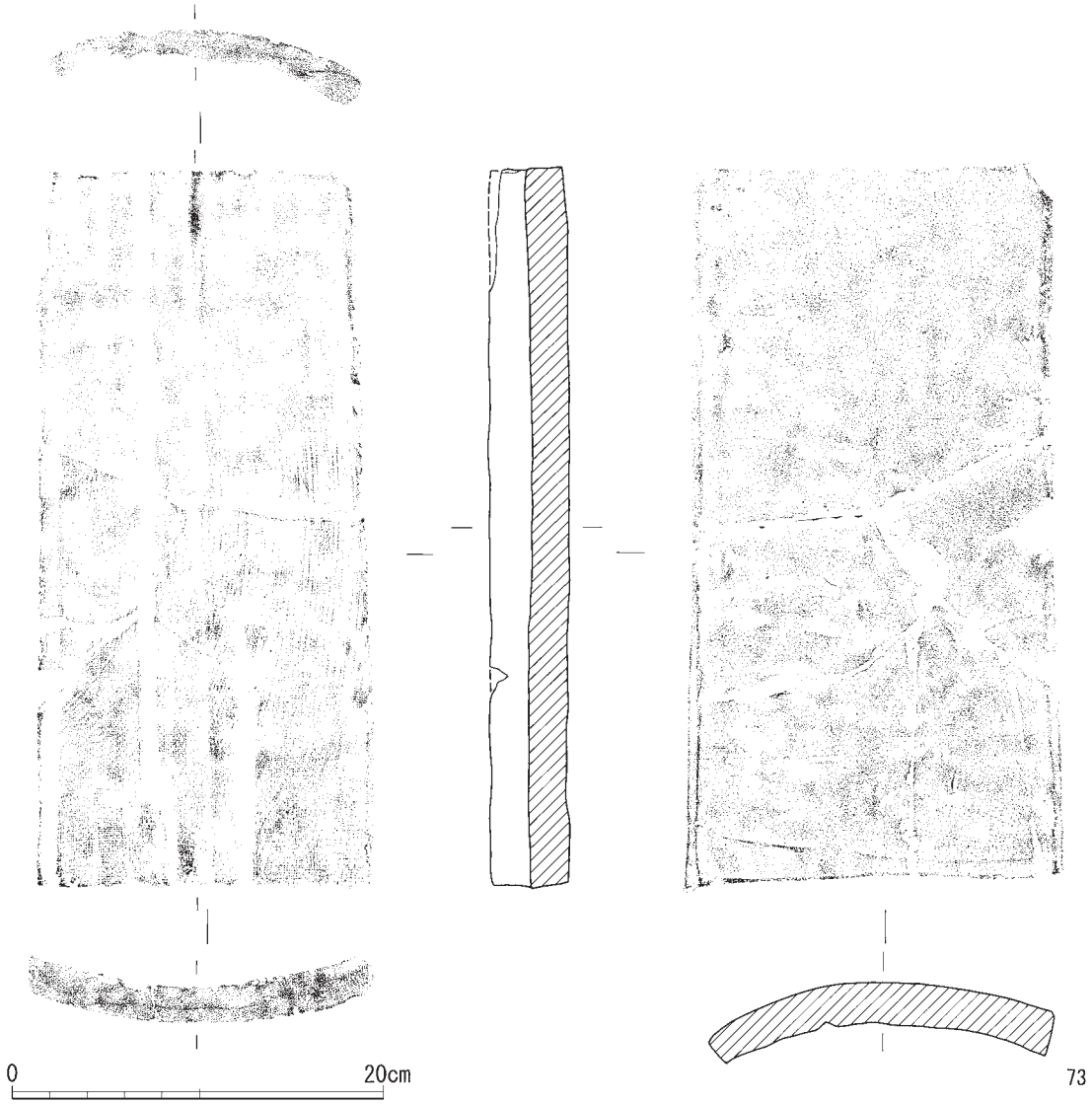



第22図　出土遺物実測図　瓦(7)

丸瓦には、行基葺き式(68)と玉縁式(69)のものがある。玉縁式のものは極めて少数で、総数22点を数え、総数495の約４パーセントを占めるにすぎない。玉縁式とは別に、狭端面の隅部に２cmほどの鉤状の切込みを入れるもの（第26図５）が３点ある。玉縁部の長さのわかるものは６点で、6.5～7.3cmを測り、玉縁部を除く全長のわかる瓦が１点あり、玉縁部を含む全長は42.0cmほどと復元できる。玉縁端部での模骨径は7.5～8.0cmを測る。行基葺き式の丸瓦で全長のわかるものは、68を含む４点で、それぞれ32.8cm、33.5cm、37.0cm、35.2cmを測る。復元される模骨の広端面の直径は10.5～14.6cmを、同じく狭端面の直径は5.1～8.6cmを測る。模骨には細いものから太いものまでバリエーションがある。68は太い模骨によるものである。凹面には糸切り痕および布目圧痕（6～10本/cm）が残り、円周に沿って半周長の測れる115点のうち55点に布の綴じ合わ



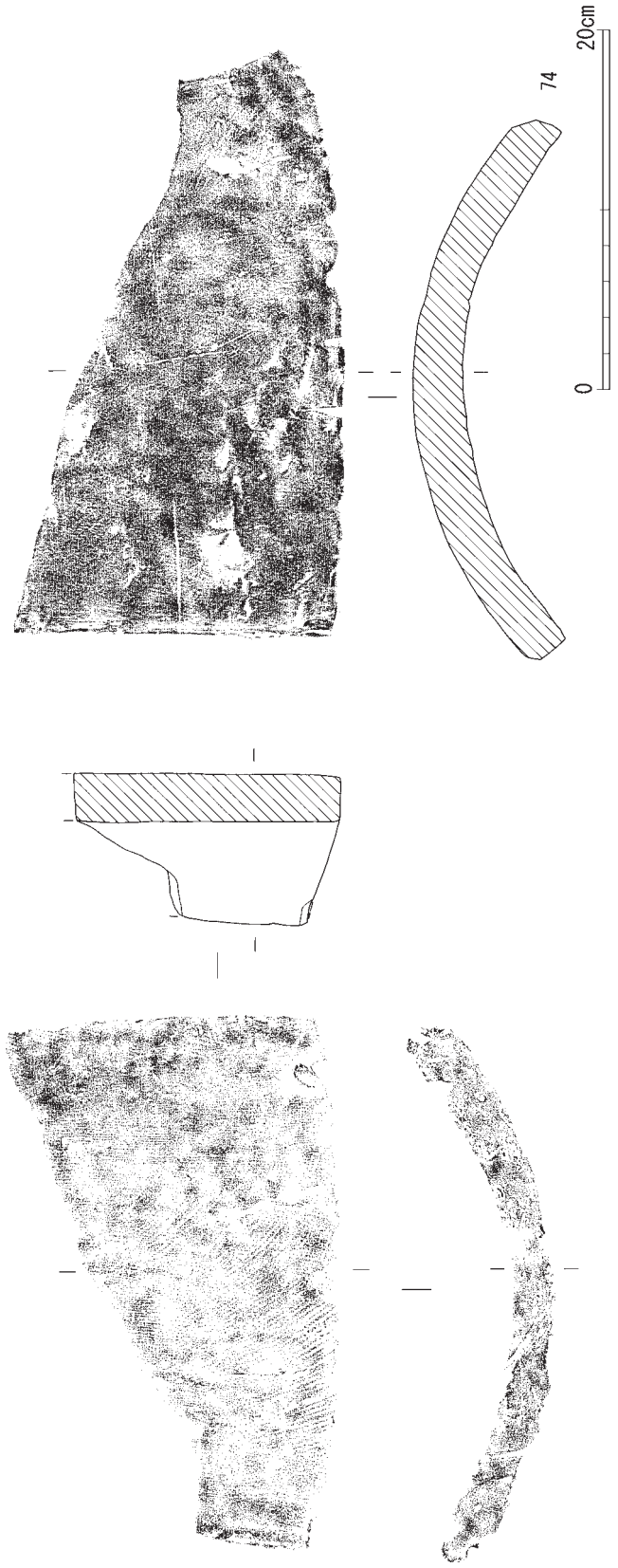

第23図　出土遺物実測図　瓦(8)




第24図　出土遺物実測図　瓦(9)

せ痕が見られる。布の綴じ合わせ痕以外に分割指標と思われる棒状の圧痕を側端部にもつものが一定量ある(第26図３)。凸面は、多くが横ナデ調整で仕上げられているが、叩き痕、削り痕が残されているものがある。叩き板圧痕は、平行叩き(第26図１)が16点、格子叩き(第26図２)が２点観察できた。横方向および縦方向の削り痕が観察できるもの、強い縦方向のナデが観察できるものもある。焼成後に中央部に釘穴を開けているものが１点ある(第26図６)。側端面に布目圧痕をもつものが１点ある(第26図４)。

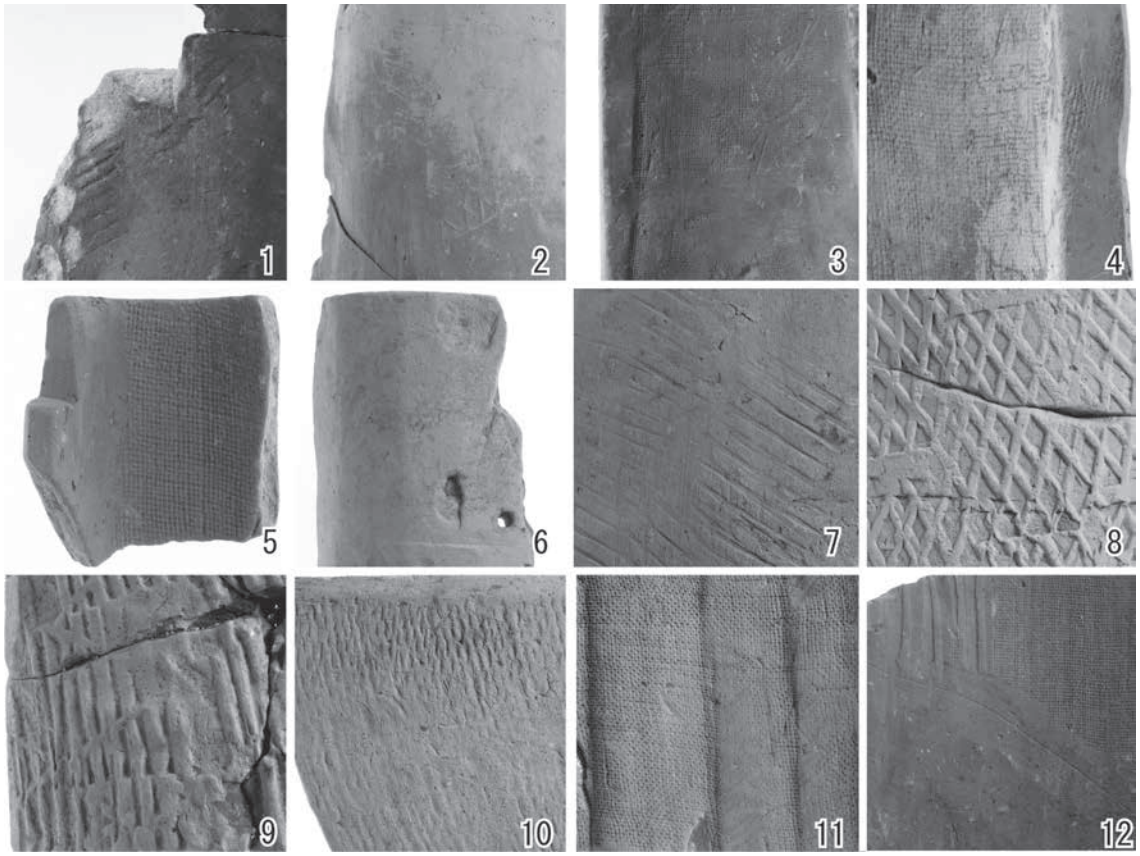
平瓦167点のうち、法量がわかるものは１点(70)のみで、全長41.5cm、広端面長29.5cm、狭端面長24.0cmを、厚さ2.0～3.5cmを測る。ほかに広端面長のわかる２資料は、28.0cm・33.0cmを、狭端面長のわかる８資料は、20.0～28.0cmまでを測る。平瓦全体での厚さは1.3～4.3cmと幅がある。平瓦は、いずれも桶巻き４枚つくりによるものと推定できる。凸面の調整は、ナデもしくはケズリ(強いナデか)痕跡のみを留めるものが大半の124点を占める。後述するようにナデの下に叩き痕を観察できるものがあるので、これらの多くは叩き締めを行った後ナデ調整等を行ったと考え




第25図　出土遺物実測図　瓦(10)

られる。叩き痕跡は平行叩き（第26図７）、斜格子叩き（第26図８）、長方形格子叩き（第26図９）、縄叩き（第26図10）がある。資料化対象外だが正格子叩きの小片も存在する。平行叩きは17点あるが、いずれもナデの下にわずかに叩き痕を残すものである。斜格子叩きは20点（71・72含む）確認できた。確認できる叩き板の模様帯の幅は、8.5cmである。(注5) 多くは叩き後不調整だが、叩きをナデ消そうとするものも少量ある。長方形格子叩き、縄叩きはそれぞれ２点確認できた。このほか、叩きの種類が判別できないものが１点ある。凹面には、布目痕、布綴じ痕、糸切り痕及び枠板圧痕などが観察できる。分割指標は見られない。布目は、７～10本/cmのものが大半だが、5～6本/cmの粗いものや、11～16/cmの細かいものもある。布の綴じ合わせ痕は、22点に認められた。凹面にケズリを行うもの（第26図12）も少量ある。枠板の幅は、幅２～４cmを測るもの（第26図11）が多い。両端面および両側面の整形は、ヘラ切りのみ行っているものが多いが、ヘラ切り後両端面や両側面の角を面取りするもの(74)が一定量存在する。

平瓦の中には熨斗瓦とわかるものが19点存在する。熨斗瓦のうち、全形のわかるものは、72・73を含む４点である。全長は37.0～




第26図　丸瓦・平瓦部分写真

38.5cmを測る。この内３点は桶巻き後６分割されたものと推定され、広端面長17.0～19.0cm、狭端面長15.5～17.5cmを測る。残りの１点は、広端面13.5cm、狭端面10.0cmを測る。厚さは薄い部分1.5cm前後、厚い部分で2.6cmを測るものが多く、桶巻き４枚作りの平瓦に比べて薄い傾向にある。

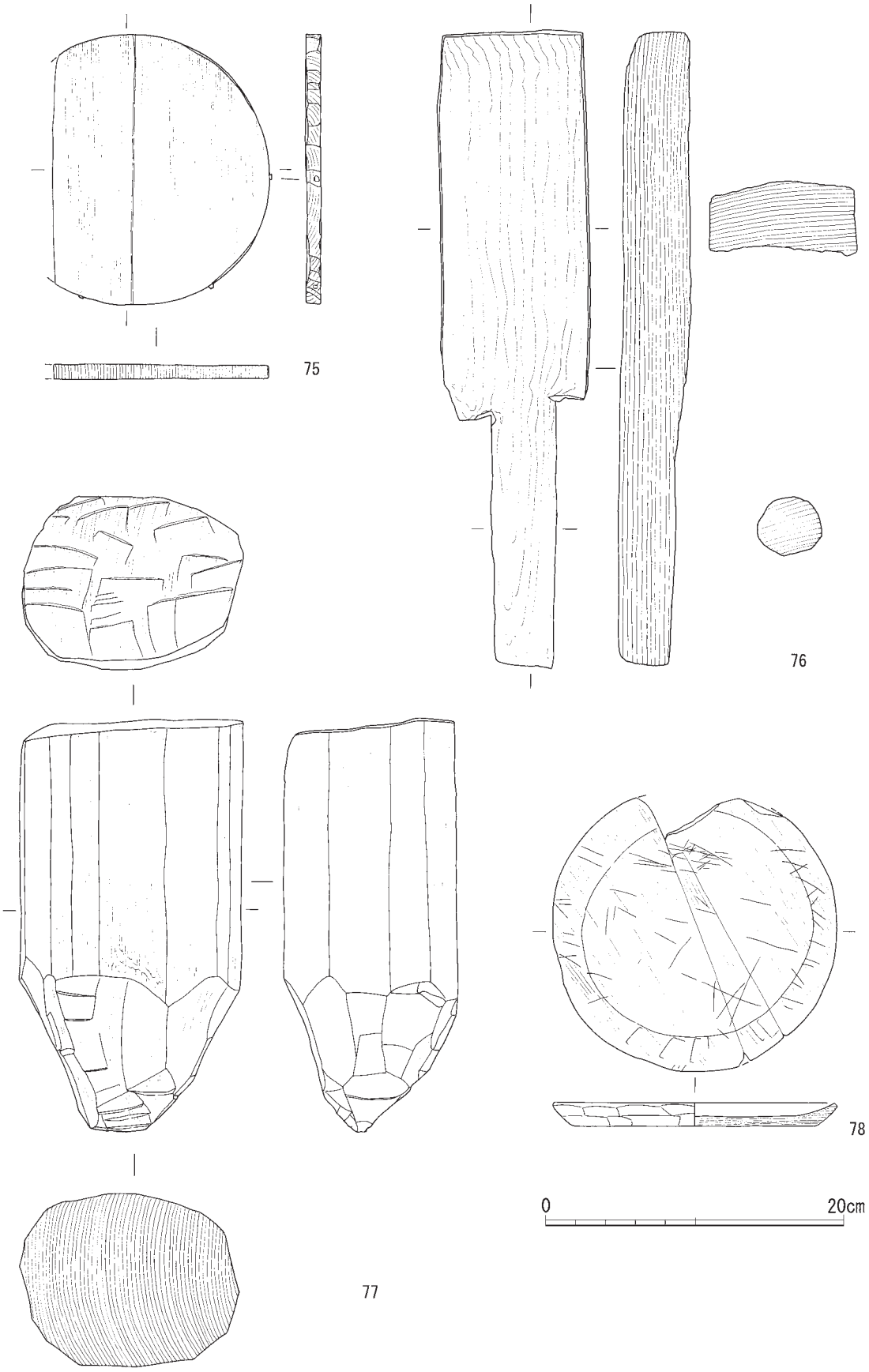
今回の調査では出土地による平瓦･丸瓦の差異を見出すにはいたらなかった。図化した瓦では、68・70がＡ地区、71～73がＢ地区、69・74がＣ地区からそれぞれ出土した。

（肥後弘幸）

（３）木製品（第27図）

75・76は、B地区で出土した。75は、瓦堆積と護岸施設との間の地点で出土した曲物の桶の底板で4か所に２～３mm程度の枘穴があけられ、木釘が差し込まれている。76は、瓦堆積層の下部から出土した。全長42cmを測り、羽子板状を呈している。握り部は加工されているもので全体に加工が雑であり、何らかの未製品の可能性がある。77・78は、Ｃ地区から出土した。77は、瓦堆積層から出土した杭状の木製品で、一方を削り杭の先のように尖らせているが、用途は不明である。78は、南北溝から出土した木製の皿である。内外面は、丁寧に削り整形されている。いずれも針葉樹と考えられる。

## ６．まとめ




第27図　出土遺物実測図　木製品

今回の第２・３次調査では、礎石や基壇など建物に直接関連する遺構は検出できなかった。しかしながら、Ａ・Ｂ地区において、瓦などの遺物が多量に堆積している状況を検出し、Ａ地区の南側で礫敷き遺構を検出した。また、Ｃ地区では寺域の東端部の状況を確認した。

Ａ・Ｂ地区で検出した瓦堆積内からは、寺院の存続時期を示すものとして飛鳥時代後期から奈良時代後半（７世紀後半～８世紀後半）に属する瓦や土器のほかに、平安時代（10世紀代）の土器が出土した。平安時代の土器は少量であるが、瓦堆積層の上部および上面から出土している。また、瓦堆積の中には、柱材や多量の木片が出土した。これらの状況から、この堆積は自然堆積ではなく、平安時代に建物の解体あるいは廃絶後の片付けがあったことが推測できる。この瓦堆積は、護岸施設の杭列と南北の溝の埋土の上に堆積しており、護岸施設が設けられる時期と瓦堆積の時期との正確な時期差は不明であるが、護岸施設や南北溝が瓦堆積より古い時期に設けられたものであることがわかった。

遺物は、おもに瓦堆積から出土した土器と瓦などである。瓦では、軒丸瓦・軒平瓦（重弧文）・丸瓦・平瓦・熨斗瓦がある。軒丸瓦では、従来から知られている複弁蓮華文軒丸瓦（軒丸瓦Ⅰ式）のほかに、新たな型式として７葉の花弁を持つ軒丸瓦（軒丸瓦Ⅱ式）が出土した。軒丸瓦Ⅱ式とした瓦の特徴としては、出土量は軒丸瓦Ⅰ式に比べると少なく、花弁の形が不揃いで粗雑なものであるにもかかわらず、瓦当の残存率が高い。製作に時期差がある可能性も考えられるが、瓦堆積層から出土しているため時期差を確認することは難しい。さらに、出土した地点がＣ地区の北端部とＡ地区南側と瓦堆積の南北端のみで、遺跡範囲の南北端から出土していることなど出土状況にも特徴がみられる。丸瓦では、段を持たず一方が細くなる行基葺き式のものが採用されている。玉縁式のものや格子叩きをもつものは補修瓦として持ち込まれたものであろう。平瓦は、凸面の叩きを丁寧にナデ消したものが大半を占める。これが創建時の瓦であろう。斜格子叩きをもつものが一定量あり、別の建物に用いられた可能性がある。そのほかの叩きをもつものは補修瓦であろう。調整方法から考えると、時期としては８世紀初頭（斜格子叩き）～８世紀後半（縄叩き）にかけて瓦の葺き替えもしくは一部補修が実施されたと見られる。今回の調査で出土した瓦を種類別に比較すると丸瓦が多く平瓦が少なく、比率的にはおよそ３対１となる。丸瓦が多い建物を想定すると築地などが想定されるが、今回の調査では確定できる遺構などは確認できなかった。土器では、７世紀末～８世紀初頭の須恵器の杯や土師器の杯など、ほかに10世紀前半の須恵器の杯などが出土した。平安時代に建物の廃絶または倒壊があったか、この時期に瓦や建築部材の片付けが行われたと考えられる。

今回の調査では、礎石や基壇など建物に直接関連する遺構は検出できなかったが、２種類の型式の軒丸瓦が出土したことにより、塔以外に瓦葺きの建物が存在していた可能性が高くなった。また、複弁蓮華文軒丸瓦のほかに、今回出土した型式の軒丸瓦（軒丸瓦Ⅱ式）は、瓦当面の花弁が７葉で非対称の文様の簡略化されたものである。出土した遺物から平安時代に廃絶または解体が行われたと考えられ、俵野廃寺で出土した２種類の軒丸瓦が同時期に葺かれていたと思われるが、瓦製作に時期差があるのかは現時点では確定することはできない状況である。しかしながら、こ

れらの瓦は当時の丹後地域における瓦生産技術を知るうえで貴重な資料といえる。

Ａ地区の瓦堆積は、塔の心礎と思われる礎石が発見された地点に近接していたが、そのほかの礎石や基壇の痕跡を確認することはできなかった。調査区の東側には南北溝や護岸施設があり、さらに東には俵野川の旧流路があるため、東に遺構が展開する可能性は低い。西側では現俵野川の川底で、塔の心礎と思われる礎石が発見されている。発見された地点とＡ地区までの距離は、約８ｍしか離れておらず、この礎石が元の位置を保っていたとすれば、西側の丘陵との位置関係から考えると、旧河川と丘陵に挟まれた狭い範囲に寺院が造られていたと推測される。また、一方では、伽藍配置を無視し丘陵の平坦部を利用した建物の配置をしていた可能性も考えられる。

Ａ地区の南側で検出した礫敷き遺構は、５～10cmほどの大きさの礫が広範囲において敷き詰められており、広場的な空間の存在が想定される。

近隣の「木津」の地名が示すように、古代港湾という要所に建てられた俵野廃寺は、奈良時代に丹後国分寺（宮津市）が建立されるまでは、丹後唯一の古代寺院として、独自の２種類の軒丸瓦を葺いた伽藍が威容を誇っていたと推察できる。寺院の建物配置や西側の状況、瓦の供給元については、将来の周辺の調査で確認されることを期待したい。

（村田和弘・肥後弘幸）

注１　村田和弘「俵野廃寺発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第122冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）2007

注２　調査参加者（順不同）井上由起子・井本祐子・吉岡千代美・松本彬成・小路すみ子・橋本正一・岡本稔・松本泰隆・松本隆夫・西垣憲志・畠中滋作・山本三市郎・中川直・嶽繁之・小笠原順子・清水友佳子・丸谷はま子・寺尾貴美子・長尾美恵子・山川幸乃・田中ゆかり・槻啓宏
指導いただいた方・機関（敬称略）京都府教育委員会・京丹後市教育委員会・京都府立丹後郷土資料館・上原真人・菱田哲郎

注３　網野町誌編纂委員会「第二章古代」（『網野町誌』　上巻）1992

注４　「網野町の遺跡」（『京都府網野町文化財調査報告』　第４集　網野町教育委員会）　1986

注５　よく似た斜格子叩きの瓦を焼成する堤谷瓦窯（８世紀初頭）が同市久美浜町丸山に所在する。しかし、ここの斜格子叩き板の文様幅は7.5cmであり、俵野廃寺のものとは異なる。

参考文献

岡田茂弘「丹後俵野廃寺」（『貝塚』77号　物質文化研究会）1958
林和広「俵野廃寺出土の古瓦」（『太邇波考古』第３号　両丹技師の会）1983
小山元孝・橋本勝行「俵野廃寺の鬼瓦」（『太邇波考古』第23号　両丹技師の会）2005
菱田哲郎「丹後地域の古代寺院」（『丹後地域史へのいざない』　思文閣出版）2007

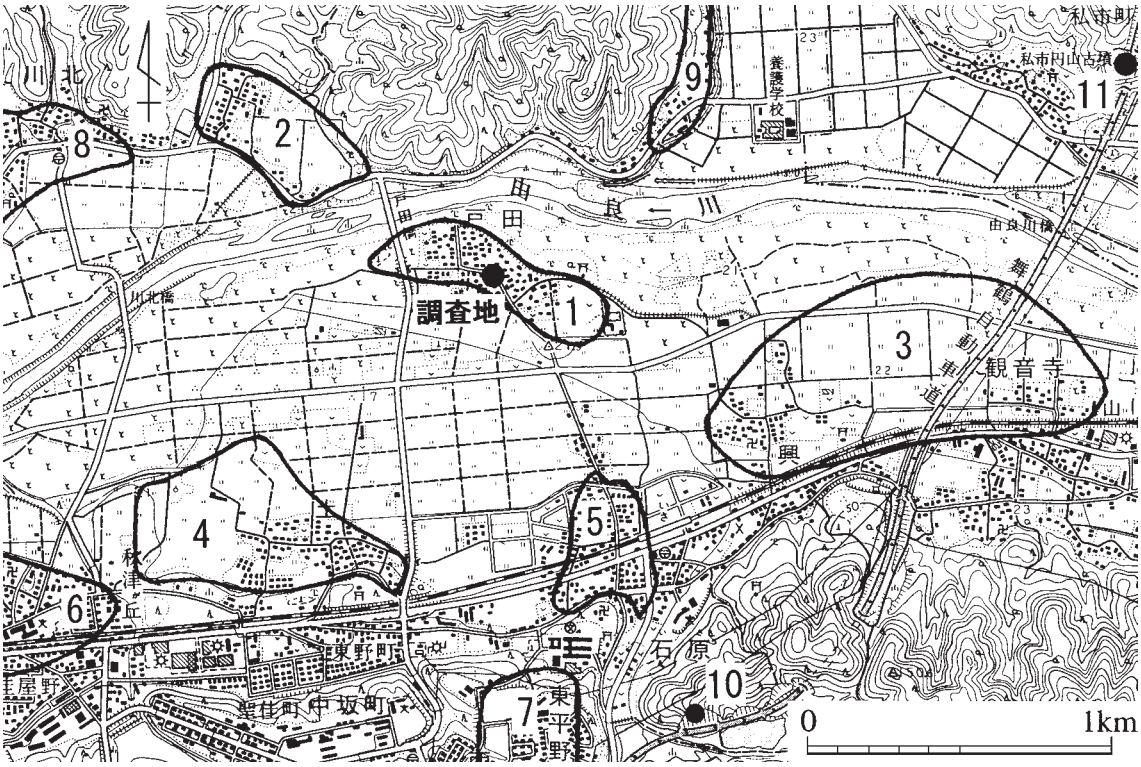
# 2.戸田遺跡発掘調査報告

## 1．はじめに

戸田遺跡は、福知山市字戸田に所在する。由良川中流域の福知山盆地の西部に位置し、盆地を東から西に向かって流下する由良川南岸の自然堤防上に立地する。土師器、須恵器などの遺物散布地として遺跡地図に登載されている。今回の調査は、由良川中流部改修事業の築堤工事に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した。

調査は、平成19・20年度にわたって実施した。平成19年度の調査を担当したのは、当調査研究センター調査第２課調査第1係長小池寛、主査調査員柴暁彦、調査第３係主任調査員引原茂治である。平成20年度の調査担当は、調査第２課調査第１係長小池寛、主任調査員引原茂治、主査調査員柴暁彦である。

調査にあたっては、福知山市教育委員会をはじめ、京都府教育委員会、地元戸田自治会などの関係諸機関からご協力いただいた。特に、福知山市教育委員会の八瀬正雄氏、松本学博氏、永谷隆夫氏からは、現地で多くのご指導、ご教示をいただいた。記して感謝したい。調査作業では、




第１図　調査地位置図(国土地理院　1/25,000　福知山東部)
1.戸田遺跡　2.上ヶ市遺跡　3.興・観音寺遺跡　4.土遺跡　5.石原遺跡
6.前田遺跡　7.上野平遺跡　8.川北遺跡　9.立石遺跡　10.ヌクモ古墳群　11.私市円山古墳

地元の方などに参加していただいた。(注1)

なお、調査に係る経費については、国土交通省近畿地方整備局が全額負担した。

## ２．位置と環境

由良川中流域には自然堤防上に営まれた遺跡が多数確認されている。今回の調査地付近には、弥生時代から中世にかけての集落跡である観音寺遺跡や興遺跡・土遺跡などがある。また、東隣の綾部市域では、味方遺跡・青野遺跡・青野西遺跡などが知られている。丘陵部には古墳が多く分布している。古墳時代中期のヌクモ古墳群では、盤龍鏡などが出土した。北東側の綾部市境には、府内最大級の円墳である私市円山古墳が位置する。中世の遺跡として、調査地から由良川を挟んだ北側の台地上に、有力者の館と考えられる建物跡群が検出された上ヶ市遺跡がある。

戸田の集落の東端に浦嶋神社という小社があり、その社頭に「お沼(おぬう)」と呼ばれる小さい池がある。もとは神社背後の由良川河川敷にあったが、今回の築堤工事に伴い、現在地に移転された。この池は、白い岩を介して龍宮城の大きな沼に直結しており、この池で願い事をするとすぐに乙姫に伝わり、特に天気に関する願い事は必ず聞いてもらえる、という伝説がある。過酷な自然と相対せざるを得なかった土地柄を反映した伝説と言える。　(引原茂治)

## ３．調査経過

平成19年度の調査は、平成19年11月28日に対象地の西側部分から開始した。旧状は主に農地部分にあたる。標高は西から東に向かって徐々に高くなる。ここに、１～９トレンチを設定して調査を行った。３～９トレンチでは、地表下0.3～0.5mで中世の遺物を含む層がみられたので、４トレンチで若干の拡張を行った。その結果、耕作に伴うものとみられる南北および東西方向の素掘り溝やピットを検出した。出土遺物から、江戸時代前期頃の遺構と考えられる。下層は、砂質土の堆積が続き、地表下１.0～2.3mで河川堆積による礫層となる。この礫層には弥生時代から古代までの土器片が含まれる。

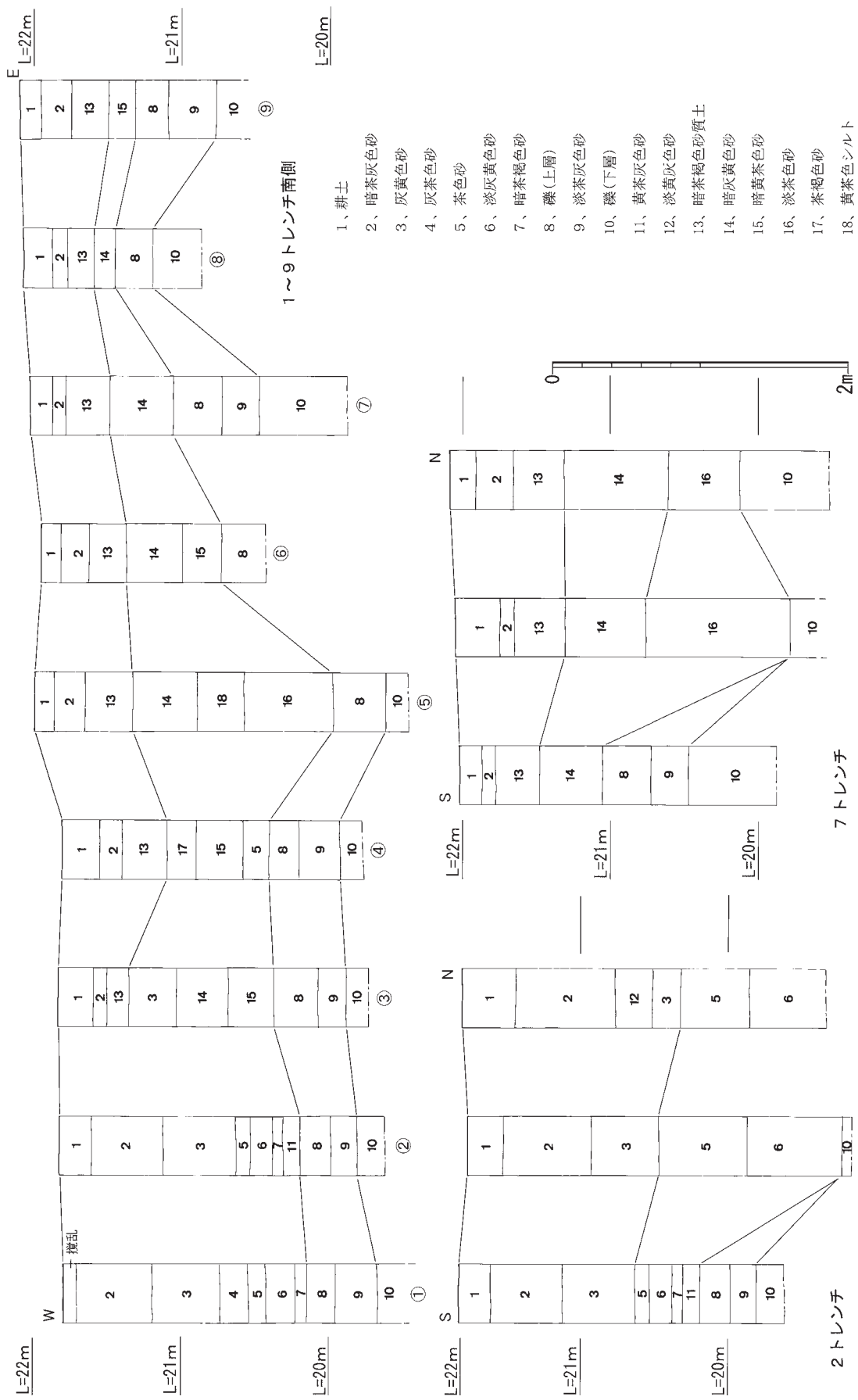
その後、対象地の中央部、東側部の調査を行った。中央部は民家の移転が未了だったため、東端部に10・11トレンチを設定した。10トレンチでは地表下0.7～0.8mで、溝・ピット等の遺構を検出した。出土した遺物から、中世頃の遺構と考えられる。東側部では、12～16トレンチを設定して、調査を行った。その結果、12～14トレンチで、13世紀頃の遺物を含む土坑やピットを確認した。15・16トレンチでは、近世の遺構を確認したが、それ以前の時期の遺構は無かった。平成19年度の調査終了は平成20年２月22日で、調査面積は1,780㎡である。

平成20年度調査は、平成20年４月23日から開始した。昨年度調査の12～14トレンチ部分をＡ地区、10トレンチ周辺をＢ地区として本調査を行うこととし、Ａ地区から着手した。その後、昨年度試掘調査ができなかった箇所に17～19トレンチを設定して遺構・遺物の有無を確認した。

Ａ地区調査と試掘調査の結果を受け、関係諸機関と協議を行い、溝等の遺構を検出した19トレンチ周辺をＣ地区として本調査を行うこととした。また、Ａ地区についても調査範囲を拡張し、

X=-76,600
X=-76,700
X=-76,800
Y=-74,800
Y=-74,900
Y=-75,000
Y=-75,100
0
100m
A
B
C
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
←戸田橋

第２図　調査区配置図




第３図　試掘トレンチ柱状断面図

その西側に隣接する部分も20トレンチを設定して調査を行うことになった。20トレンチでは土坑・ピット・石列などを検出した。土坑では、堆積土に焼土と炭化物塊・灰・鍛冶滓を含むものがあり、調査地付近で小鍛冶を行っていた可能性がある。また、堆積土中から鉄製紡錘車（第９図71）が出土した土坑もある。石列は、土坑の北および南側の肩部に礫を並べるもので、池と思われる。平成20年度の調査終了は10月22日で、調査面積は2,300㎡である。調査終了にあたって、９月23日に現地説明会を実施した。地元の方々を中心に131名の参加があった。

（引原茂治・柴　暁彦）

## ４．調査の概要

調査地の層序は、Ａ～Ｃの各地区とも0.6～１.0ｍの宅地造成土が堆積している。Ｂ地区は第７図の12層が遺構検出面となる。Ｃ地区は同20層上面が遺構検出面である。

**①Ａ地区**　Ａ地区で検出した遺構は掘立柱建物跡、多数のピット・土坑・溝などがある。検出した遺構の大半が中世のものである。中世の溝跡の方向は北東－南西方向を示しており、当時の地形（由良川の流路）に制約されたものと考えられる。

調査地西半部で検出した溝ＳＤ27および溝ＳＤ241の２条の溝は道路側溝とも考えられるが、方向をわずかに違える。溝心々の間隔は10ｍを測る。

溝ＳＤ04は北西―南東方向の溝である。溝の上面には拳大の礫が多数集積していた。この礫を除去するとその下の堆積土中で、ほぼ完形品の瓦器椀１点と別個体の瓦器椀片が出土した。この溝の時期は出土遺物から12世紀後半と考えられる。

土坑ＳＫ07は平面形が長楕円形をなす土坑で、長軸1.8ｍ、短軸0.5ｍ、深さ0.4ｍを測る。土坑内には拳大から人頭大の礫が20個程度投棄されていた。大半が５層中に含まれていた。礫の中には被熱により赤変しているものがみられた。土坑の中央部付近で土師器皿片、３層および５層から瓦器椀の破片が出土した。また土師器皿の近辺で銭貨１点が出土したが、劣化が激しく銭面の判読はできない。墓の可能性も考えられる。

石組溝ＳＸ08は、両肩部の石列で石の配列が異なる。残存する北側の石列は１石を除き、溝の内側に端面を揃えて11石が残存していた。一方、南側の石列は石の側面を揃えて、５石が残存していた。南北の石列の幅は0.3ｍを測る。溝は北東から南西に向かって下降する。

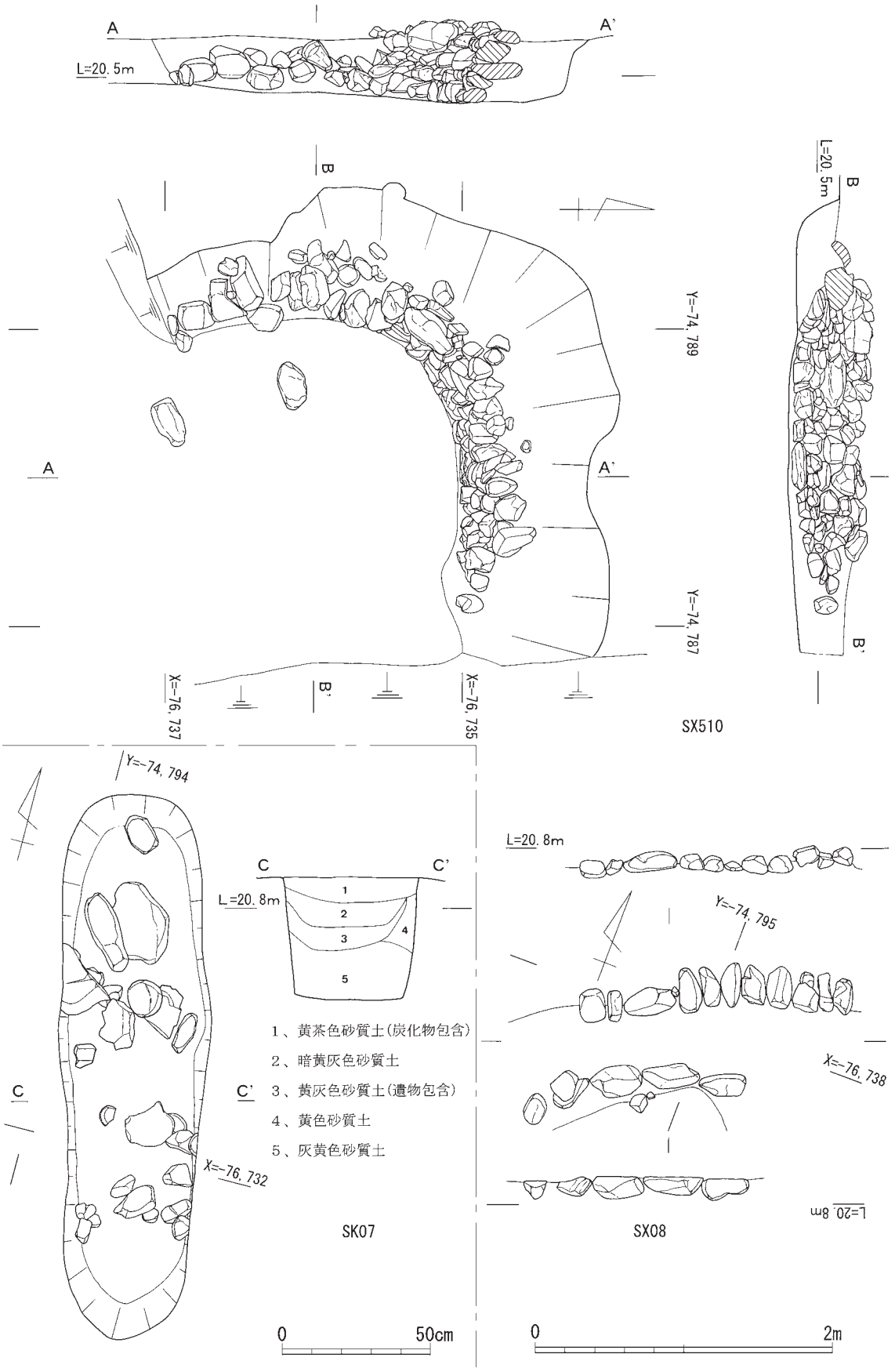
土坑ＳＫ09は長軸0.8ｍ、短軸0.5ｍの規模で、平面形が楕円形をなす土坑である。深さは0.3ｍを測る。土坑内から完形品の瓦器椀・土師器皿などが出土した。

池状遺構ＳＸ510は推定する直径が内法で2.5ｍを測る半円形の遺構である。土坑の内面には、拳大から人頭大の礫が底面から４～５石積み上げられた状態で残存していた。石積みの高さは0.5ｍを測る。遺構の北側の石積みは良好に残っていたが、南東側の石積みは残存していなかった。その形状から池状の施設とも考えられるが、底部に粘土を貼ったような耐水構造は見られないことから、室状の施設ともみられる。

ピットは調査地の北東部および南西部を中心に直径0.3ｍ程度のものが数百存在し、掘立柱建

SX510
SP57
SP60
SK512
SK07
SD04
SX08
SK03
SD33
SD05
SP12
SX06
SK54
SB19
SB175
SD27
SD50
SP325
SP43
SK09
SD241
SP40
SB35
Y=-74, 790
(Y=-75, 050)
Y=-74, 800
(Y=-75, 060)
Y=-74, 810
(Y=-75, 070)
Y=-74, 820
(Y=-75, 080)
0
10m
(X=-76, 380)
X=-76, 730
(X=-76, 390)
X=-76, 740
(X=-76, 400)
X=-74, 750
（　）は世界測地系座標

第４図　Ａ地区平面図




第５図　Ａ地区検出遺構実測図

物跡がかなりの頻度で建て替えられていたと見られる。ピットの中には根石を持つものも見られることから、掘立柱建物跡として復元できるはずであるが、確実に一つの建物跡として認識できるものは少なく、その中で３棟を復原している。ピットは溝ＳＤ27を切っており、溝廃絶後に建物を建てたものと考える。

近世の遺構は土坑、溝などがある。土坑ＳＫ03は廃棄土坑と考えられ、陶磁器や瓦等の遺物が出土した。時期は18世紀後半～19世紀である。

なお調査地の南東部は遺構が希薄であることや、池状遺構ＳＸ510の南東側の石積みも消失していることから、洪水で遺構が流出しその後に粘質土が堆積したものと考えられる。

**②Ｂ地区**　中世の遺構として、掘立柱建物跡・溝・土坑などがある。調査地北側で２間×３間(4.2×5.4m)の東西棟の建物跡を検出した。

調査地中央部で検出した溝ＳＤ22は幅4.5m、深さ0.3mを測る、東西方向の溝である。調査地内で長さ12mを検出した。溝幅は西側に向かって広くなる。堆積土中には若干の人頭大の礫を含み、底部付近で完形品の瓦器椀・瓦器皿・土師器皿や、瓦質土器の鍋・体部外面にタタキを施した東播系の甕・青白磁小壺片などがまとまって出土した。

溝ＳＤ13および溝ＳＤ130は平行する東西方向の溝である。溝幅は1.2～1.3mを測る。これらの溝心々の間隔は６ｍである。そのほか溝ＳＤ22を切るように溝ＳＤ08、溝ＳＤ10の南北方向で２条の平行する溝がある。溝は現里道に平行し、里道から東へ10mの位置にあるため、何らかの区画を示しているものと思われる。また溝ＳＤ14は西壁寄りで検出したが、対応する西側の溝の肩部分は調査地外のため、規模は不明である。この遺構から13世紀頃の中国製青磁椀などが出土した。ほかに、11世紀後半と考えられる底部糸切の須恵器椀なども含まれる。

**③Ｃ地区**　Ｂ、Ｃ地区間の南北方向の里道をはさんで西側は畑地として利用がなされており、東西方向に20条ほど平行して並ぶ畝溝群を確認した。畑の区画は北東―南西方向の傾きを持つ。畝溝群は幅10m、長さ17m分を調査地内で確認した。Ｂ地区にはこの畝溝群が確認できないことから、中世段階においてもここに位置した里道が土地の境界となっていたと考えられる。一方、畑地の西側はピットが散発的に見られたが、当時は空閑地になっていたと思われる。

（柴　暁彦）

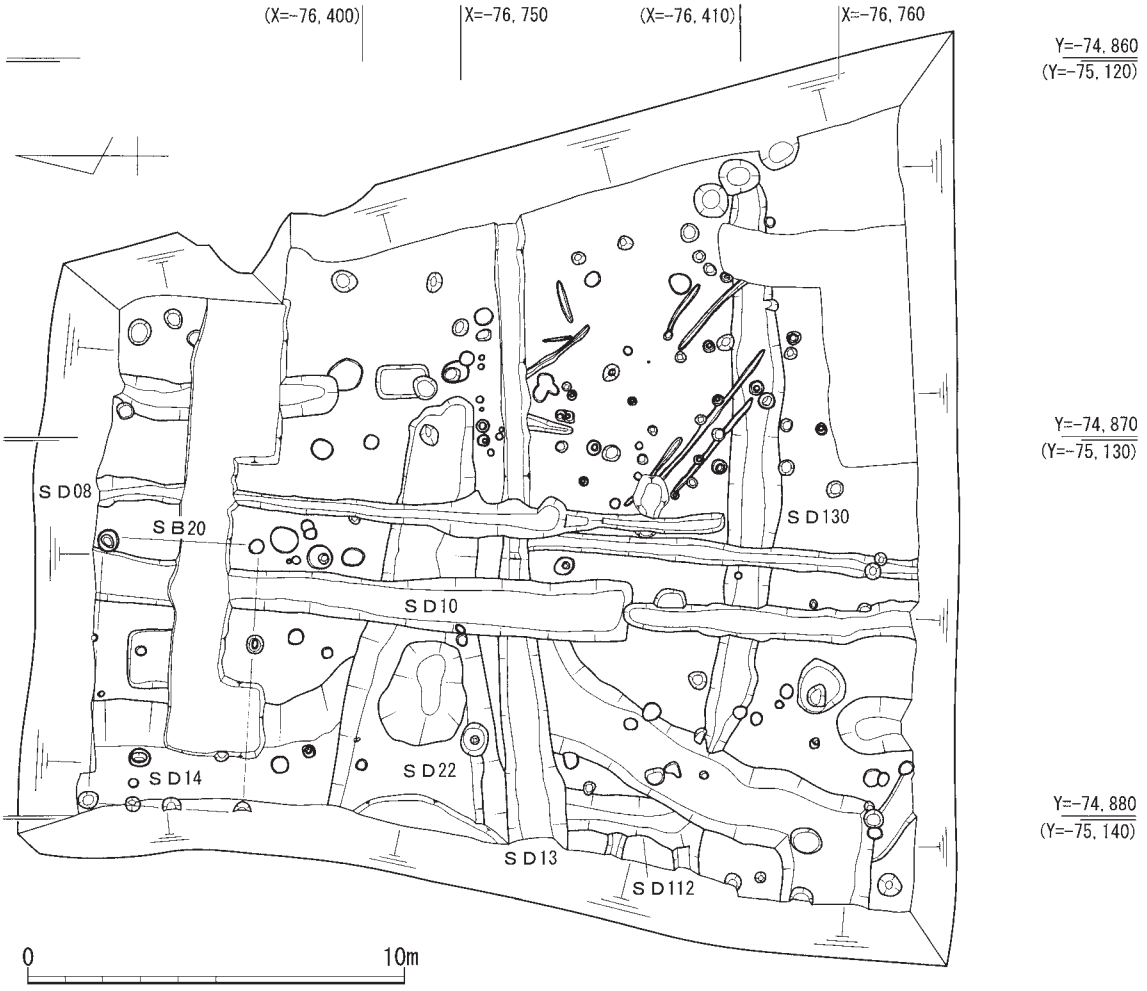
## ５．出土遺物

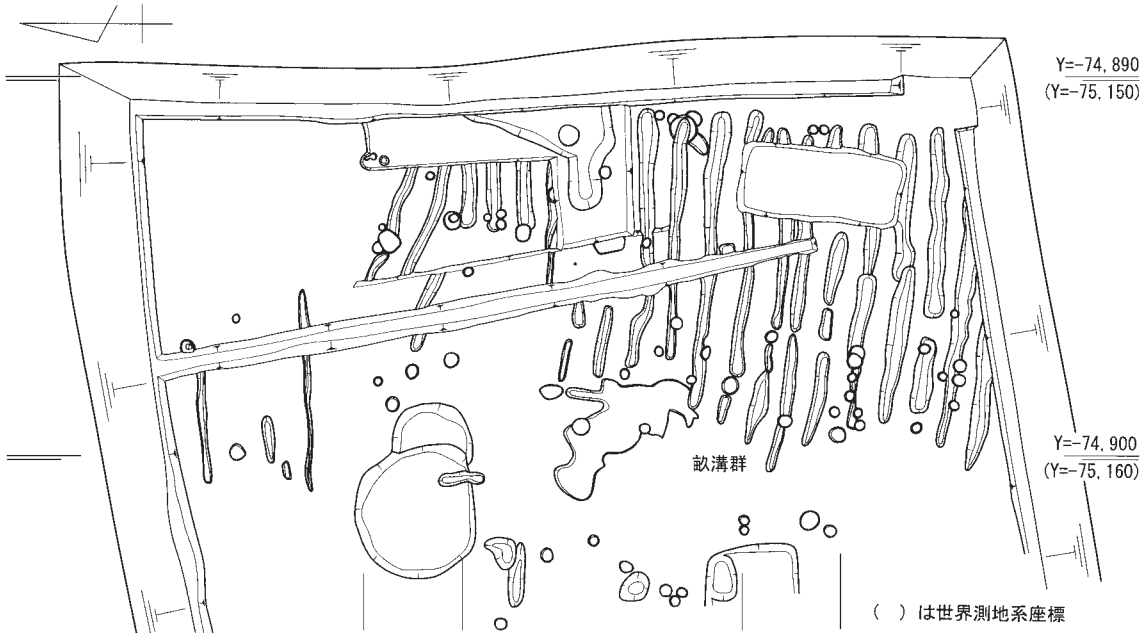
今回の調査では、多くの遺物が出土した。中世以降の遺物がほとんどで、古代以前に遡る時期の遺物は少ない。

### ①試掘トレンチ出土遺物

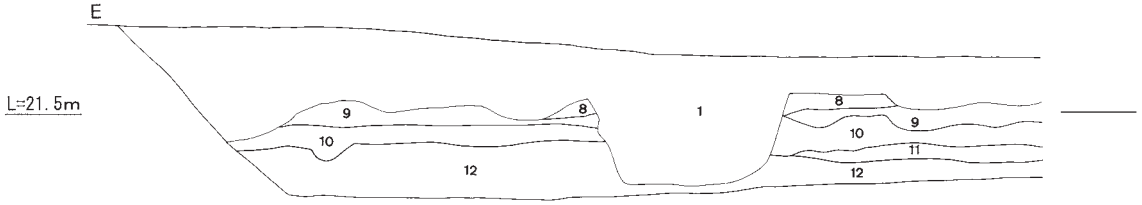
試掘調査では、西半部の１～９トレンチでは、顕著な遺構を検出しなかった。出土遺物もわずかで、河川堆積と見られる礫層から出土した土器はローリングを受けているものが多い。本調査を行った東半部では、様々な遺物が出土している。

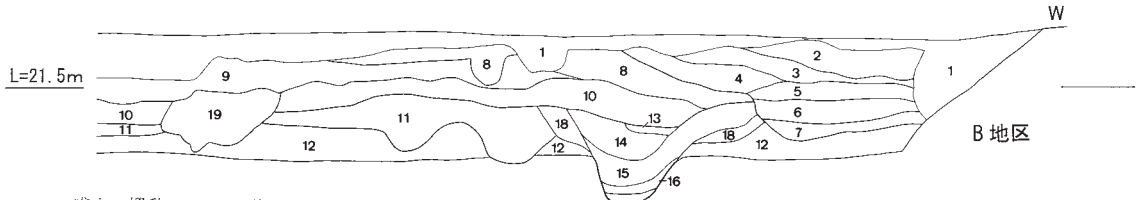
１は土師器甕の口縁部で、内湾気味に立ち上がる。２・３は土師器甕で、体部から口縁部が丸



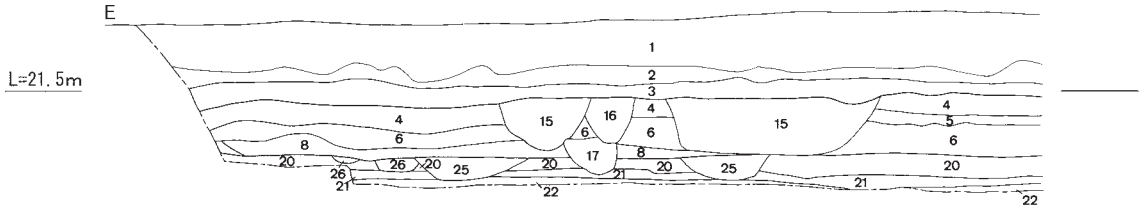



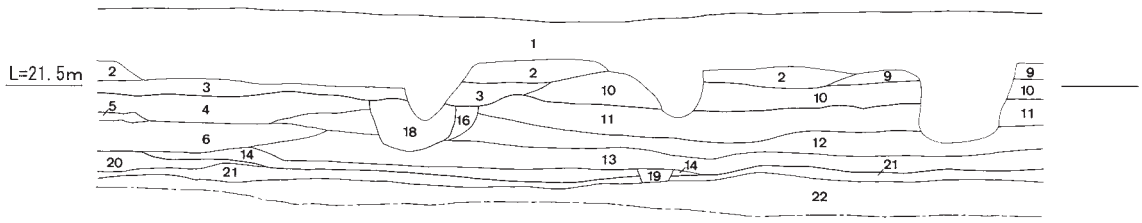

第６図　Ｂ地区・Ｃ地区平面図

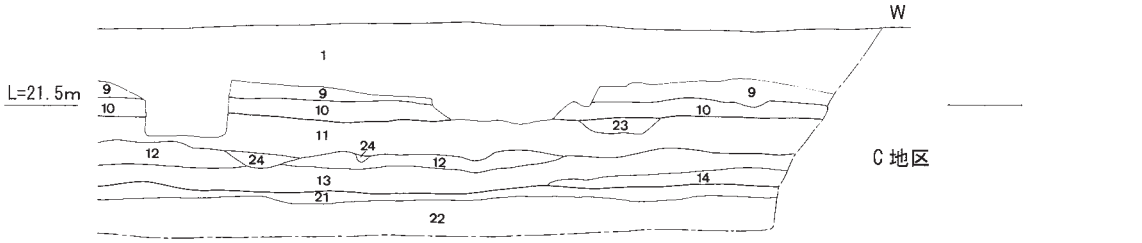



1、盛土・攪乱　5、黄茶色土　9、黄茶色砂質土　16、茶黄色土
2、灰黒色土　6、茶灰黄色土　10、黄褐色砂質土　13、暗茶色粘質土　17、暗黄色土
3、茶黄色土　7、茶褐色土　11、淡茶色砂質土　14、茶灰色粘質土　18、淡茶灰色細砂質土
4、茶色土　8、暗黄茶色砂質土　12、黄茶色細砂質土　15、灰茶色土　19、灰褐色土




1、盛土・攪乱　8、暗灰茶色土　15、暗灰色土　22、灰黄色細砂質土(上面金属成分染込み)
2、黄茶色土　9、暗黄茶色土　16、暗黄褐色土　23、淡灰色土
3、暗茶灰色土　10、暗灰茶褐色土　17、灰褐色土　24、淡茶色土
4、淡茶灰色土　11、暗褐色土　18、灰茶色礫　25、淡黄褐色土(耕作溝埋土)
5、淡灰茶色土　12、淡黄茶灰色土　19、淡茶褐色土　26、茶褐色土
6、茶灰色土　13、暗茶黄色土　20、茶黄色細砂質土
7、暗黄灰色土　14、暗黄茶灰色土　21、明茶黄色細砂質土

0　4m

第７図　Ｂ地区・Ｃ地区南壁断面図

味をもって屈曲する。口縁端部は丸く終わる。ほぼ全面的にナデ調整である。４・５は土師器椀で、ロクロ成形、底部糸切りである。以上の遺物は、10トレンチ出土である。

６は弥生土器把手付鉢で、体部外面に環状の把手を付す。胎土は精良である。11トレンチから出土した。後期の土器とみられる。７は弥生土器壺で、口縁端部が斜め下に垂下する。端面に凹線文を施す。頸部外面にも凹線文をめぐらせる。畿内第Ⅳ様式期の土器とみられる。12トレンチから出土した。

８・９は土師器皿で、底部から口縁部が丸味をもって立ち上がる。13世紀頃のものか。10・11・12は瓦器椀で、口縁部が肥厚する、いわゆる丹波型の椀である。内面のミガキはややまばらであり、外面にはミガキがほとんど見られない。13世紀頃のものとみられる。13は瓦器椀の底部で、高台内にヘラ記号と考えられる線刻がある。11・12と同時期とみられる。14・15は中国製青磁椀の底部で、龍泉窯産と考えられる。14は外面に蓮弁文を刻む。16は弥生土器甕の口縁部で、口縁部が２段状になり、外面に擬凹線文をめぐらせる。後期後半に位置付けられる。17は土錘である。以上の遺物は、13トレンチから出土した。

18は須恵質鉢の底部である。貼付け高台を付す。在地系の土器か。19は中国製白磁椀の底部である。玉縁状の口縁をもつ12世紀頃の製品と考えられる。20は肥前陶器の筒状の椀底部とみられる。高台畳付以外に暗緑褐色釉を施す。17世紀頃の製品と考えられる。23は肥前磁器染付皿である。やや深みをもつ。内面に花文を描く。17世紀前半頃の製品とみられる。以上の遺物は、13・14トレンチ間北側トレンチから出土した。

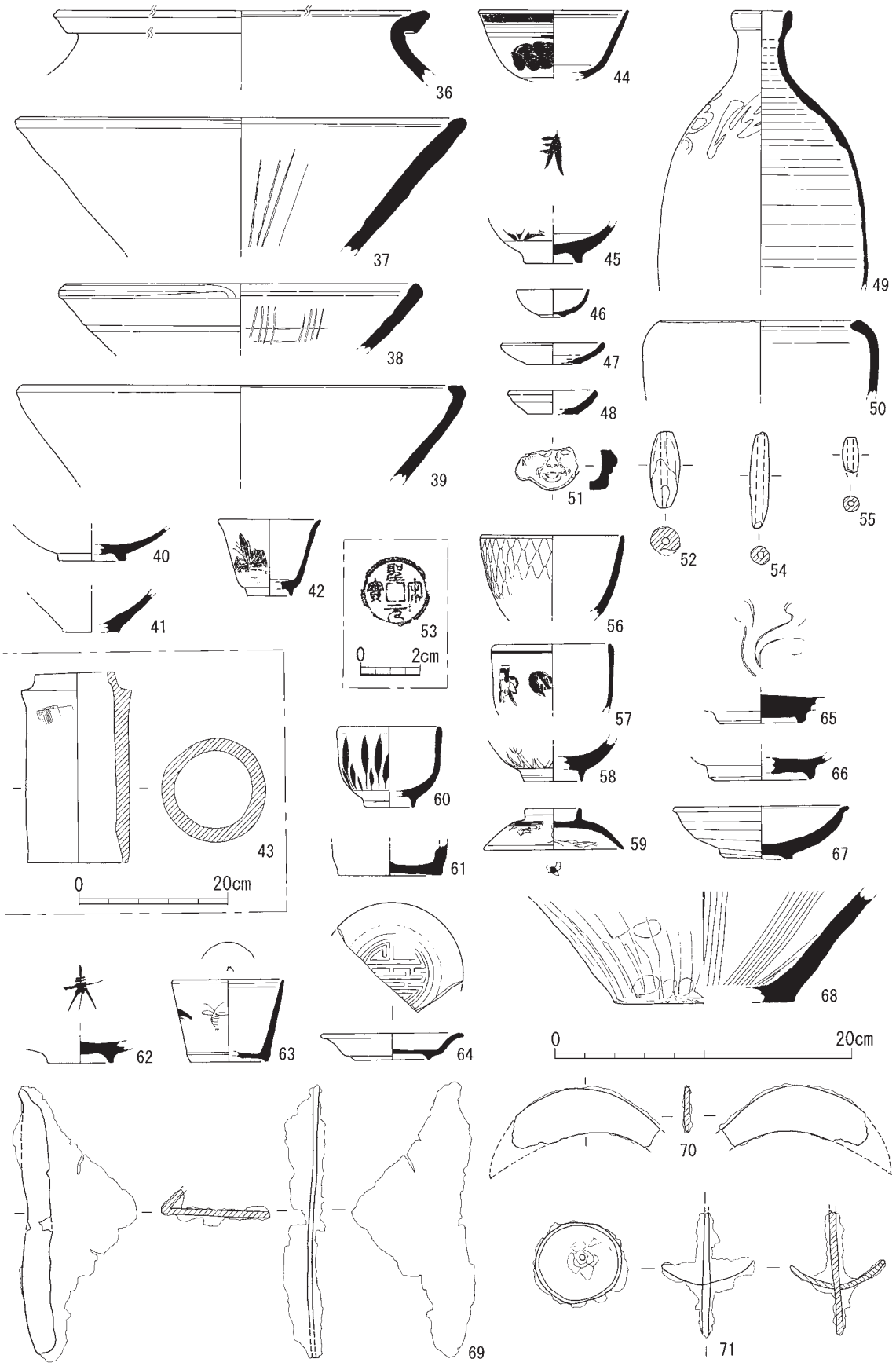
21は弥生土器壺の口縁部で、端部が斜め下方に垂下する。端面に凹線文を廻らし、棒状浮文を付す。畿内第Ⅳ様式期の土器とみられる。22は肥前磁器の染付皿である。形状は段皿状である。見込みに銀杏文を描く。17世紀前半頃の製品で、いわゆる初期伊万里である。24は肥前陶器の皿である。銅緑釉を施す。見込みは、釉を蛇の目状に掻きとり、その部分に砂目痕がある。17世紀後半頃の製品とみられる。以上の遺物は、13・14トレンチ間南側トレンチから出土した。

25は中国製の青花磁器鉢である。口縁端部が輪花状を呈する小型の鉢である。いわゆる「芙蓉手」と呼ばれるものである。17世紀前半頃のものであろう。15トレンチから出土した。

26は弥生土器壺の口縁部である。口縁端部をわずかに上下に拡張する。端面には凹線文をめぐらせる。27は須恵質の鉢で、東播磨系の製品である。13世紀頃のものか。28は瓦質火舎の胴部とみられる。２条の貼付突帯の間に菊花文を押印施文する。29は土師器杯もしくは深目の皿とみられる。内外面ナデ調整である。30～32は土師器皿である。内外面ナデ調整である。33は土師質の香炉である。外面に菊花文、花菱文を押印施文する。34は中国製青磁椀の底部で、龍泉窯産と考えられる。35は中国製白磁皿の底部である。高台畳付を4か所、浅く刳り込む。高台内に「二」の墨書が見られる。以上の遺物は、15・16トレンチ間トレンチから出土した。

36は丹波焼甕の口縁部とみられる。算盤玉形の胴部をもつものと考えられる。14世紀頃の製品か。37は丹波焼の擂鉢である。擂り目は一本引きである。16世紀頃の製品とみられる。38は丹波焼擂鉢で、擂り目は４本を単位とする櫛引きである。17世紀頃の製品とみられる。39は丹波焼の

第８図　出土遺物実測図１（試掘トレンチ）




第９図　出土遺物実測図２（試掘トレンチ）

鉢である。内面のみ施釉する。40は肥前陶器の皿で、内面に銅緑釉を施釉する。見込みの釉を蛇の目状に掻き取る。41は肥前陶器の椀である。高台は碁笥底状である。42は中国製青花磁器の小杯で、口縁端部が外反する。43は瓦質の土管である。以上の遺物は、16トレンチから出土した。

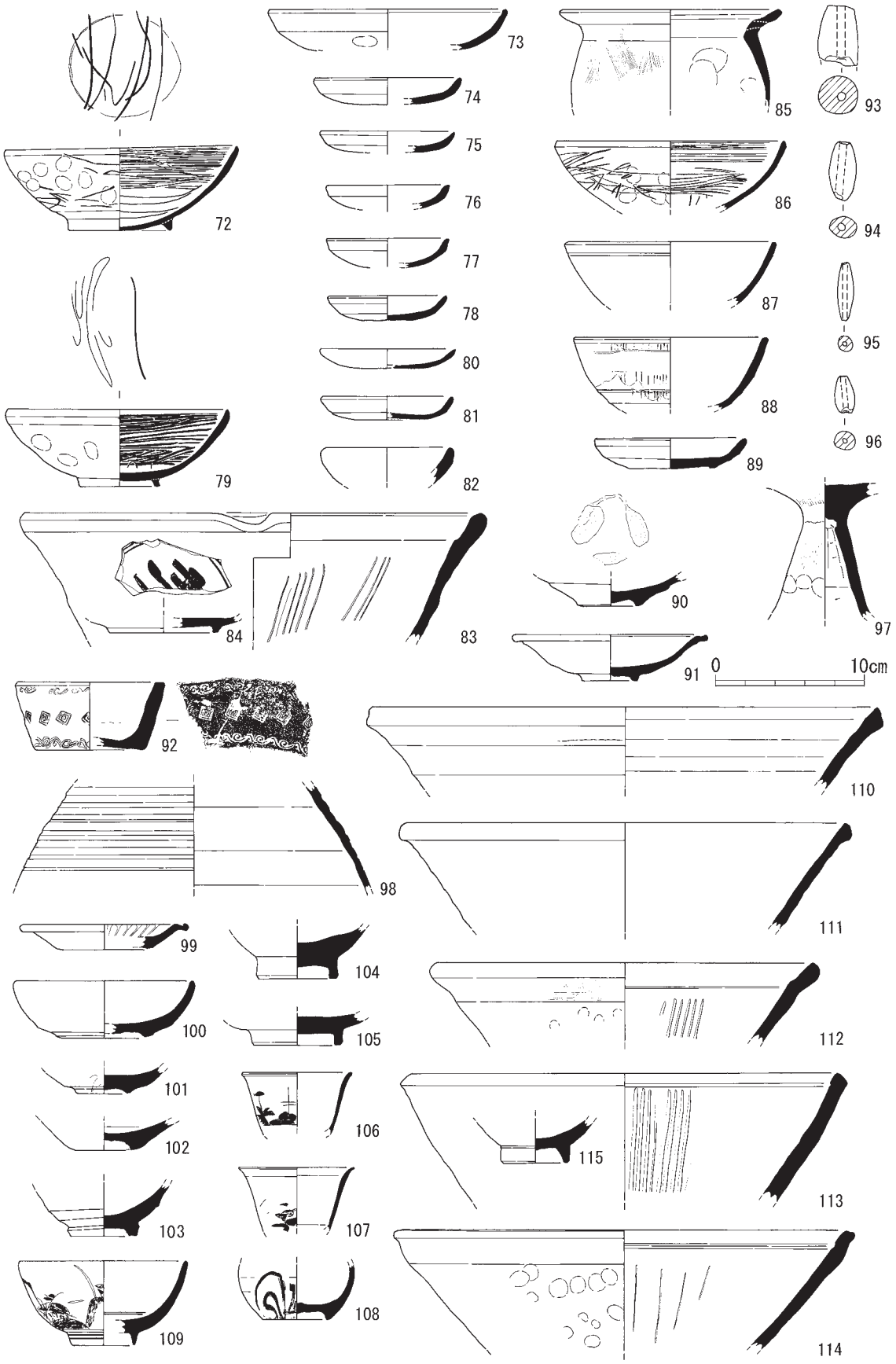
44は染付磁器椀で、口縁端部がやや外反気味になる。45は染付磁器椀の底部で、見込みにハリ痕が見られる。46は白磁の小椀で、国産とみられる。47・48は土師器皿で、ロクロ成形、底部糸切である。49は丹波焼の徳利で、肩部に筒描きで文字を書く。50は陶器の甕で、蓋付であったものとみられる。51は伏見人形の顔面部分である。大黒天像か。52は土錘である。53は北宋銭の「聖宋元寶」で、1101年初鋳である。以上の遺物は、18トレンチから出土した。54は細長い形状の土錘で、19トレンチから出土した。

55は小型の土錘である。56は肥前磁器染付椀で、一本描きの網目文を描く。17世紀の製品か。57も肥前磁器染付椀で、17世紀の製品とみられる。58は肥前磁器染付椀の底部で、二本描きの網目文を描く。59は染付磁器蓋で、端反(はぞり)椀の蓋とみられる。60は染付磁器椀で、器胎は厚目である。61は丹波焼徳利底部で、焼成堅緻である。62は染付磁器椀底部で、見込みにハリ痕がある。63は肥前染付磁器向付で、いわゆる「蕎麦猪口」である。64は国産白磁皿である。58～64は18世紀後半頃以降の製品とみられる。65は中国製青磁椀底部、66は中国製青磁皿底部とみられる。67は肥前陶器皿で、17世紀初頭頃の製品か。68は瓦質擂鉢の底部である。以上の遺物は、20トレンチから出土した。

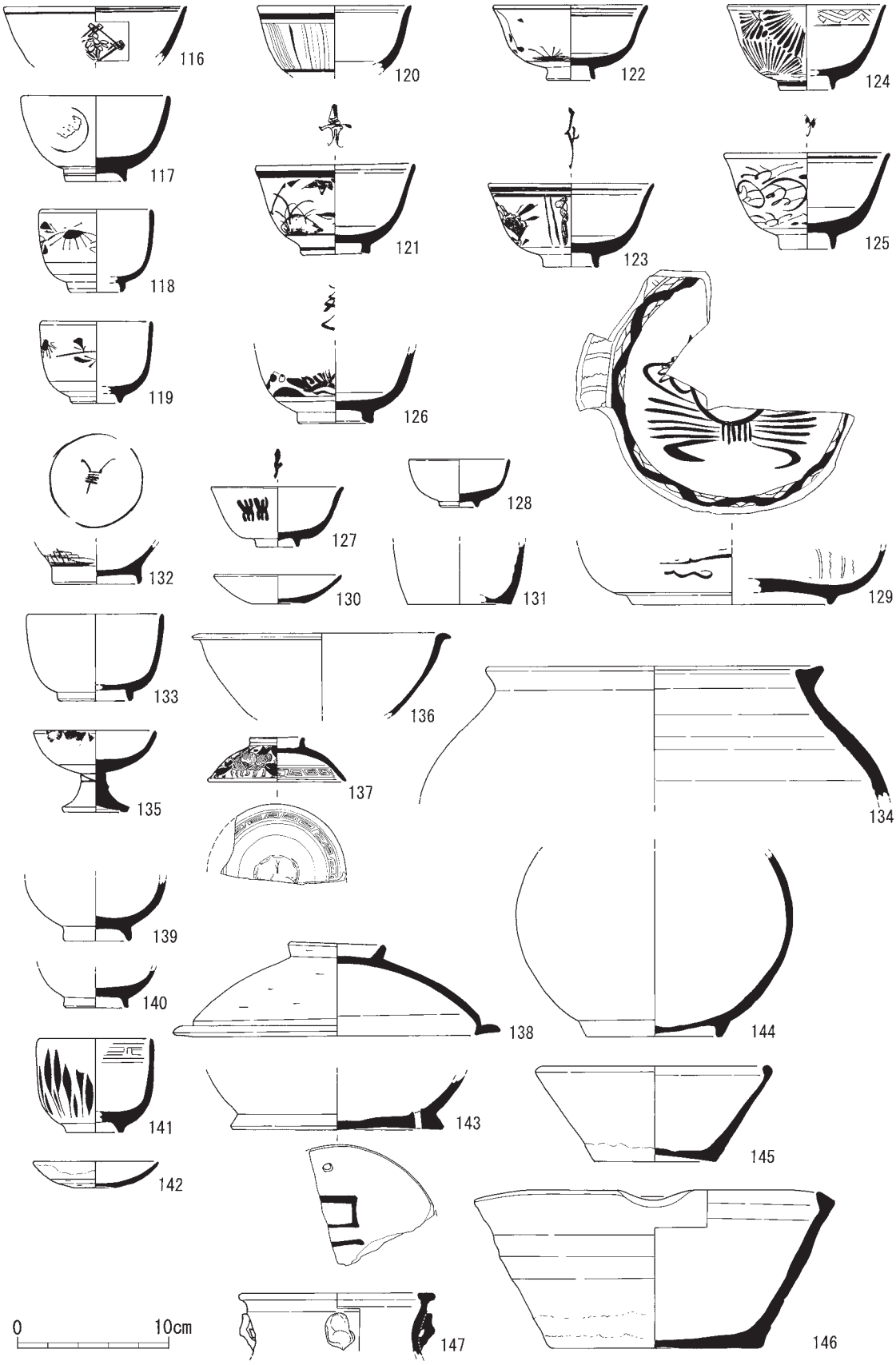
②Ａ地区出土遺物

72は瓦器椀で、内面には密なミガキ、外面には疎なミガキが施される。見込みに重ね焼の痕跡が残る。73は土師器皿で、端部がわずかに玉縁状になる。74～78は土師器皿で、口径９ｃｍ前後を測る。以上の遺物は、12世紀末から13世紀にかけてのころのものとみられ、土坑ＳＫ09から出土した。79は瓦器椀で、内面のミガキは密である。12世紀後半頃のものとみられる。溝ＳＤ04から出土した。80～82は土師器皿で、82は厚手である。80は溝ＳＤ33、81は土壙ＳＫ07、82はピットＳＰ40出土である。83は瓦質擂鉢で、口縁端部が屈曲して外反し、やや受け口状になる。ＳＸ06出土である。84は中国製青花磁器皿で、見込みに「寿」字文を描く。溝ＳＤ05出土である。85は土師器甕で、外面ハケ目調整である。溝ＳＤ50から出土した。86は瓦器椀で、72に類似する。ピットＳＰ325から出土した。

87は中国製青磁椀で、口縁端部外面に沈線がめぐる。88は瀬戸美濃系の丸椀で、外面に間垣状の沈線文がめぐる。この２点は、石組溝ＳＸ08から出土した。89は美濃窯産の丸皿で、見込みは無釉である。16世紀の製品である。ピットＳＰ43から出土した。90は肥前陶器の皿である。見込みに砂目の目跡がある。17世紀前半頃の製品である。土坑ＳＫ512出土である。91は肥前陶器の皿で、口縁部が屈曲する。いわゆる「折縁皿」である。見込みに砂目の目跡が残る。17世紀前半頃の製品か。ピットＳＰ60から出土した。92は瓦質香炉である。外面には、上下端に波形文、中央に雷文を押印施文する。ピットＳＰ57出土である。93～96は土錘である。93はピットＳＰ12出土で、その他は包含層出土である。




第10図　出土遺物実測図３（Ａ地区）




第11図　出土遺物実測図４（Ａ地区）

97は土師器高杯の脚部である。98は焼締陶器壺で、東南アジアの製品と考えられる。外面は赤褐色を呈し、内面は白灰色地に暗褐色の金属成分が滲出する。99は美濃窯産の菊皿で、16世紀の製品か。100～103・115は肥前陶器である。16世紀末頃から17世紀にかけての製品である。104は中国製青磁椀、105は中国製青磁皿である。106・107は中国製青花磁器小杯である。薄手で、口縁端部が外反する。108は肥前磁器染付小瓶である。簡略な草花文を描き、高台には砂粒が付着する。17世紀前半頃の製品で、いわゆる初期伊万里である。109は肥前磁器染付椀で、いわゆる「くらわんか」である。18世紀の製品である。110・111は東播系の須恵質鉢で、13世紀頃の製品か。112は瓦質擂鉢で、口縁部が屈曲して外反する。113は備前焼擂鉢で、14世紀頃の製品か。114は丹波焼擂鉢で、擂目は一本引きである。16世紀の製品とみられる。以上の遺物は、包含層出土である。

116･117は肥前磁器染付椀で、コンニャク印判で施文する。18世紀の製品で、117はいわゆる「くらわんか」である。118・119は染付磁器椀で、胴部がほぼ直線的に立ち上がる。120～125は染付磁器椀で、口縁部が外反気味になる端反椀である。126も同様の椀とみられる。127は染付磁器椀で、端反の小椀である。瀬戸産の可能性もある。128は白磁小椀である。129は染付磁器鉢である。高台内は無釉である。130は陶器質の灯明皿である。131は丹波焼徳利で、焼成は堅緻である。118～131は18世紀末～19世紀頃の遺物である。以上の遺物は、土坑ＳＫ03から出土した。

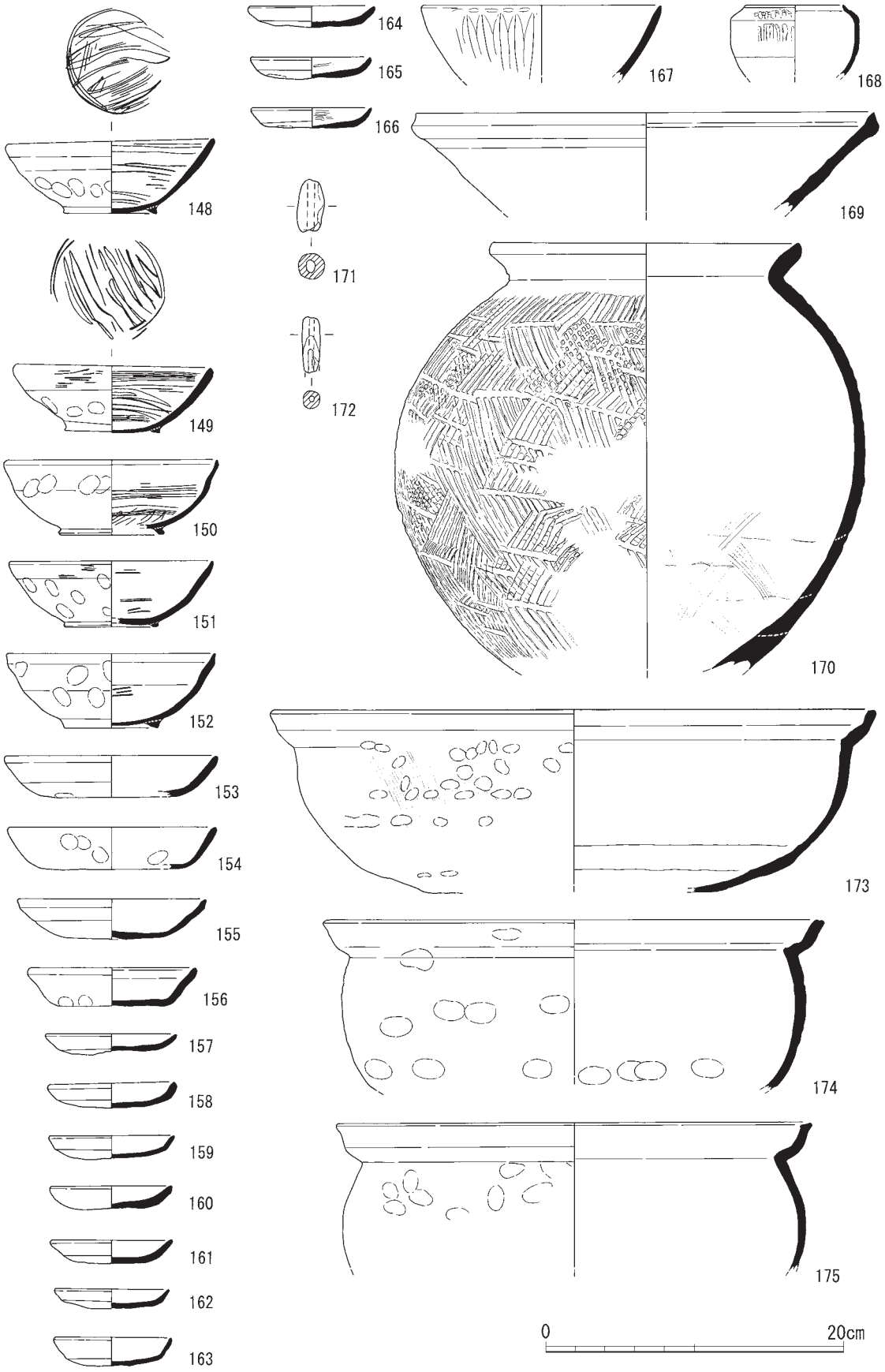
133は陶器椀で、京焼系とみられる。134は丹波焼甕である。これら２点は、溝ＳＤ05から出土した。135は染付磁器仏飯器で、肥前産とみられる。外面に雨降文を描く。土坑ＳＫ512出土である。136は陶器鉢で、丹波産とみられる。137は染付磁器蓋で、端反椀の蓋である。これら２点は、土坑ＳＫ54出土である。

132は染付磁器椀で、高台が高く、いわゆる「広東椀」である。138は陶器蓋で、把手付土鍋の蓋である。139は肥前陶器椀で、17世紀後半の製品である。140は陶器椀で、京焼系か。141は染付磁器椀で、胴部がほぼ直線的に立ち上がる。142は陶器質の灯明皿である。143は陶器の鉢状の器であるが、底部を穿孔する。底面に墨書がある。144は国産白磁瓶で、肥前産とみられる。145・146は丹波焼片口鉢である。147は丹波焼香炉もしくは火入れである。17世紀の製品である。

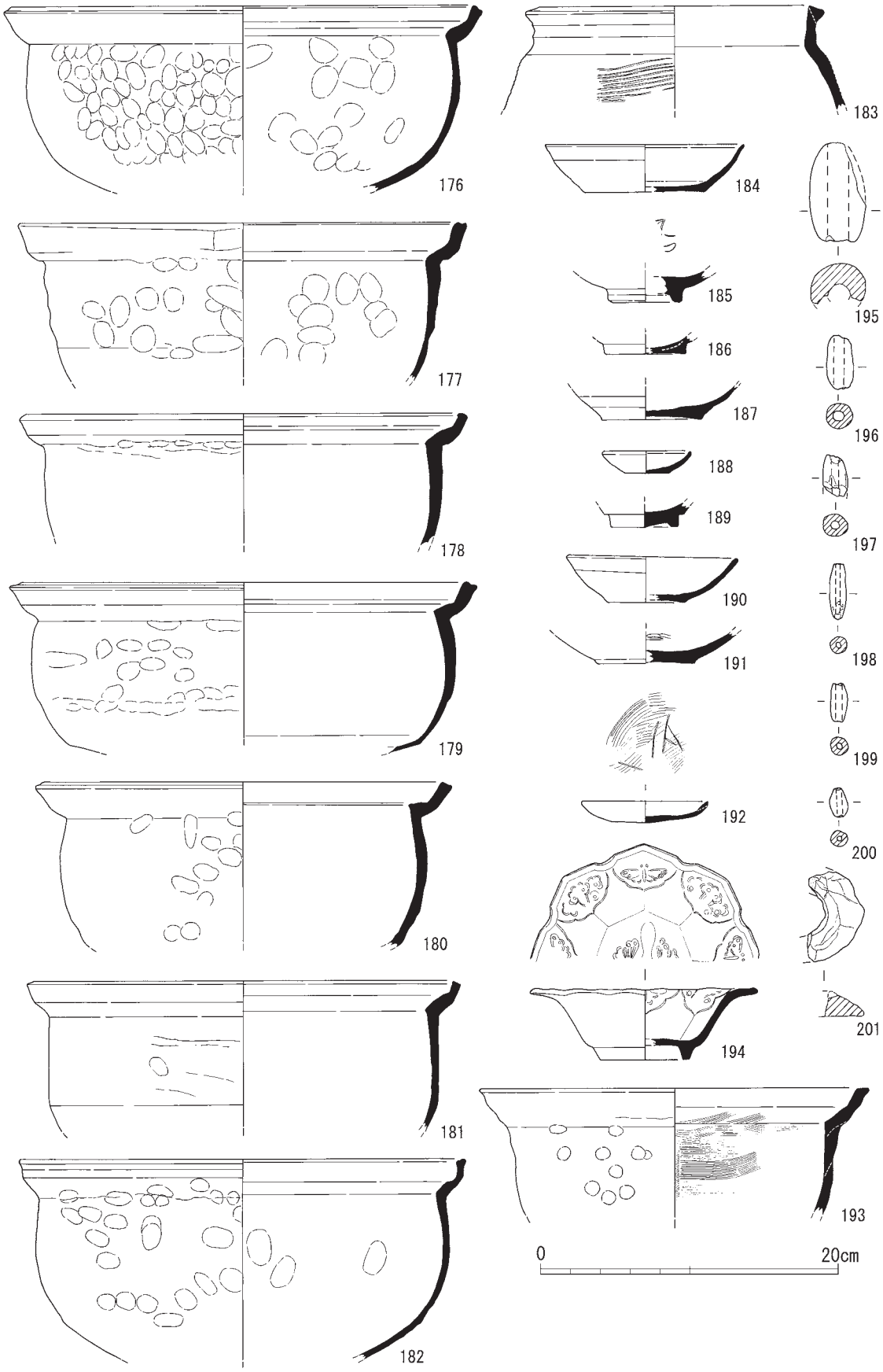
Ａ地区では鉄製品も出土している。69は鋤先もしくは鍬先の一部とみられる。土坑ＳＫ03から出土した。70はやや小振りの鎌とみられる。包含層出土である。

③Ｂ・Ｃ地区出土遺物

Ｂ地区では、溝ＳＤ22から中世の遺物がまとまって出土しているのが注目される。148・149は瓦器椀で、高台径が大きく、体部が直線的に立ち上がり、口縁端部が肥厚し、いわゆる丹波型の特徴をもつ。内面のミガキはやや疎で、外面にはほとんどミガキがみられない。150～152も瓦器椀である。体部が丸味をもって立ち上がるが、高台径は大きい。ミガキはやや疎である。153～163は土師器皿である。153～155は口径13～14ｃｍの大型、157～163は口径９ｃｍ前後の小型、156は口径がほぼ11ｃｍの中型である。164～166は瓦器皿で、口径は土師器皿の小型に近い。167は中国製青磁椀で、外面にやや細手の蓮弁文を刻む。龍泉窯産とみられる。168は中国製青白磁




第12図　出土遺物実測図５（Ｂ地区SD22）




第13図　出土遺物実測図６（Ｂ・Ｃ地区）

小壺で、外面下半は無釉である。169は東播系の須恵質鉢である。170は瓦質もしくは土師質の甕で、胴部に綾杉状のタタキ目がある。播磨から北丹波の地域に分布している。171・172は土錘である。173～182は瓦質鍋である。体部は丸味をもち、口縁部は屈曲して受け口状になる。これらの遺物は、13世紀頃のものとみられる。

183は土師器鍋で、外面にタタキ目が残る。溝ＳＤ08出土である。184は須恵器杯で、底部糸切である。185は中国製青磁椀で、龍泉窯産と見られる。これら２点は、溝ＳＤ14出土である。186は土師器椀で糸切高台をもつ。187は須恵器杯で、底部糸切である。188は土師器皿で底部糸切である。これら３点は、溝ＳＤ112出土である。

189は美濃窯産の天目椀、190は底部糸切の土師器椀、191は黒色土器椀、192は瓦器皿、193は土師器鍋である。包含層出土である。195～200は土錘である。201は不明滑石製品である。

Ｃ地区では畝溝群などから遺物が出土しているが、細片が多い。194は国産青磁鉢で、型成形で、蝶文や霊芝文を浮彫する。三田青磁とみられる。幕末頃の製品か。近代井戸に切られた長方形土坑から出土した。（引原茂治）

## ６．まとめ

今回の調査では、「戸田」の集落の始まりが12世紀後半頃であることが確認できた。これは、この地域の歴史を考える上で重要な成果と言えよう。

戸田遺跡の周辺地域は、古代の雀部（ささいべ）郷に属しており、寛治５年（1091）に丹波兼定により京都松尾社に寄進され、養和元年（1181）頃までには松尾社領の荘園雀部庄として立荘されていた。松尾大社文書のうち、鎌倉時代から室町時代にかけての雀部庄関係の文書に「富田」「とた」の記載があり、これが今の戸田に比定されている。以上のようなことから、戸田の集落の始まりは松尾社領雀部庄立荘の頃と考えられる。今回は、その頃の戸田集落の一部を確認したと言えよう。

出土遺物では、中国製青磁・白磁・青白磁のほかに、東南アジア産の甕とみられる焼締陶器片の出土が注目される。また、国産陶磁器でも中世から近世にかけての各時期の製品が含まれている。戸田の集落は、由良川沿いに営まれている。かつて由良川では、さらに上流の綾部市域まで船が往来していたという。このような多種多様な土器・陶磁器類などからみて、中世から近世にかけての戸田は、由良川の水運を利用した交易活動などによって繁栄した豊かな村であったとみることもできる。（引原茂治）

注１　調査参加者　真下春美　小島健之介　中島恵美子　川村真由美　村岡弥生

参考文献

「京都府の地名」（『日本歴史地名大系』第二六巻　平凡社）1981
福知山市史編さん委員会『福知山市史』　史料編三　1990
「戸田・興地区発掘調査概要」（『福知山市文化財調査報告書』第46集　福知山市教育委員会）2004

# ３.新庄遺跡第５次発掘調査報告

## １．はじめに

新庄遺跡の発掘調査は、府営経営体育成基盤整備事業に伴い、京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けて実施した。

新庄遺跡は、京都府南丹市八木町室橋に所在する集落遺跡である。周辺には池上遺跡をはじめ、野条遺跡・室橋遺跡・諸畑遺跡など弥生時代から中世にかけての遺跡が数多く存在しており、南丹市域でもとくに遺跡の密集する地域として知られる。

当遺跡は府営ほ場整備事業に伴い、平成10年度から平成18年度にかけて計４次にわたって八木町教育委員会（現南丹市教育委員会）による試掘調査が行われ、その結果、古墳～奈良時代・中世にかけての遺構・遺物が確認されている。(注１)

今回の調査は、ほ場整備事業に伴うものであり、調査か所については、工事によって遺構面まで掘削が及ぶ範囲を調査対象とし、さらにこれまでの試掘調査の成果を踏まえながら南丹市教育委員会および京都府教育委員会の指導のもとに調査区を設定した。なお、今回の調査次数は、南丹市教育委員会との調整により第５次調査とした。

現地調査は、平成20年５月９日～同年９月12日まで実施した。調査面積は2,270㎡（４地区）である。発掘調査は当調査研究センター調査第２課課長肥後弘幸、調査第２課調査第２係長森正、同次席総括調査員辻本和美、同専門調査員竹井治雄、同調査員高野陽子が担当した。なお、調査が終盤を迎えた８月30日（土）には現地説明会を開催した。

調査期間中は、南丹市教育委員会・京都府教育委員会のほか、地元の方々から多くのご指導・ご協力を得た。記して感謝したい。(注２)

なお、調査に係る経費は、全額、京都府南丹土地改良事務所が負担した。

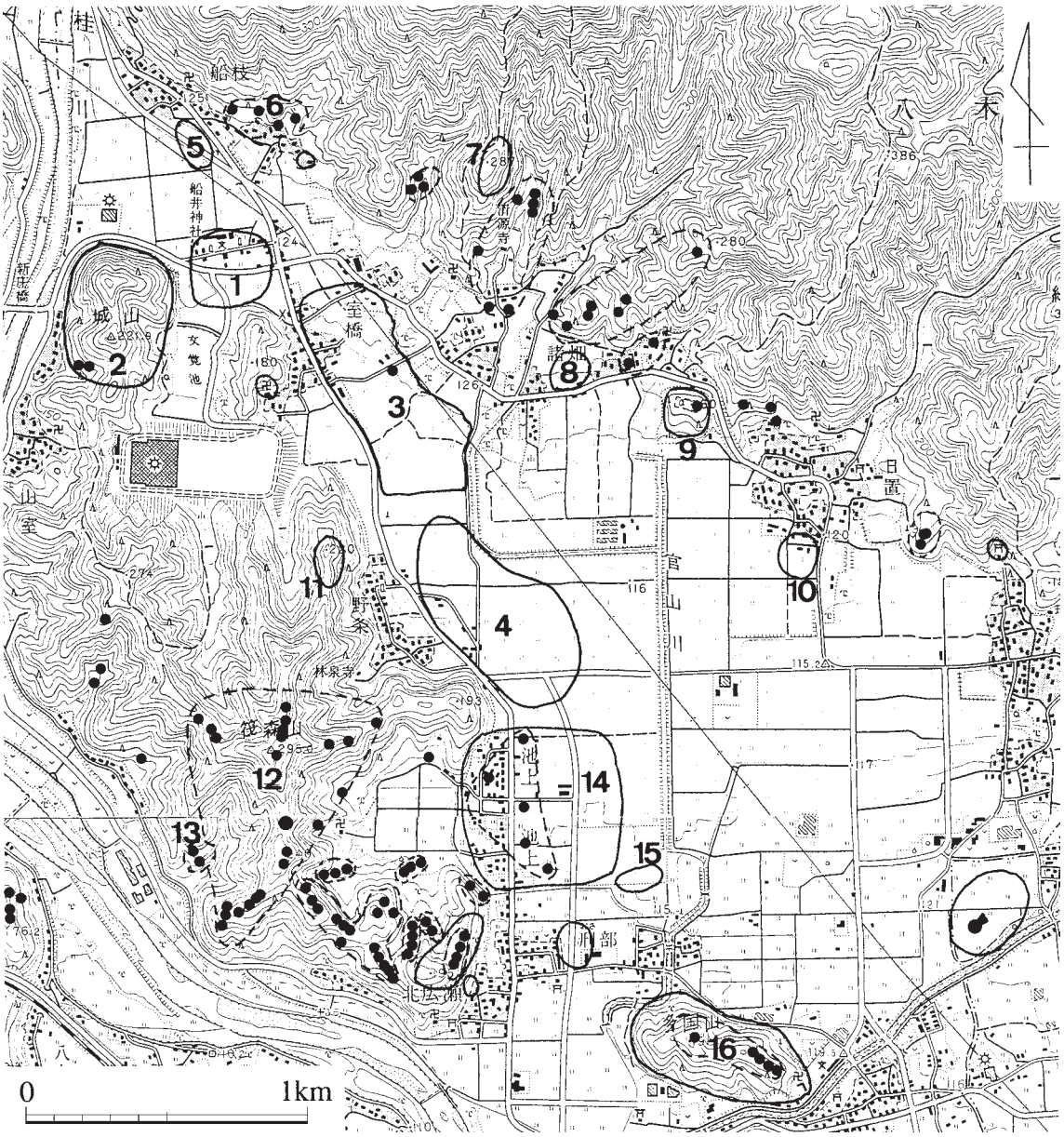
## ２．周辺の遺跡（第１図）

新庄遺跡は、亀岡盆地の最北端に近い地域に位置する。亀岡盆地は中央部を大堰川（桂川）が貫流し、当遺跡はその東岸に位置する。遺跡の東方には丹波山地が屏風のように立ちはだかる。周辺には筏森山（標高295m）や多国山（標高191m）などの山塊が点在し、亀岡盆地と切り離された小盆地状を呈している。

周辺の室橋遺跡からは縄文時代の石鏃が出土しており、縄文時代には早くも人々の生活の場となっていたことを窺わせるが、土器等の遺物や明確な遺構については未検出である。続く弥生時代には、池上遺跡から弥生時代中期の住居跡や墓地が検出されており、大規模な集落遺跡が広が

っていたことが明らかになった。同後期の集落跡としては、野条遺跡や諸畑遺跡が知られている。さらに諸畑遺跡や室橋遺跡では、古墳時代中期から後期にかけての住居跡が検出されており、この時期にも大規模な集落が営まれていることが明らかになった。詳しい調査は行われていないが、池上遺跡を眼下に望む筏森山の南部の尾根上には、古墳時代後期の群集墳が分布しており、周辺集落の人々の奥津城であろうと思われる。

今回調査対象となった新庄遺跡の南方約５kmの屋賀・池尻周辺は、承安４(1174)年に成立した後白河院法華堂領の吉冨荘絵図の写しである「丹波国吉冨庄絵図写」に「国八庁」という国衙に関する地名が記されており、丹波国府の有力な候補地である。池尻遺跡や室橋遺跡では、近年の




第１図　周辺遺跡分布図(国土地理院１/25,000殿田・亀岡)

１．新庄遺跡　２．新庄城跡　３．室橋遺跡　４．野条遺跡　５．船枝遺跡
６．清谷古墳群　７．畑中城跡　８．諸畑遺跡　９．八木田遺跡　10．日置遺跡
11．野条城跡　12．筏森山古墳群13．城谷口古墳群　14．池上遺跡　15．池上古里遺跡
16．多国山古墳群

調査で奈良時代の大型掘立柱建物跡や墨書土器が見つかっており、周辺に何らかの公的施設が存在する可能性がある。

新庄遺跡周辺には、新庄用水を開削したと伝える高雄神護寺の僧文覚上人(1139～1203年)に由来する文覚池や用水の見水場とする文覚堂(室橋堂)など、文覚の名を冠した灌漑施設が多く残されている。新庄遺跡南方の野条遺跡や室橋遺跡では、古くは弥生時代から古墳時代に遡る大規模な溝や奈良～平安時代にかけての大小の溝群が検出されている。これまでのところ文覚上人が開削したとされる用水に直接結びつく溝等は確認されていないが、当地域一帯で検出される溝群は、亀岡盆地北端部における治水や水田開発の歴史を知る上に重要な資料である。

当遺跡の北側には、船井郡の郡名を冠する船井神社が祭られており、延喜式神名帳に載る船井郡十座の内の船井神社に比定されている。もともとは現在の場所から約300m西北の大堰川河畔に鎮座していたとされ、旧社地には塚が残る。

神社の北側には「舟枝」の地名があり、「船井(舟居)」ともども大堰川の水運(舟運)に由来する地名と考えられている。(注3)

## ３．調査概要

### (1)調査の概要

今回の新庄遺跡第５次調査では、調査対象地に４か所の調査区を設けて発掘調査を実施した(第２図)。各調査地区は調査順に１～４区と呼称する。それぞれの地区の調査面積は、１区が840㎡、２区が270㎡、３区が760㎡、４区が400㎡で、４地区をあわせた調査面積の合計は2,270㎡である。調査以前の土地利用状況は、１・３区は水田、２区は畑地・果樹栽培地として利用されていた。４区は以前水田であったが、土砂置き場に使用されていた。

調査にあたっては、まず重機により耕作土を除去し、その後、人力により遺構の検出と精査作業を行った。検出した遺構については、遺構の種類を２桁のアルファベット、それ以下、今回調査次数の「５」、地区名「１～４」、検出番号「01～99」の順に４桁の数字で表記した。また、建物跡や住居跡に伴う柱穴はＰ、土坑はＫと略記する。なお、調査地の地区割りや実測・空撮図化等に際しては、世界測地系座標を用いた。

### (2)基本層序(第３・４図)

調査地の標高は、122～123m前後を測る。調査地全体の地形は、北東側がやや高く南西に向かって低くなるが、おおむね平坦面を呈する。

１～３区では、深さ15～20㎝程の耕作土・床土直下に明黄褐色ないし黄褐色粘質土の広がりが認められ、遺構はこの層の上面から主に検出された。このように遺構検出面までは比較的浅く、遺構の残存状態から後世の開墾等により大きく削平を受けていることが判明した。４区は調査前には土砂置き場として利用されていた。北側では旧水田耕作土の下層が遺構検出面である明黄褐色粘質土(地山)になるが、南側に行くに従って上面に暗褐色粘質土が堆積しており、遺構はこの層の上面で検出された。地形的に４区は南側からのびる丘陵の裾部に近い位置にあたり、南側に

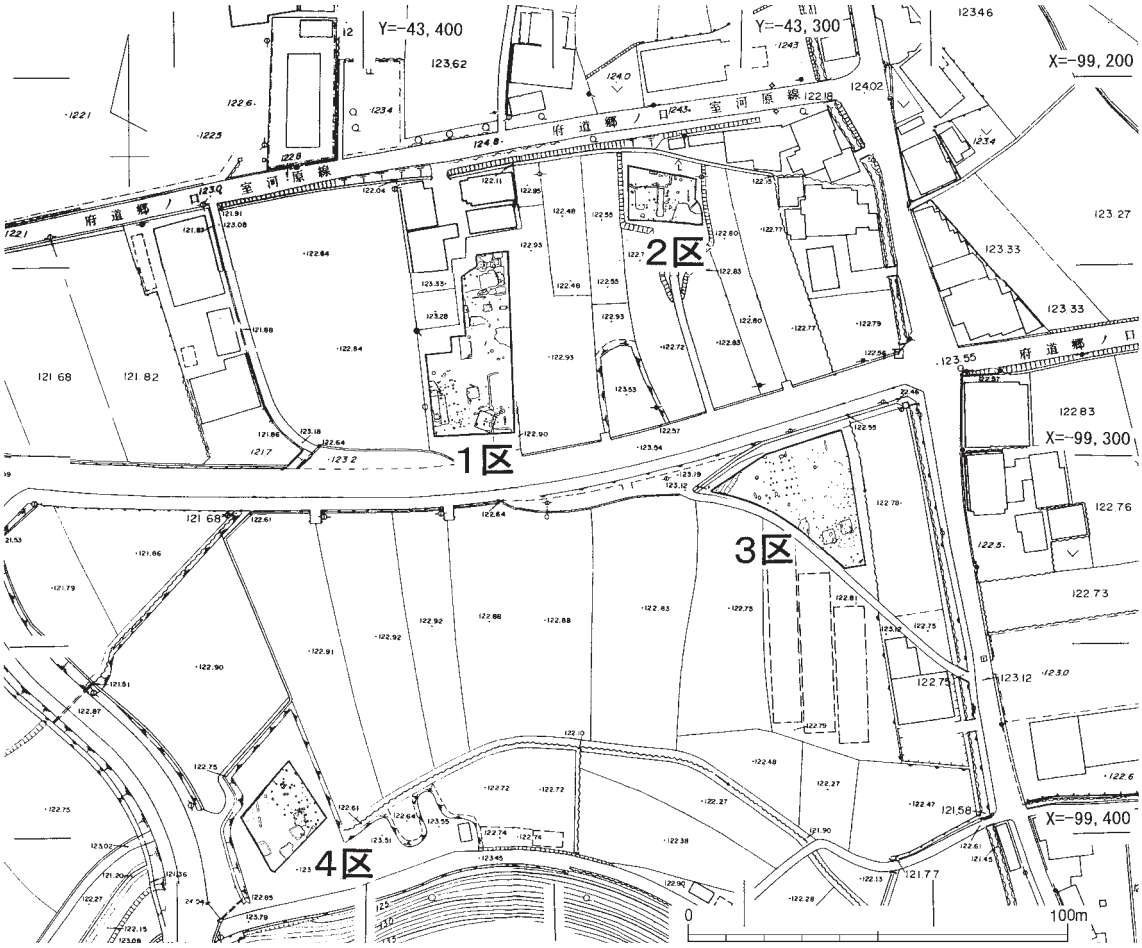
行くに従って高くなるものと想定されたが、土層の堆積状況からみて４区と丘陵の間には谷状の地形が存在するものと想定される。

(3)検出遺構

今回の調査では、古墳時代前期から中世の遺構を検出した。以下、各調査区検出遺構の概略を記す。

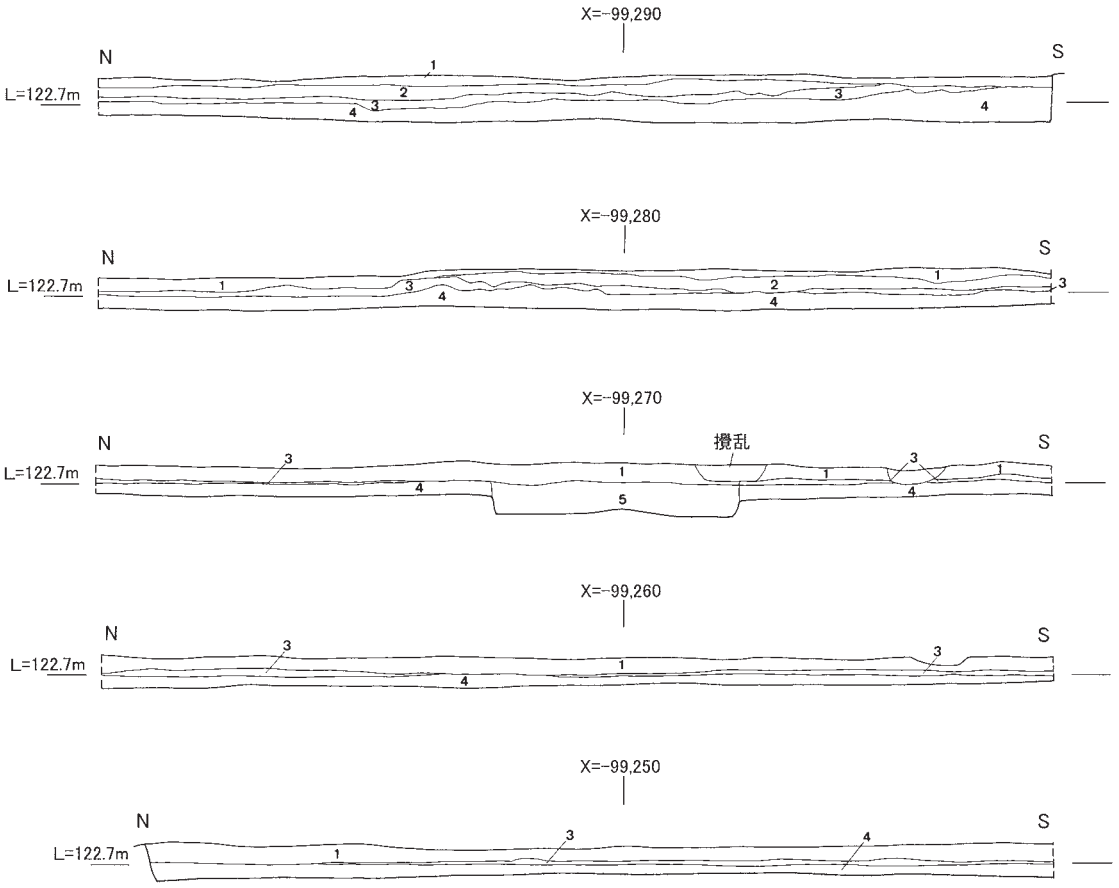
1)１区(第５図)　１区の主な検出遺構としては、竪穴式住居跡１基と土坑群･集石遺構がある。調査区の北側では、以前この地で操業されていた瓦製造に関連する粘土を採掘したと思われる近世の大小土坑群を検出した。これらの土坑では、瓦片や廃材を大量に投棄したものがみられた。

竪穴式住居跡ＳＨ5177(第６図)　１区の南端部で検出した方形の竪穴式住居跡である。住居の北側辺には集石遺構ＳＸ5158が重なる。床土直下から検出され全体的に削平を受けている。住居跡の規模は、4.3m×4.3mの方形で、残存部の深さは0.1mを測る。住居跡の主軸は、N10°Eである。床面上で主柱穴の検出作業を行ったが、通常見られる床面の四隅では確認することが出来なかった。住居跡中央から炉跡と見られる焼土坑と、これを挟んで南北方向に２対の円形ピットを検出した。炉跡は径約40cm、深さ30cmを測る不整形な平面形を呈する。炉跡の周辺の床面には薄い焼土の広がりがみられた。周壁溝が住居壁に沿って掘られており、幅約10cm、深さは８cmを測る。このほか住居跡の南西角から隅円方形の土坑Ｋ１を検出した。長辺80cm、短辺52cmを測



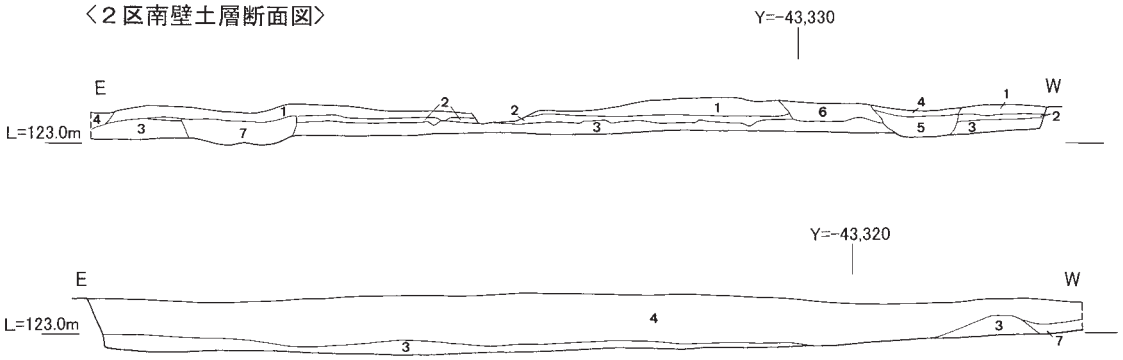

第２図　調査地位置図

〈１区東壁土層断面図〉




1. 黄灰色粘質土（2.5Y 5/1）〈耕作土〉
2. 灰黄褐色粘質土（10YR 4/2）〈床土〉
3. 明褐色粘質土（10YR 3/3）
4. 明黄褐色粘質土（10YR 6/6）
5. 暗褐灰色粘質土（10YR 4/1）

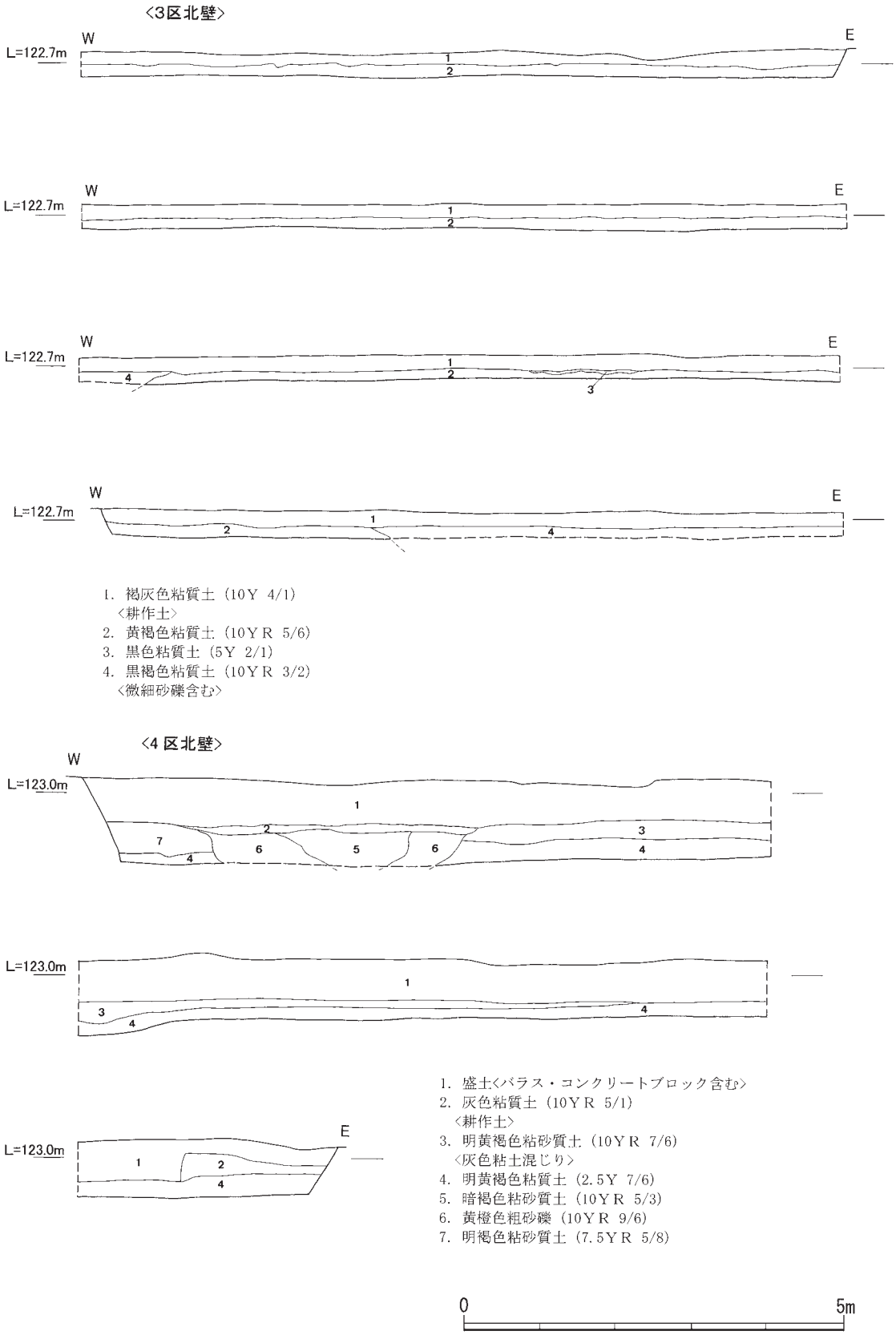
〈２区南壁土層断面図〉



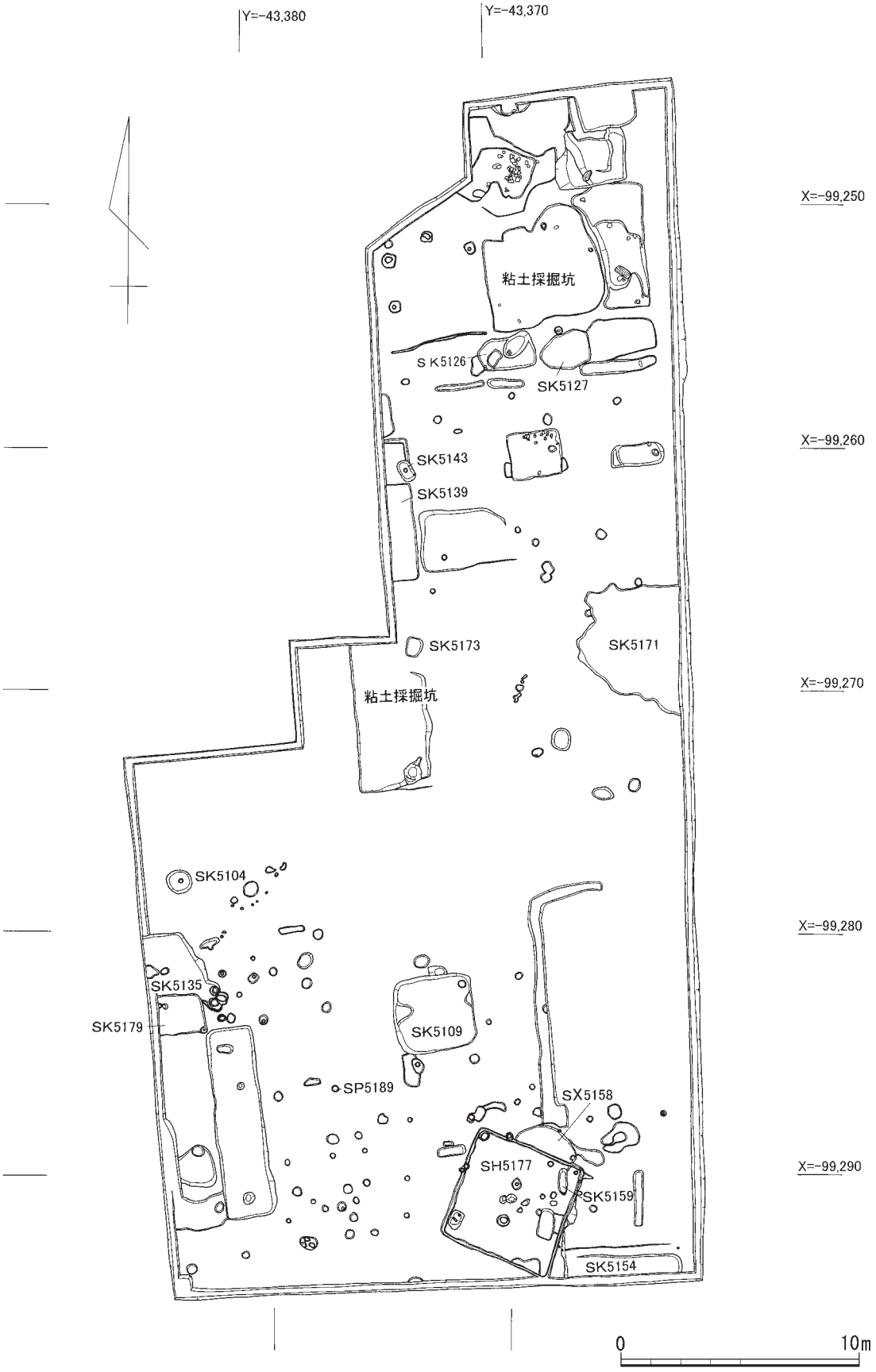

1. 暗黒灰色粘質土（10YR 4/1）
2. 明黄褐色粘質土（10YR 6/6）
3. 明褐色粘質土（10YR 4/6）
4. 暗褐灰色粘質土（10YR 2/4）〈盛土〉
5. 暗褐灰色粘質土（10YR 3/4）
6. 黒灰色粘質土（10YR 3/1）
7. 暗灰色粘質土（10YR 3/3）

0　5m

第３図　１区・２区土層断面図




第４図　３区・４区土層断面図


Y=-43,380
Y=-43,370
X=-99,250
X=-99,260
X=-99,270
X=-99,280
X=-99,290
粘土採掘坑
SK5126
SK5127
SK5143
SK5139
SK5173
SK5171
粘土採掘坑
SK5104
SK5135
SK5179
SK5109
SP5189
SX5158
SH5177
SK5159
SK5154
0
10m

第５図　１区遺構配置図

り、土坑内から土師器小型丸底壺１点（第16図８）が出土した。本住居跡内からは他にもう1点の小型丸底壺（第16図７）が出土しており、住居の時期は古墳時代前期に所属するものと考えられる。なお、床面から主柱穴が検出されなかったことから、この住居跡は、床面に直接柱を建てる構造をもつものと考えられ、炉の両側の柱穴は、主柱の補助としての役割をもつものと思われる。

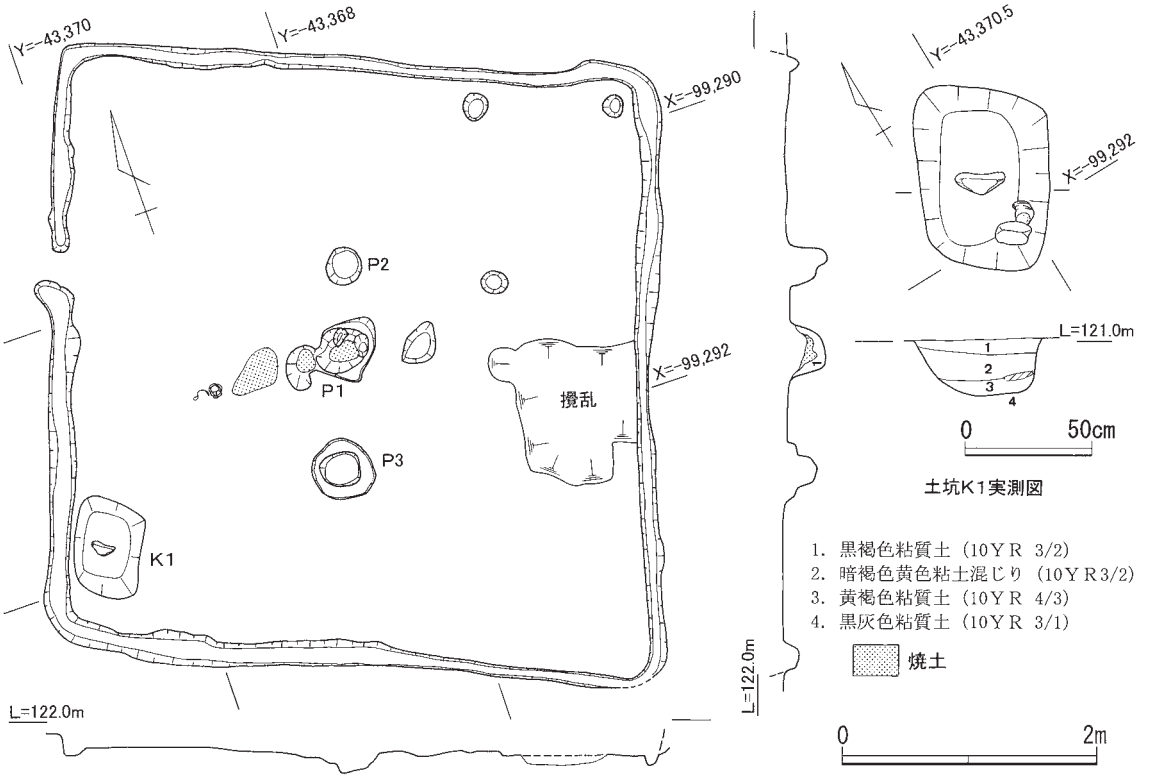
**土坑群**（第５図）　調査地の全域にわたって大小の土坑を検出した。主な土坑としては以下のものがある。土坑ＳＫ5104・5109・5127・5135・5139・5143・5154・5158・5159・5171・5173・5179・5189。

**土坑Ｋ5109**　東西約4.5m、南北約3.2mを測る大形土坑である。瓦器椀の出土から平安時代末～鎌倉時代前半と考えられる。

**土坑ＳＫ5135・5139**　平面が不整な方形を呈する。埋土から須恵器杯（第16図３・４）が出土しており竪穴式住居跡の一部である可能性がある。

**土坑ＳＫ5104・5143・5173**（第７図）　円形ないし隅丸方形を呈する土坑である。土坑ＳＫ5104は円形で径１m、深さ0.5m、土坑ＳＫ5143は長楕円形で長軸0.95m、短軸0.55m、深さ0.37m、土坑ＳＫ5173は不整な方形で長軸0.75m、短軸0.7m、深さ0.65mを測る。これらの土坑の底部には径15～20㎝、深さ10～30㎝の小穴が穿たれており、形状は縄文時代にみられる落とし穴（陥穴状遺構）に類似する。いずれの土坑内からも遺物は出土しておらず、所属時期は不明である。南丹市域の日吉町天若遺跡[注4]からは、縄文時代後期前半頃の陥穴状遺構が多数検出されており、これらの土坑についても陥穴状遺構になる可能性が高いものと思われる。

**集石遺構ＳＸ5158**　竪穴式住居跡ＳＨ5177の住居跡北東部に重なる状況で検出した遺構であ

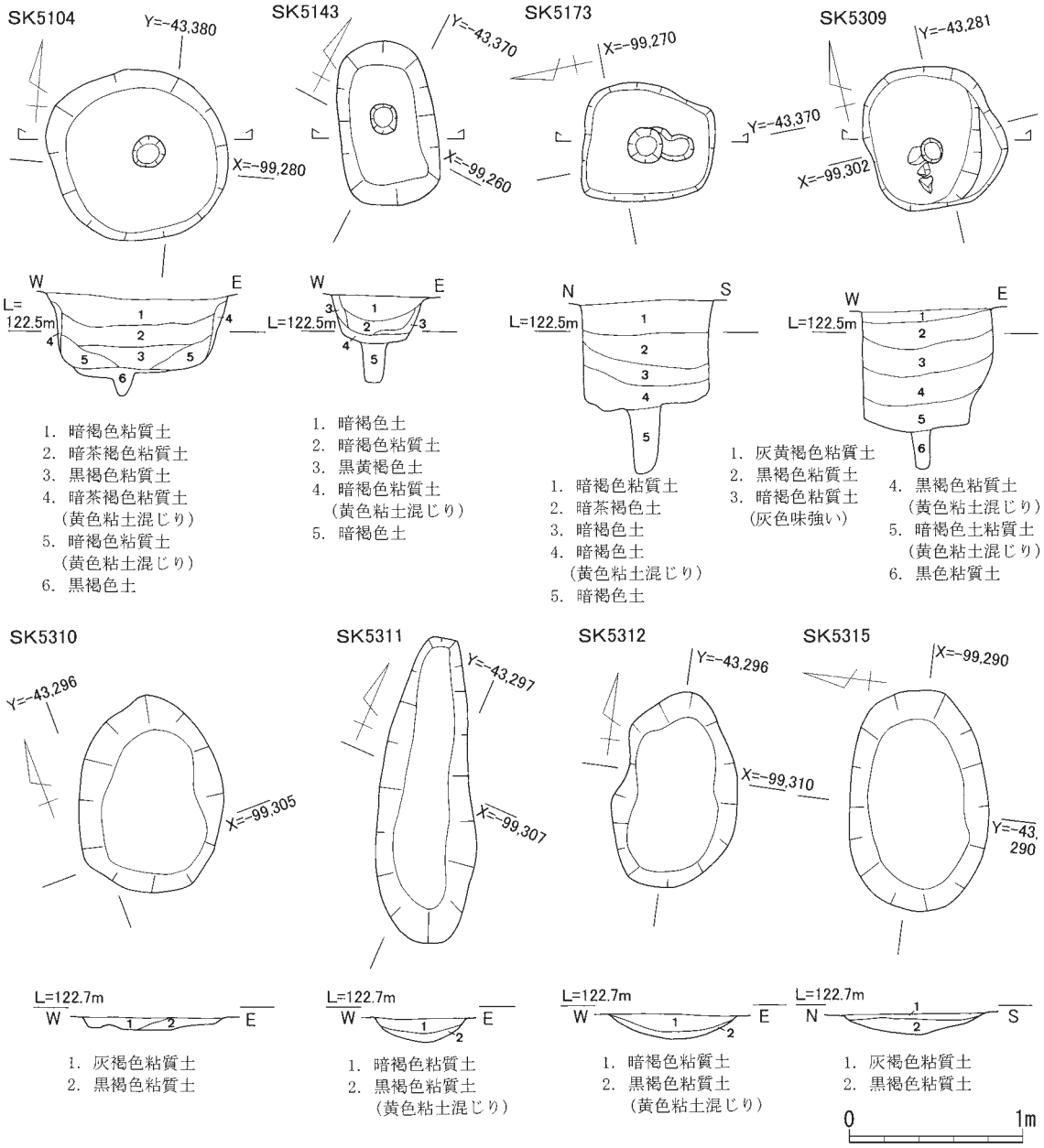



第６図　１区竪穴式住居跡ＳＨ5177実測図

る。径2.5m程の範囲を浅く掘り窪めその中に20～30cm大の石を寄せ集めたもので、石材に混じって瓦器や瓦質土器(第16図27)の破片が出土した。

2) ２区(第13図)　今回の調査対象地では北側部分に位置する。調査前から周囲の水田面より一段高くなっており、当初の地形が削り取られずに残されたものと考え遺構の検出を期待した。調査結果は、１区の北側と同様な粘土採掘に伴うと考えられる土坑や柱穴状のピット群・風倒木痕が検出された。柱穴状のピット群は建物跡としてはまとまらなかった。

3) ３区(第８図) １・２区とは遺跡内を通る道路を挟んで南側に設けた調査区でトレンチの形状は略三角形を呈する。主な検出遺構としては、半地下式掘立柱建物跡２棟･掘立柱建物跡３棟･土坑群・溝・風倒木痕がある。このほか調査地全体から柱穴状のピットを検出したが建物としてはまとまらなかった。




第７図　１区・３区土坑実測図

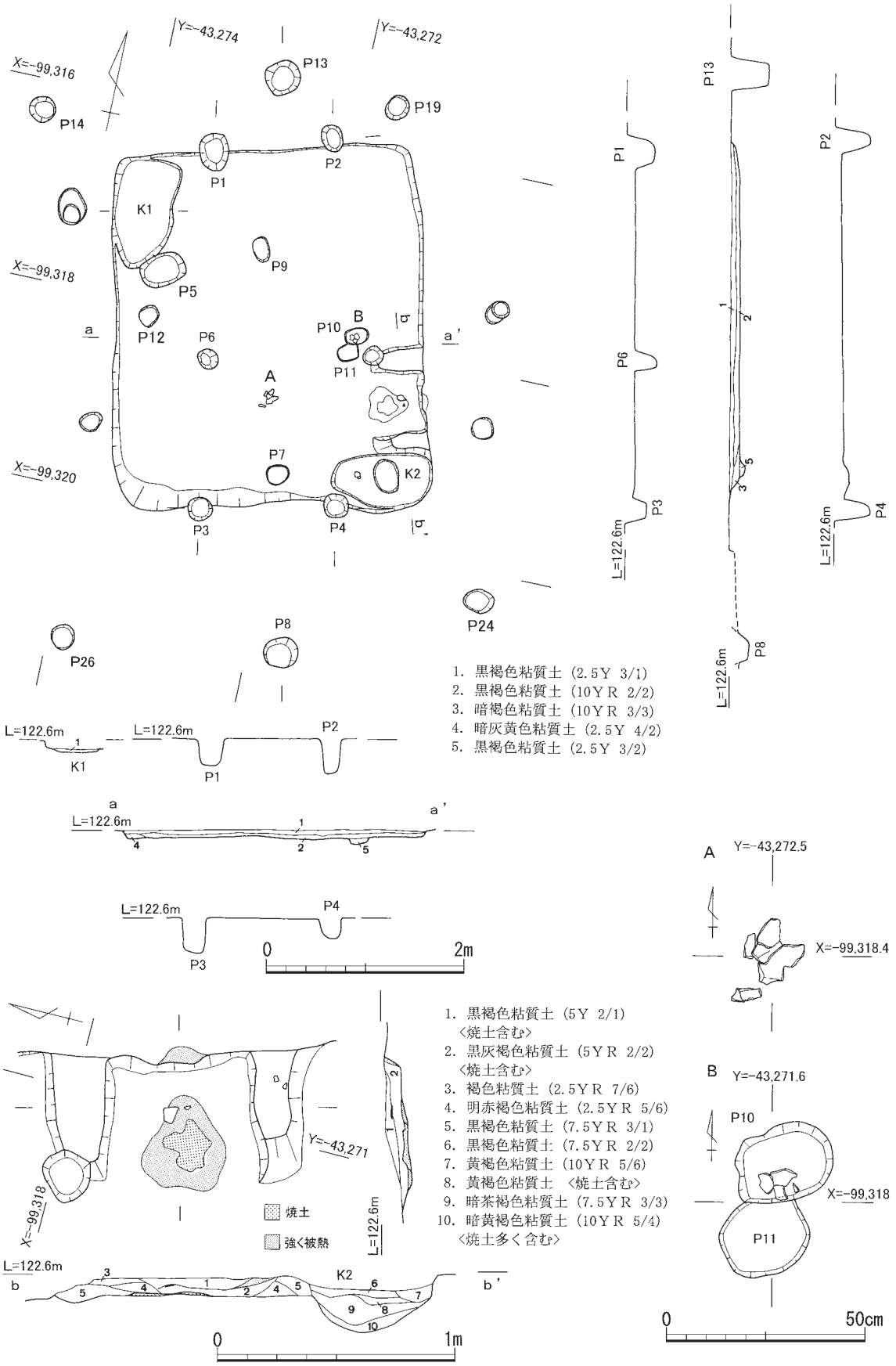
Y=-43,310
Y=-43,300
Y=-43,290
Y=-43,280
Y=-43,270
X=-99,300
X=-99,310
X=-99,320
X=-99,330
SD5301
SK5310
SK5315
SK5316
SK5311
SK5312
SB5303-a
SK5314
SB5303-c
SB5303-b
SP5321
SK5309
SK5313
SK5304
SB5307
SB5305
SB5308
SB5302
南丹市教委試掘坑
SK5306
0
10m

第８図　３区遺構配置図

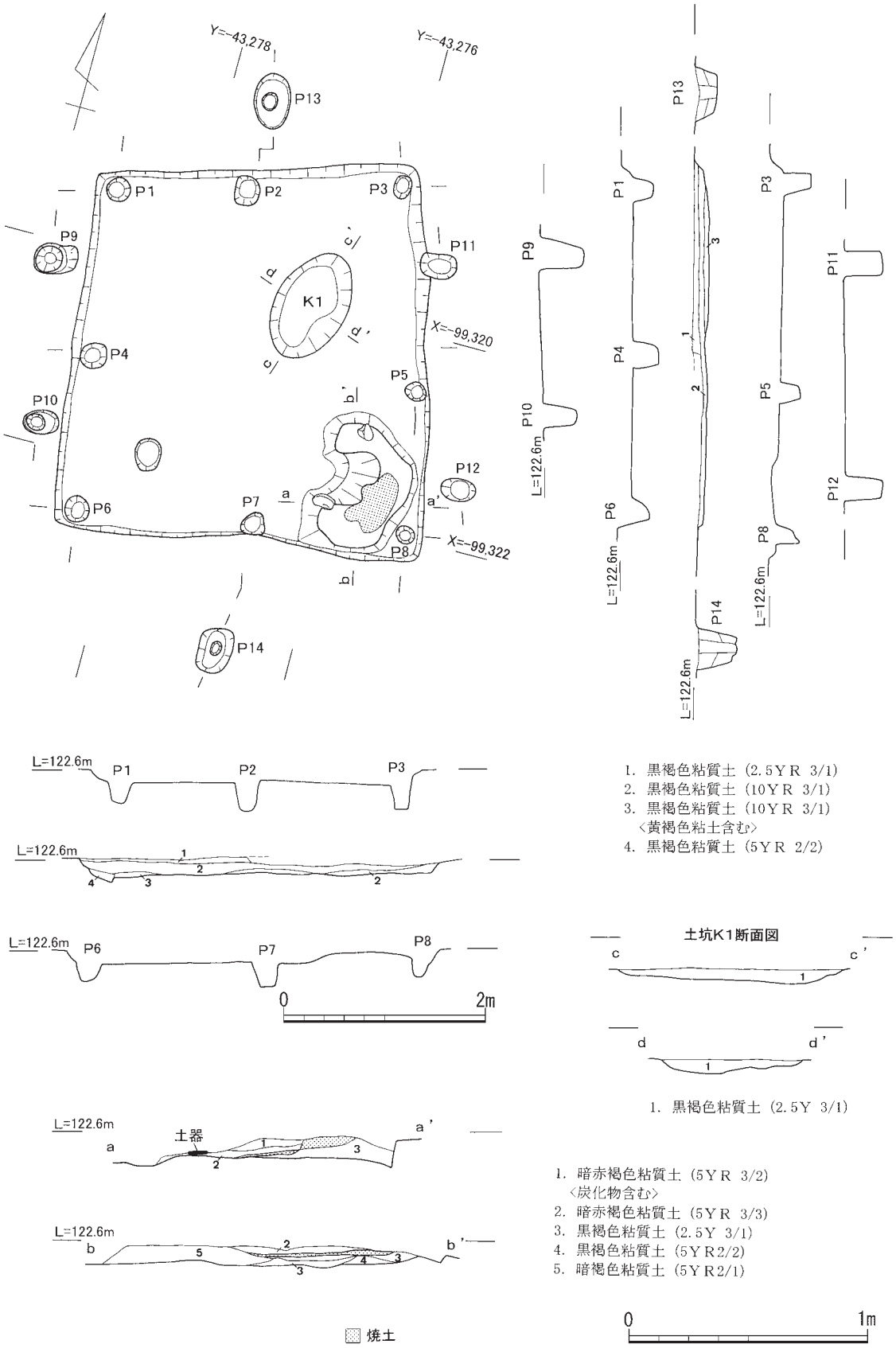
**建物跡ＳＢ5302**（第９図）　調査地の南東で検出した建物跡で、建物跡ＳＢ5305と近接する。長辺（南北）3.5m、短辺（東西）３m、深さ約0.1mの長方形の竪穴状掘り込みを主体にして、竪穴の北側周壁縁に沿ってＰ１・Ｐ２、南壁縁に沿ってＰ３・Ｐ４の４基の柱穴が南北中軸線を挟んで対峙するように位置する。竪穴状掘り込みの主軸は、Ｎ３°Ｗを示す。各柱穴の柱間はＰ１－Ｐ２が約1.2m、Ｐ３－Ｐ４が約1.4mを測る。各柱穴の平均径は20cmで深さは20～30cm前後を測る。北側の２柱穴の平面形は楕円形を呈する。この４本の柱穴が建物上屋を支える主柱穴と考えられ、建物跡外周の長軸中央線上に位置するＰ８・Ｐ13は、棟を支える棟持柱の役割を果たすものと考えられる。竪穴外周部に位置するＰ14・Ｐ19・Ｐ24・Ｐ26等の柱穴も建物の軒を外縁部から支える補助柱の機能をもつものと考えられる。竪穴の南東隅付近に長さ0.6m、幅約１mの馬蹄形の造り付け竈を付設する。上面が削平を受けており、竈が竪穴部の外側まで広がるか否かは不明確である。竈は中央部が強く焼けており、この部分が燃焼部にあたる。竈に接して土坑Ｋ２、対角線上の北西角に土坑Ｋ１がある。２基の土坑はいずれも平面長楕円形で底部は舟底状を呈している。竈周辺および床面から奈良時代に属する土師器甕の体部片が出土しており、建物の所属時期を示すものと考えられる。本建物跡のような平面形態に類似する建物跡は、新庄遺跡の南側に位置する室橋遺跡第５次調査で検出されている（建物跡ＳＢ220）[注5]。第５次調査では土間をもつ半地下式の掘立柱建物跡として復原されており、内部から出土した多数の土錘や粘土塊から、これらの製作に係わる工房跡と想定されている。建物跡ＳＢ5302では土器製作に関する遺物は認められず工房としての使用は不明であるが、時期の一致や遺構検出状況の類似点から、ここでは半地下式の掘立柱建物跡と考えておきたい。

**建物跡ＳＢ5305**（第10図）　建物跡ＳＢ5302と２mの間隔を置いて西側で検出された建物跡である。建物跡ＳＢ5302と同じく半地下式の掘立柱建物跡と考えられる。竪穴状の掘り込みは、長辺3.6m、短辺3.5mの方形で深さ0.15mを測る。床面はほぼ平坦である。主軸はＮ７°Ｗを示す。方形掘り込みの壁周辺に沿って各辺に３基、合計８基（Ｐ１～Ｐ８）の主柱穴を配置する。平均1.5mの柱間をもつが、Ｐ３－Ｐ５間では２mとやや間隔を開ける。柱径は20cm、深さ20～30cm前後を測る。柱穴の検出状況からみると、Ｐ２とＰ７を結ぶ線上の外側に位置するＰ13・Ｐ14は長楕円形を呈しており、深さ40cmと他の主柱穴よりも規模が大きい。これらの柱穴は前述の建物跡ＳＢ5302で想定した主屋の棟を支える柱と考えたい。このほか東西辺の掘り込み外周部には、西側にＰ９－Ｐ10、東側にＰ11－Ｐ12の相対する柱穴がみられ、これらも主屋の軒を支える補助的な柱になるものと考えられる。建物跡の南東角に、造り付け竈と思われる黄褐色粘土塊と焼土が広がる。上方が削平されており遺存状態は悪いが、熱を受けた焼土の広がりからみて焚き口を西側にもつものと推定される。このほか、床面の北東側には長軸1.1m、短軸0.74mで浅い船底状を呈する土坑Ｋ１がある。出土遺物については細片のみで明確でないが建物跡ＳＢ5302と同時期と考えられる。ただし両建物跡は近接しており、併存して建てられていたとは考えにくい。

**掘立柱建物跡ＳＢ5303**（第11・17図）　３区中央東寄りで検出した掘立柱建物跡である。東西２間（4.4m）×南北２間（5.2m）の規模をもつ総柱建物跡（ＳＢ5303－ａ）を中心建物として、庇ま




第９図　３区建物跡ＳＢ5302実測図

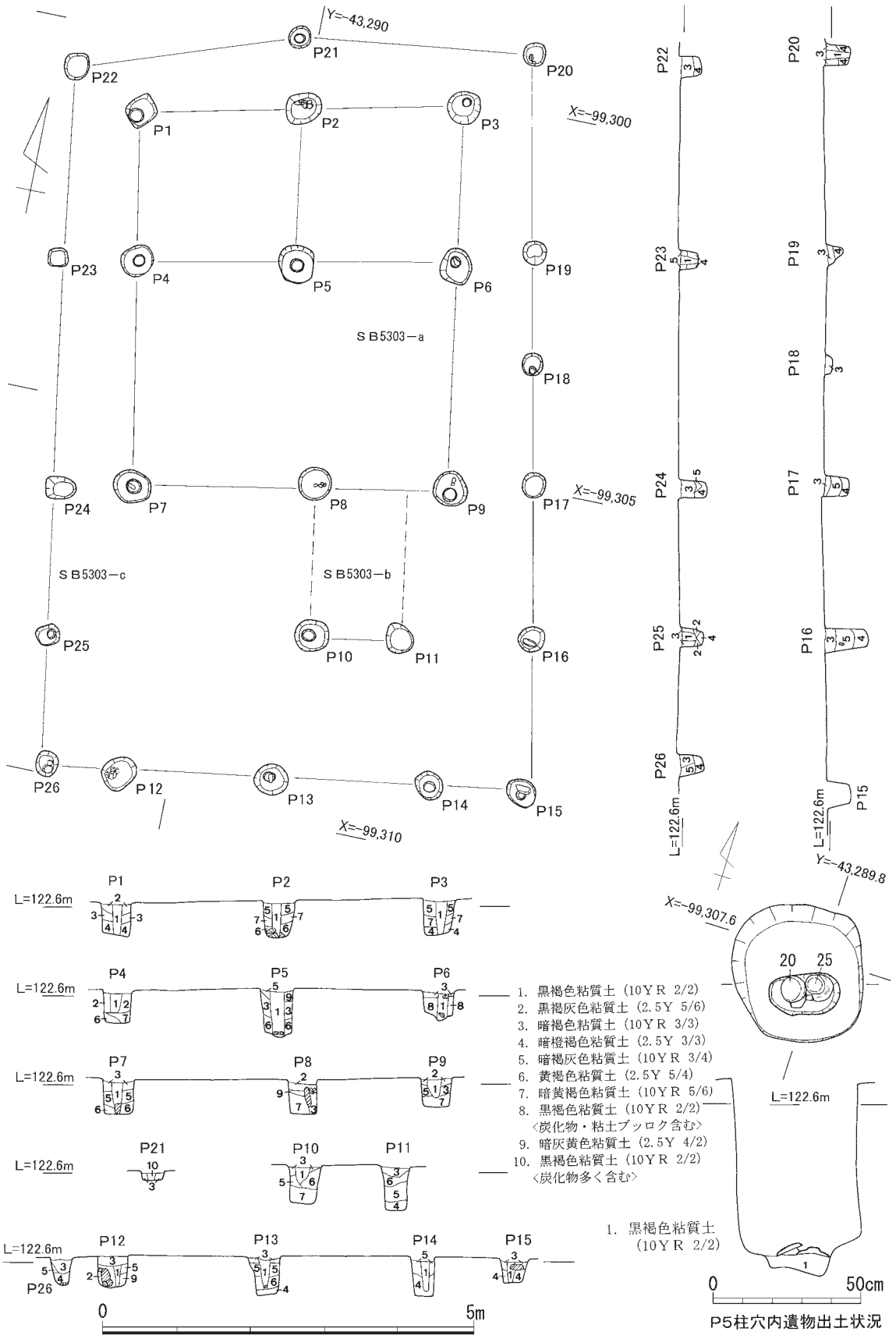



第10図　３区建物跡ＳＢ5305実測図

たは階段状の付属施設（ＳＢ（A）5303－ｂ）と中心建物の廻りを取り囲む塀または柵列（ＳＢ5303－ｃ）によって構成される。ＳＢ5303－ａの主軸方向はＮ10°Ｗを示す。柱掘形は、不整な円形を呈し、径約40cm、深さ50cm前後を測る。柱痕跡を残すものでは柱穴の径約20cm前後を測る。柱穴の検出状況からは建て替え等の痕跡は認められなかったが、耕作土直下からの検出状態から考えて、ある程度削平を受けているものとみられる。本建物跡の周辺や柱穴掘形の埋土上面では鉄分を含む薄い土層の堆積がみられた。主体となる建物跡ＳＢ5303－ａを構成する各９か所の柱穴は、北西角をＰ１としそれぞれ南東角までＰ９の番号で呼称する。各柱穴の間隔は、北側柱列（Ｐ１－Ｐ３）と中央柱列（Ｐ４－Ｐ６）では平均2.2mを測るが、南側柱列では2.4m（Ｐ７－Ｐ８）と1.8m（Ｐ８－Ｐ９）となりやや不揃いである。南北方向の柱列の間隔は各2.1m（Ｐ１－Ｐ４とＰ３－Ｐ６）と各2.9m（Ｐ４－Ｐ７とＰ６－Ｐ９）で、南側一間分の柱間隔が長くなる特徴を示す。南側柱列の間隔が揃わないことから、中心柱Ｐ５を通る中心建物跡ＳＢ5303－ａの南北中央線の柱筋上では、北側柱Ｐ２と中心柱Ｐ５を結ぶ柱筋上に南側柱Ｐ８が通らないという状況を示す。各柱穴掘形内には礫石を埋納するものがみられる。これらの礫石は検出状況からみて柱の根石とみるより柱埋設時の根固めに伴うものと考えられる。中心柱Ｐ５は深さ50cmを測り他の柱穴に比べ深く掘られている。掘形内には径20cm前後の柱痕跡がみられ、埋土は炭化物が多く混じる。底部には東西方向に長い25cm×15cm、深さ５cmの楕円形の窪み（小穴）が掘られており、内部から青磁椀片２点と土師器皿３点が出土した（第11図、第16図19・20・25）。青磁椀片は底部を上に向け、土師器皿に重ねる状況で置かれていた。小穴内は黒色粘土が充填していたが土器類以外に遺物は出土していない。建物の中心柱としての位置からみて、これらの遺物は建物建築時の地鎮に関係するものと考えられる。

建物跡ＳＢ5303－ａの南側には1.2mの間隔を置いてＰ10とＰ11の２基の柱穴が分布する。柱穴Ｐ10は建物跡ＳＢ5303－ａ南側柱列のＰ８から２m南側に離れて位置する。柱穴の形状や規模は建物跡ＳＢ5303－ａの柱穴群と類似する。この２基の柱穴は位置関係からみて階段あるいは建物から延びる庇の端を支える柱と想定したい。この復原案に従えば柱穴Ｐ８とＰ９の間が出入り口になるものと考えられる。

建物跡ＳＢ5303－ａの周囲には、これを取り囲んで合計15基（Ｐ12～Ｐ26）の柱穴が分布しており、柱の配置から建物跡ＳＢ5303－ａの周囲を区画する塀もしくは柵と考えられる（ＳＢ（A）5303－ｃ）。各辺の柱間および規模は、北側柱列（Ｐ20－Ｐ22）で３間（6.3m）、西側柱列（Ｐ22－Ｐ26）で４間（9.5m）、東側柱列（Ｐ15－Ｐ20）は４間ないし５間（9.8m）、南側柱列（Ｐ15－Ｐ26）で４間（6.4m）ある。それぞれの柱間は、建物跡ＳＢ5303－ａに面する東西側列と北側列で2.7～3.1m（Ｐ17－Ｐ18は1.6m、Ｐ18－Ｐ19は1.5m）、それより南側の東西側列では1.8～2.1mを測り、柱間間隔はやや不揃いである。各柱穴の大きさは、南側列柱穴Ｐ12・Ｐ13・Ｐ14を除き径30cm、深さ40cm前後と建物跡ＳＢ5303－ａの柱穴に比べ少し小ぶりである。Ｐ12・Ｐ13・Ｐ14間はそれぞれ2.1m・2.1mを測り、西端のＰ26とＰ12の柱間１m、東端のＰ14とＰ15の柱間1.2mと比べ広い間隔を開ける。この３基の柱穴は建物全体の正面と推測する南辺に位置することや、柱穴の規




第11図　３区掘立柱建物跡ＳＢ5303実測図

模が大きいことなどから塀・柵列に設けられた門に伴う柱と想定される。東側列のＰ18は掘形が浅く他の柱穴群と同一視できないが、柱間の真ん中に位置することから補助柱としての役割をもつものであろう。また、北側柱列中央の柱穴Ｐ21は、北西角柱穴Ｐ22と北東角柱穴Ｐ20を結ぶ線から14cm程北側（外側）に突出した位置にある。北辺の柱穴列を柵・塀とみる復原案の他に、建物跡ＳＢ5303－ａの東西・北辺の縁側柱あるいは建物中軸線を通ることから棟持柱とも考えられるが、ここでは、建物跡ＳＢ5303－ａから分離して柵ないし塀の柱列と考えておきたい。柱穴Ｐ20の掘形埋土から奈良時代の須恵器杯底部片が出土しているが混入と思われる。以上、復原案を交えながら建物の概要を述べてきた。本建物跡の周囲には他に建物跡の遺構はみられず、単独で建てられていたものと考えられる。

建物跡ＳＢ5303－ａについては柱間隔が不揃いであり上部構造については不明な部分が多いが、２間四方のやや縦長の方形プランを持つ切妻屋根の高床式建物が想定される。南側妻の中央からやや東側に偏った位置に階段ないし庇を付設し、高床式建物の周囲には塀か柵をめぐらせていたものとみられる。建物の築造時期は、中心柱Ｐ５の柱穴底部から出土した地鎮に係る遺物の年代から鎌倉時代後半（13世紀末～14世紀初頭）に比定できる。建物全体の復原案からは出雲大社に代表される大社造りに類似する姿が浮かぶ。すなわち本建物の性格については、一般の住居とみるより、神社等の祭祀に係る建築物の可能性が高いものと思われる。(注6)

**掘立柱建物跡ＳＢ5307**（第８図）　調査区東側で検出した東西２間（4.3m）×南北２間（５m）の掘立柱建物跡である。建物の主軸はＮ15°Ｗを示す。各柱穴の柱間隔は、約1.8～2.5mを測る。柱穴は円形で径約20cm、深さ約20cmを測る。出土遺物がなく時期は不明である。

**掘立柱建物跡ＳＢ5308**（第８図）　掘立柱建物跡ＳＢ5307の東側に接して検出した建物跡で、南北３間（7.2m）、東西２間以上の規模をもつ。建物の主軸はＮ７°Ｗを示す。建物の東側は調査地外になる。柱穴は円形で径約30cm、深さ20cm前後を測る。掘立柱建物跡ＳＢ5307と近接しており、２棟の建物の時期は異なるものと思われるが先後関係は不明である。また、本建物跡は掘立柱建物跡ＳＢ5303と建物方位が近似するが、出土遺物がなく時期については不明である。

**土坑群**（第７・８図）　調査地中央部から北側にかけて９基の土坑を検出した（ＳＫ5304・5309～5316）。

**土坑ＳＫ5304**　短軸2.8m、長軸4.5m以上の不整形土坑で北端部に径10cmの円形ピットを２か所にもつ。青磁椀の小片が出土した。

**土坑ＳＫ5309～5316**　長さ２～0.8m、幅0.6～0.5mを測る長楕円形ないし円形の土坑である。底はいずれも船底状を呈する。出土遺物に乏しく時期は不明である。土坑ＳＫ5309は径0.85mの不整な円形で深さ70cmを測る。内部からは10cm大の石材が出土した。土坑の底部中央部に径10cm、深さ20cmの小穴を穿つ。出土遺物がなく時期は不明であるが、１区から検出された陥穴状遺構に類似する。

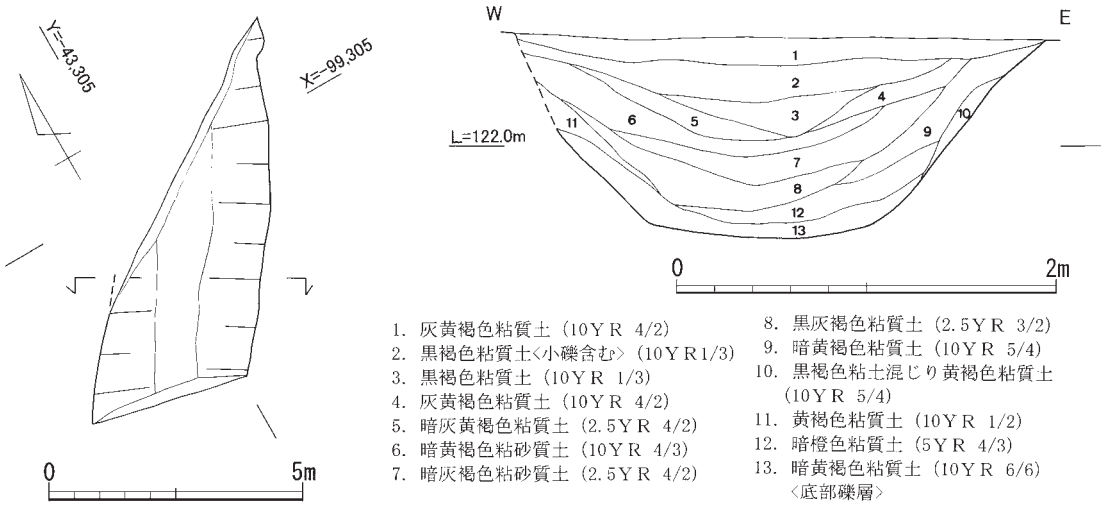
**土坑ＳＫ5306**　前述の土坑群から離れて調査地南東端で検出した。長軸約1.5m、短軸最大0.5mを測り平面形は不整である。内部は２段に掘られている。内部から焼土と炭化物が出土したが、

出土遺物がなく時期・性格等は不明である。

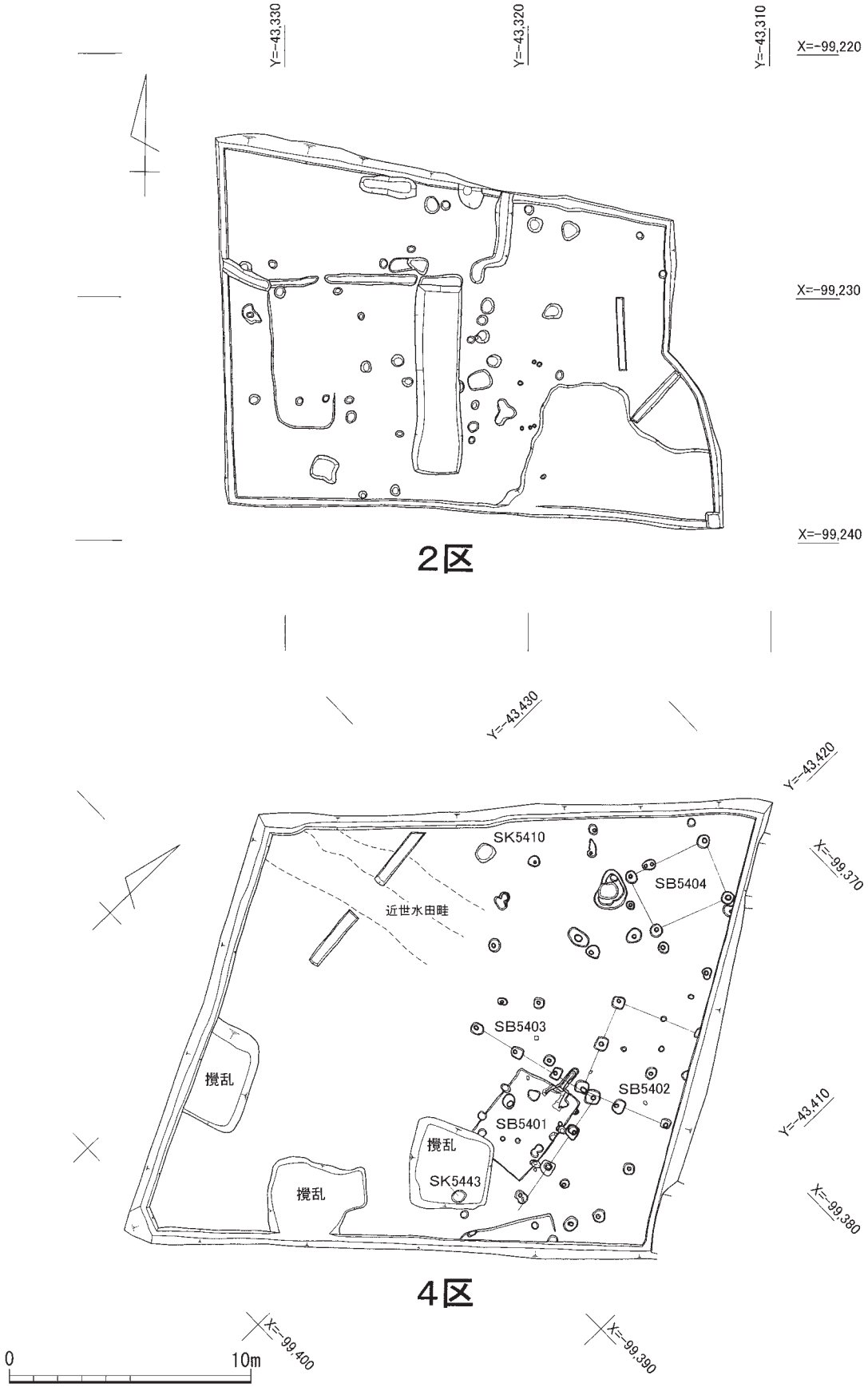
**溝ＳＤ5301**（第８・12図）　調査地西端で検出した溝で、北東から南西方向に延びる。規模は、幅３ｍ、深さ約1.1ｍを測る。溝断面は底が平坦な台形状を呈し、溝底部は砂礫層まで掘削する。溝内の堆積層の状況から上層（１～３層）とそれ以下の層に大きく分けられる。明瞭な砂や砂礫層は認められず、下層堆積層の形成後浅い溝として残存し、その後徐々に埋没したものと考えられる。溝内からは遺物が出土しておらず時期は不明である。

**4）４区**（第13図）　調査対象地の南西側に設置した調査区である。主要な検出遺構としては竪穴式住居跡１基・掘立柱建物跡３棟・土坑２基等がある。当調査地区は、南西側に向かって地形が下がり、また、近現代の置土や掘削によって西側半分は大きく撹乱を受けており、検出遺構の大部分は調査地中央部から東側に分布する。

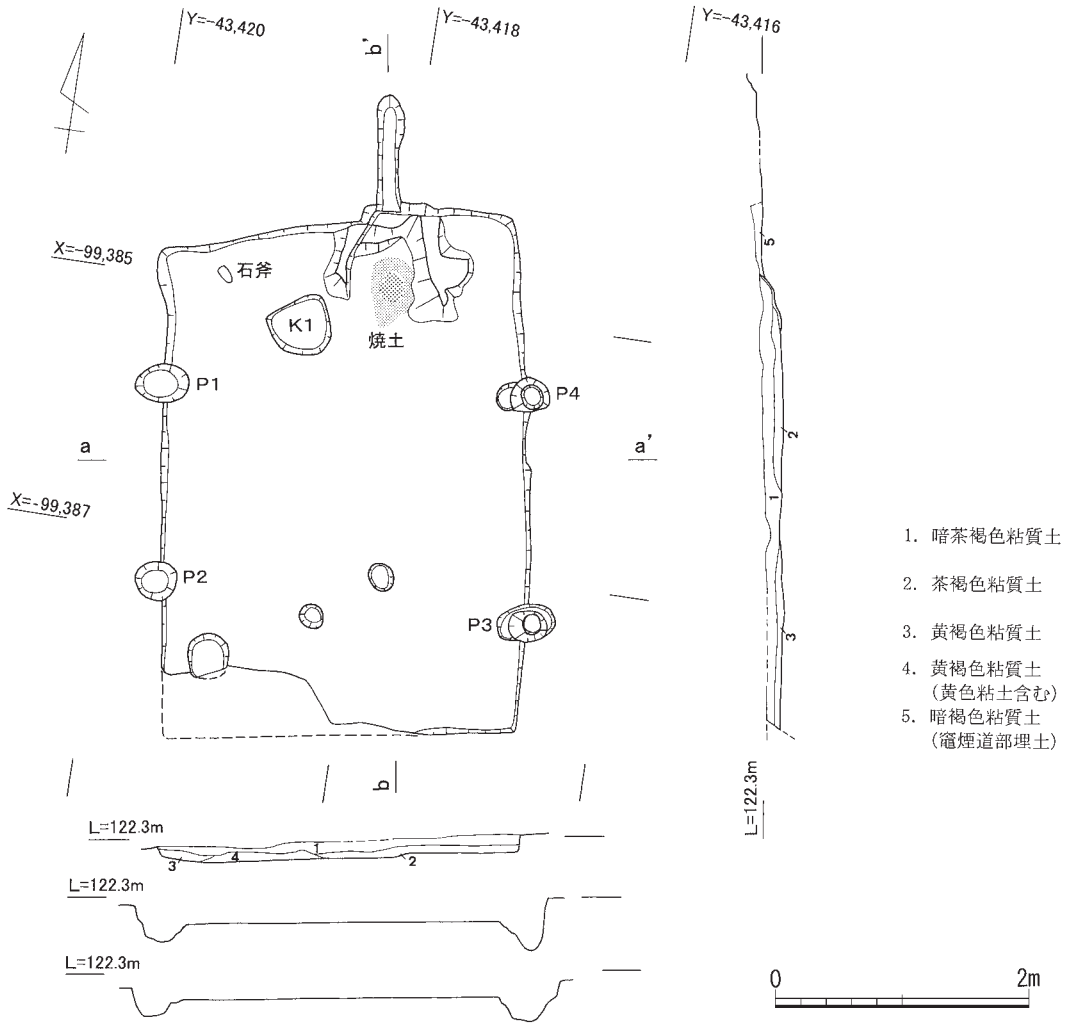
**竪穴式住居跡ＳＨ5401**（第14図）　調査区南東側で検出した。南西隅を欠くが、住居の規模は、東西約３ｍ、南北約４ｍで平面は長方形を呈する。残存部の深さは0.15ｍを測る。住居の主軸は、Ｎ７°Ｗである。住居に伴う柱穴は、床面では確認されず、住居の東西辺の壁に接して柱穴と思われるＰ１～Ｐ４が検出された。各柱穴の径は約30～40㎝、深さ20㎝を測る。柱穴は住居跡の内側と外側にまたがっており、Ｐ１とＰ４では長楕円形を呈する。柱間間隔はそれぞれＰ１－Ｐ２間が1.6ｍ、Ｐ３－Ｐ４間が1.9ｍを測る。住居跡北側辺の中央やや東寄りに平面馬蹄形を呈する造り付け竈を付設する。竈の規模は幅1.2ｍ、長さ0.9ｍを測る。竈は小礫を混じえた黄色粘土で構築されており、焚口付近は強く火を受け硬く焼けしまっている。竈の上部が崩れた時に堆積した焼土と灰を含む埋土の中から土師器片が出土した。竈北端から住居跡の外側に向かって灰と焼土が混じる煙道状の遺構が約１ｍにわたって延びるが、上面が削平されており詳細は不明である。竈の南西側には土坑Ｋ１がある。貯蔵穴としては底部が船底状で浅いものである。このほか住居に伴う貼床や周溝等の施設は認められなかった。住居内の遺物としては、竈北東側の住居跡上面部で出土した須恵器杯身（第16図5）と杯蓋（第16図2）がある。これらの須恵器は7世紀中葉から後



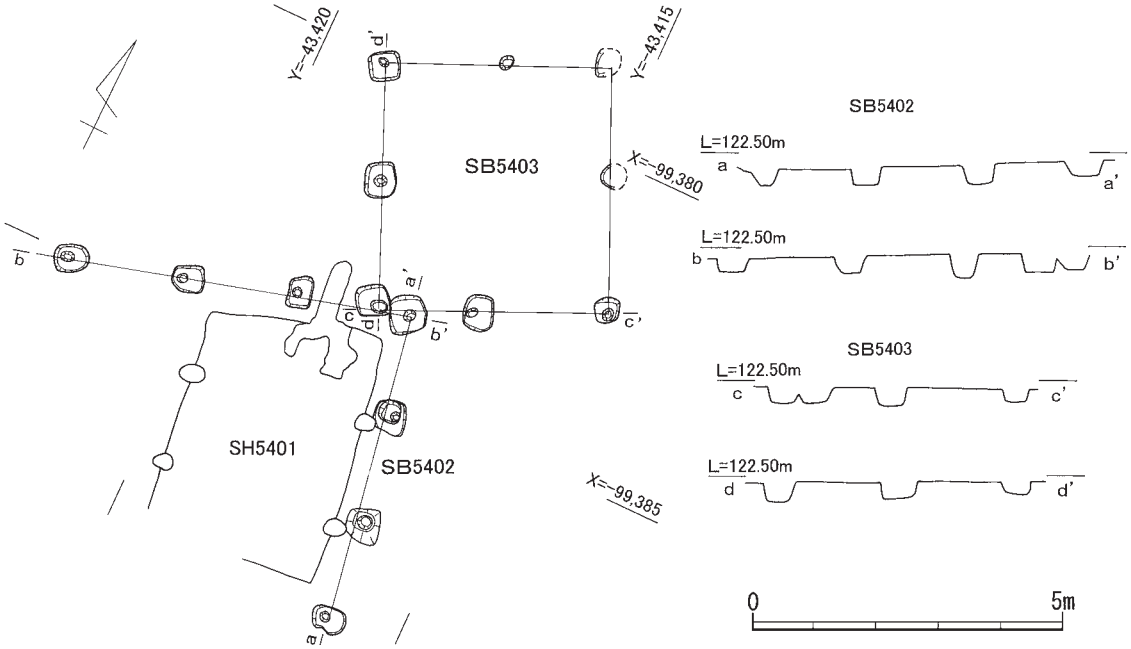

第12図　３区溝ＳＤ5301実測図




第13図　２区・４区遺構配置図




第14図　４区竪穴式住居跡ＳＨ5401実測図




第15図　４区掘立柱建物跡ＳＢ5402・5403実測図

半頃に属するもので、おおむね住居跡の所属時期の一端が窺える。このほか、住居跡北西角付近の床面上から、破損した弥生時代の太型蛤刃石斧が１点出土した。再利用するため住居内に持ち込んだものと考えられる。本住居跡は調査の結果、主柱穴の位置が通例の竪穴式住居跡と異なった位置に配置されていることが判明した。実際の検出作業においては、住居跡は黒色粘土層から掘り込まれており、住居内の埋土と見分けが付きにくく輪郭の確認は容易でなかったが、ここでは調査結果を踏まえ以上の通り報告しておきたい。今回調査地の３区や室橋遺跡では、奈良時代の時期に土間をもつ半地下式の掘立柱建物跡が出現しており、これらと何らかの関連をもつものと考える。

**掘立柱建物跡ＳＢ5402**（第15図）　竪穴式住居跡ＳＨ5401に近接して検出されたＬ字形の掘立柱列である。東西３間分、南北３間分を確認したが掘立柱建物か柵になるかは不明である。ここでは掘立柱建物跡としておく。柱掘形は隅丸方形で一辺40㎝前後を測る。径10㎝前後の柱穴をもつものがある。各柱間は1.8m等間を測る。竪穴式住居跡ＳＨ5401の北辺・東辺を囲むように位置しており、これに関係する施設の可能性もあるが、住居跡の柱穴Ｐ４を本建物の柱掘形が切っており、本建物が後出するものであることがわかる。

**掘立柱建物跡ＳＢ5403**（第15図）　調査地の東側で検出した。南北２間（３ｍ）×東西２間（３ｍ）の方形建物に復原できるが、さらに東側の調査地外に延びる可能性がある。建物の主軸はＮ22°Ｗを示す。柱掘形は隅丸方形で一辺50㎝前後を測り、柱間はおおむねね1.8mを測る。本建物南西角の柱掘形が掘立柱建物跡ＳＢ5402の北東角の柱掘形によって切られており、時期の前後関係が窺える。柱掘形の形状から奈良～平安時代と想定される。

**掘立柱建物跡ＳＢ5404**　調査地の北東角で検出した。東西１間×南北１間分が復原できるが、周囲に同規模の柱穴が分布しておりさらに規模が大きくなる可能性がある。建物の主軸はＮ22°Ｅを示す。時期は不明である。

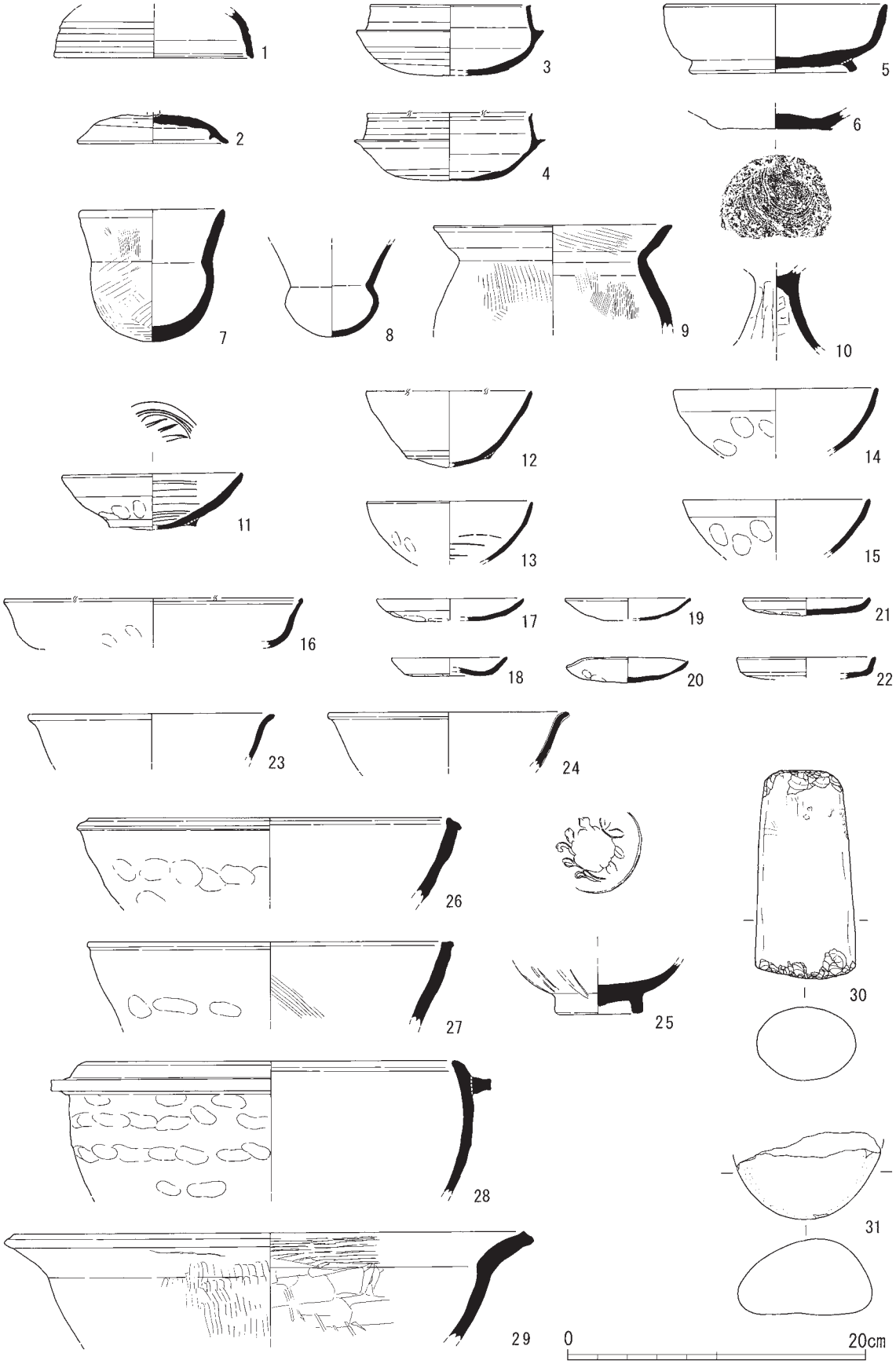
**土坑ＳＫ5410**　調査地中央北側で検出した。長軸0.87m、短軸0.8m、深さ0.2mの楕円形を呈する。時期、性格等は不明である。

**土坑ＳＫ5443**　調査地中央南側で検出した径0.6mを測る円形土坑である。最近の撹乱坑によって上面を削平されている。時期、性格等は不明である。

### ４．出土遺物（第16図）

今回の新庄遺跡で出土した遺物の総量は、整理箱で８箱である。総じて残りが悪く図化できたのは少量である。以下、各地区一括して、種類毎に述べる。

１～５は須恵器である。１は、杯蓋である。復原口径13.2㎝を測る。天井部は欠損する。口縁部に１条の凹線がめぐる。口縁部端部内面に沈線を施す。色調は明灰色を呈する。所属時期は６世紀後半である。２は内面端部近くにかえりをもつ杯蓋である。口径10㎝を測る。天井部の頂部に宝珠形のつまみを有するものであるが欠損する。色調は青灰色を呈する。口径がやや縮小し、時期は７世紀中頃に属する。３・４は杯身である。蓋受部からやや内傾する深いたちあがりをも




第16図　出土遺物実測図

つ。端部は段をつくる。底部はヘラケズリ後、ナデによる調整を行う。３は口径10.7cm、高さ4.8cm、４は口径10.4cm、高さ4.6cmを測る。色調は青灰色を呈する。時期は６世紀前半に属するものである。５は高台を伴う杯身である。口縁部は底部からゆるやかに外反する。高台の貼付け位置は底部のやや中央寄りにある。口径15.2cm。高さ4.7cmを測る。７世紀末から8世紀初頭に属するものと思われる。１は４区溝ＳＤ5405、２・５は４区竪穴式住居跡ＳＨ5401、３は１区土坑ＳＫ5139、４は１区土坑ＳＫ5135から出土した。６は糸切り痕を残す須恵質土器の底部である。色調は青灰色をする。時期の詳細は不明であるが、平安時代に属する在地産のものと思われる。１区の出土である。

７～10は土師器である。７・８は小型丸底壺である。体部から直線的にのびる口縁部をもつ。７の口縁端部はナデて丸く仕上げる。体部外面は粗いハケ目、口縁部は縦方向のハケ目を施す。口径9.5cm、高さ8.8cmを測る。色調は暗黒褐色を呈する。８は表面の磨滅が著しく調整不明である。体部の最大径は6.3cmを測る。所属時期は古墳時代前期（４世紀前半）に属するが、口縁部の広がりは小さく器壁も厚いことから、やや新しい段階に編年されるものである。７は１区竪穴式住居跡ＳＨ5177、８は同住居跡に伴う土坑Ｋ１から出土した。９は甕体部上半から口縁部片である。口縁部外面はナデ調整する。肩部外面と口縁部内面は粗いハケ目を施す。色調は明茶褐色である。復原口径は15.8cmを測る。10は高杯脚部で、杯受部を欠失する。脚部外面は縦方向のヘラケズリを施す。色調は明茶褐色を呈する。残存高は5.5cmを測る。時期は古墳時代前期に属する。９は１区土坑ＳＫ5135。10は１区土坑ＳＫ5177から出土した。

11～15は瓦器椀である。口径11.1～13.6cmを測る。口縁部は体部から内湾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げる。11・12の底部の高台は三角形状で突出が小さく不安定である。体部外面に指オサエの痕がみられるものもある（11・14・15）。11は内側見込みにジグザグ状の暗文をもつ。色調は、12は磨滅が著しく灰白色を呈するが、他は黒灰色である。所属時期は、いずれも13世紀後半に含まれるものである。11は１区土坑ＳＫ5127、12・13は１区土坑ＳＫ5109、14は1区土坑ＳＫ5126、15は1区土坑ＳＫ5154から出土した。

16～22は土師器皿である。16は底部から口縁部が外反気味に外上方に立ち上がるもので、口縁端部はナデて丸く仕上げる。内外面ともにていねいなヨコナデを施す。復原口径は20cmを測る。色調は淡橙褐色を呈する。形態からみて時期は奈良時代に属する。17～22は中世の小皿類である。法量は復原口径7.8cm（18）～9.8cm（17）、高さ1.2～1.7cmを測る。形態は、底部から口縁部が緩やかに外上方のびるもの（17～20）と、底部端からやや屈曲して短く立ち上がるもの（21・22）がある。前者のうち19・20は器壁が薄い。いずれも底部は指オサエ、内面と口縁部外面は横ナデを施す。色調は17が明白褐色、18～20は淡橙褐色、21・22は明褐色を呈する。所属時期は13世紀後半に比定される。16は３区建物跡ＳＢ5302、17・21は1区土坑ＳＫ5159、18は１区土坑ＳＫ5109、19・20は３区掘立柱建物跡ＳＢ5303柱穴Ｐ５、22は３区柱穴ＳＰ5321から出土した。

23～25は中国製青磁椀である。23・24は口縁部の破片で、口縁端部はやや外反気味に屈曲させる。復原口径は14～15cm前後を測る。25は底部片である。厚い底部に断面方形の高台を貼り付け

る。内面見込み部には花文状の陰刻文、体部外面には蓮弁文を施す。底部は露胎である。色調は23・24が薄緑灰色、25は緑色を呈する。所属時期は、23・24がおおむね14世紀、25は13世紀後半～14世紀初頭である。なお、23は３区掘立柱建物跡ＳＢ5303柱穴Ｐ７とＰ16から出土した破片の接合資料である。25は同掘立柱建物跡ＳＢ5303柱穴Ｐ５からの出土で、底部破片に接して別に口縁下半部の破片(25－ｂ)が出土した。同型式のものであるが両者は別個体で接合しなかった。上記の土師器皿(19・20)とともに柱穴底部埋納の一括資料である。

26～28は瓦質土器である。26・27は鉢類の口縁部で、口縁端部に強いナデを施し面を成す。体部外面はユビオサエ、27の内面はハケ目を施す。26は復原口径24.2cm、27は同24.4cmを測る。色調は黒灰色である。28は口縁端部からやや下がった位置に断面台形状の短い顎部をもつ羽釜である。復原口径25.5cmを測る。口縁端部はやや内傾する。口縁端部と顎部はユビナデ、体部外面はユビオサエを施す。色調は黒灰色を呈する。いずれも所属時期は13世紀に比定されるものである。26は１区土坑ＳＫ5158、27・28は１区土坑ＳＫ5179から出土した。

29は軟質の土師器鍋と思われるものである。口径は34cm前後に復原される。体部から口縁部が外上方にのび、端部に面をもつ。体部外面は縦方向の太いハケ目、口縁部内面には横方向のハケ目が施されている。色調は明褐色を呈し、体部外面には煤が付着する。上記の瓦質土器類と同じく13世紀に属するもので、３区から出土した。

30は弥生時代の太型蛤刃石斧の基部である。砂岩製で頭頂部と刃部破損部周辺に打痕が残り再利用したものと思われる。残存部の重量840ｇ。４区竪穴式住居跡ＳＢ5401床面から出土したもので、ハンマー等に転用するために運ばれたものと考えられる。31は敲き石の破損品である。残存部の重量350ｇ。砂岩製で弥生時代のものと思われるが、出土した４区では同時期の遺構は確認されておらず運ばれてきた可能性が高い。

## ５．まとめ

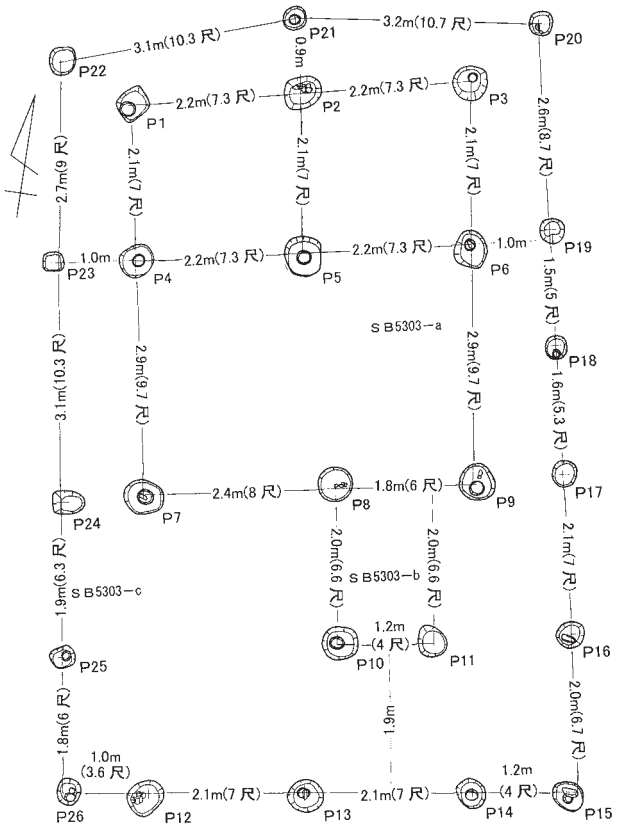
今回の新庄遺跡の調査では、後世の水田耕作等により削平を受け遺構の遺存状況は必ずしも良好ではなかったが、４か所の調査区から古墳時代～中世に所属する遺構・遺物等を検出した。主な検出遺構としては、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑等がある。このうち１区で検出した竪穴式住居跡ＳＨ5177は古墳時代前期に比定され、これまで新庄遺跡で確認された竪穴式住居跡のなかでは最も古い時期に属するものである。周辺の室橋遺跡などでは古墳時代中期の時期に造り付け竈を付設するものが出現するが、本住居跡は当地域の竈出現以前の竪穴式住居跡の変遷を知る上で新たな資料を加えることになった。

３区で検出した２基の建物跡ＳＢ5302・5305は、室橋遺跡第５次調査で検出された奈良時代に属する建物跡ＳＢ220と同様、主屋本体部分の床面を掘り窪め半地下式の土間とした掘立柱建物と考えられる。今回検出した２基の建物の柱位置はそれぞれ異なっているが、これらが時期的な変遷を示すものかどうかは明らかでない。室橋遺跡では、生産活動に伴う工房としての性格が考えられているが、建物内からは工房を窺わせるような遺物は出土しなかった。奈良時代に当遺跡

や周辺の室橋遺跡において、屋内に炉や竈を付設して火力を用いた工房建物が存在することは、同時期の生産活動の実態を知る上で、今後、注意すべき資料になるものと思われる。

同じく３区で検出した掘立柱建物跡ＳＢ5393については、上部構造については推測の域をでないが、高床式切妻建物で周囲を塀か柵で囲まれた姿を想定しておきたい。本体の建物が狭い空間に配置され、近接して他の建物がみられないことから、日常的な住居とするより集落から隔てて置かれた倉あるいは祭祀に係る建物の可能性が考えられる。今回検出した建物を構成する柱配置は、出雲大社に代表される神社建築である大社造りの形状にきわめて類似している点が注意される。建物の所属時期は、心柱にあたる柱穴Ｐ５から出土した地鎮に伴うものと想定される青磁椀片・土師器皿から13世紀末～14世紀初頭の鎌倉時代に比定できる。近年、古代に遡る神社建物跡の調査例が各地で報告されているが、中世以後の神社建築については建物自体が現存するものも多く考古学的な調査はあまり行われていないのが現状である。今回検出した掘立柱建物跡ＳＢ5393の周囲からは祭祀行為を窺わせる遺物は出土しておらず、神社遺構と断定するには内容不足の感があるが、今後の事例の増加を期待して現時点では上記のように神社跡の可能性を考えておきたい。

新庄遺跡を含む南丹市八木町北部域には、平安時代に「吉冨荘」と呼ばれる荘園が存在した。荘園内の様相は、承安４(1174)年に成立した後白河院法華寺領の吉冨荘の絵図の写しとされる「丹波国吉冨庄絵図写」によって一端を知ることができる。平安時代末期には後白河院から神護寺に寄進されるが、新庄遺跡周辺には神護寺を再興した文覚上人(1139～1203年)によって文治４(1188)年に作られたと伝える新庄用水が残る。このほか新庄遺跡南西の谷合には「文覚池」があり、また、付近には室橋の名の起こりとなった文覚堂(室橋堂)が存在する。これらは周辺に広く伝わる文覚伝承にすぎないが、近年の室橋遺跡や野条遺跡では府道建設やほ場整備に伴う発掘調査によって、古墳時代から平安時代にかけての灌漑用水と思われる大小の溝が多数検出されている。当地域は亀岡盆地を流れる桂川(大堰川)の上流部にあり、桂川から盆地内へ用水を引き込むに当たっては最も適した地点に位置している。おそらく荘園成立以前から当地域の開発に伴って幾つもの灌漑用水路が掘削されて来たものと思われる。今回、３区では大規模な溝の一角が検出された。溝の時



第17図　掘立柱建物跡ＳＢ5303柱間寸法

期については不明であるが、溝の掘削状況は周辺の遺跡でみられる溝群と類似しており、同様な性格をもつものと考えられる。

今回の調査によって新庄遺跡内の遺構の分布範囲や遺存状況が明らかになった。後世の水田耕作や土取りによる削平のため、必ずしも残存状態は良好ではないが、各時代の遺構が広範囲に分布することが判明した。周辺には弥生時代から中世にかけての遺跡が数多く存在しており、これらの遺跡との関係についても今後さらに詳しくみていく必要があろう。

（辻本和美）

注1　谷口悌「町内遺跡発掘調査概要－第１次新庄遺跡－」（『八木町文化財調査報告書』第5集　八木町教育委員会）　1999

谷口悌「町内遺跡発掘調査概要－第２次新庄遺跡－」（『八木町文化財調査報告書』第７集　八木町教育委員会）　2000

谷口悌「新庄遺跡発掘調査概要－第３次調査概要－」（『八木町文化財調査報告書』第８集　八木町教育委員会）　2001

辻健二郎「新庄遺跡第４次調査」（『南丹市内遺跡発掘調査報告書』平成19年度　南丹市教育委員会）　2008

注２　調査参加者は以下のとおりである（敬称略、順不同）

**作業員**　広瀬伊佐夫・杉山雅之・西垣久江・松本敏子・笠浪恒正・若井邦明・麻田忠晴・八木辰男・松本拓・三觜順子・平井美登里・木村末子・西田恵美子・矢木正代・麻田榮子・竹井美津子・小林義明・中川智子・関岡一・大場信行

**補助員**　天池佐栄子・廣瀬慶典・松元和也・野中洋志

**整理員**　寺尾貴美子・松下道子・長尾美恵子・井上聡・茶園矢壽子・清水友佳子

注3　『京都府の地名-日本歴史地名大系第26巻-』平凡社　1981

注4　三好博喜「天若遺跡」（『京都府遺跡調査報告書』第20冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1994

注5　高野陽子「野条遺跡第10･12次、室橋遺跡第５次発掘調査報告」（『京都府遺跡調査報告集』第128冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2008

注6　掘立柱建物跡ＳＢ5303の建物構造については、京都府教育庁指導部文化財保護課吉田理氏より有益なご教示を得た。

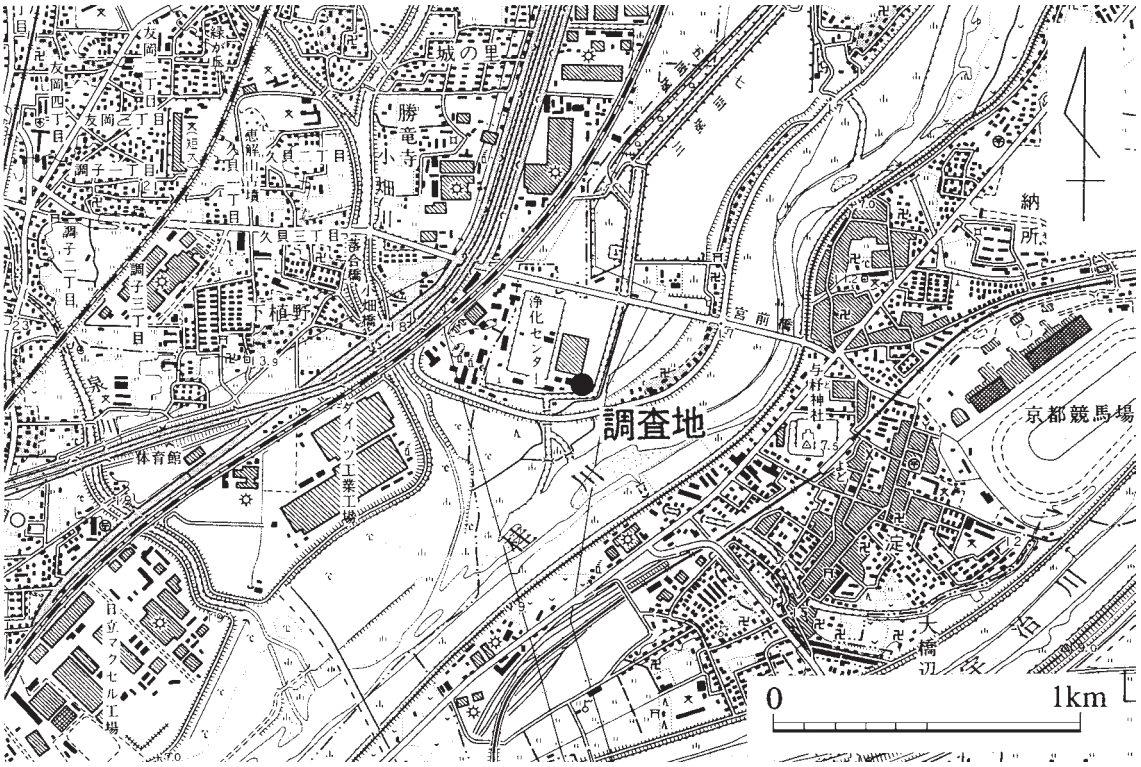
# 4.長岡京跡左京第527次
# (7ANYSK-1地区)発掘調査報告

## 1．はじめに

長岡京跡左京第527次調査は、京都市伏見区淀大下津町において桂川右岸流域下水道洛西浄化センターの急速ろ過池建設工事に先立ち実施した事前調査である(第１図)。

調査地は、長岡京条坊復元案に従えば、九条大路と東一坊大路の交差点付近(旧条坊では左京九条一坊十三町・十四町)にあたり、北東側に左京九条二坊四町が展開する。また、同浄化センター中央部には、中世末期の下津氏の居城である下津城跡が推定されている。地理的には東側に接して東北方から蛇行して南流する桂川に、北西方から南下する小畑川が流れ込み、桂川河川内に扇状地形を形成している。合流地点を中心に小畑川と桂川の北岸には早くから堤防が構築され、その中を羽束師川(七間堀川)が縦走する。すなわち堤防内では湿地が広く発達した様子で、江戸年間に描写された絵図には水田・畑地が表現されている。桂川対岸の淀地区には豊臣秀吉により淀城が築城され、今日、元和９年に構築された淀城の石垣と堀が往時の姿を伝えている。

発掘調査は、平成20年７月22日から同年８月25日までの約1か月間で、調査面積は500㎡である。




第１図　調査地位置図（国土地理院　1/25,000　淀）

現地調査は、当調査研究センター調査第２課第１係長小池寛、同第１係主任調査員松井忠春が担当した。調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課・(財)京都市埋蔵文化財研究所から教示を賜った。

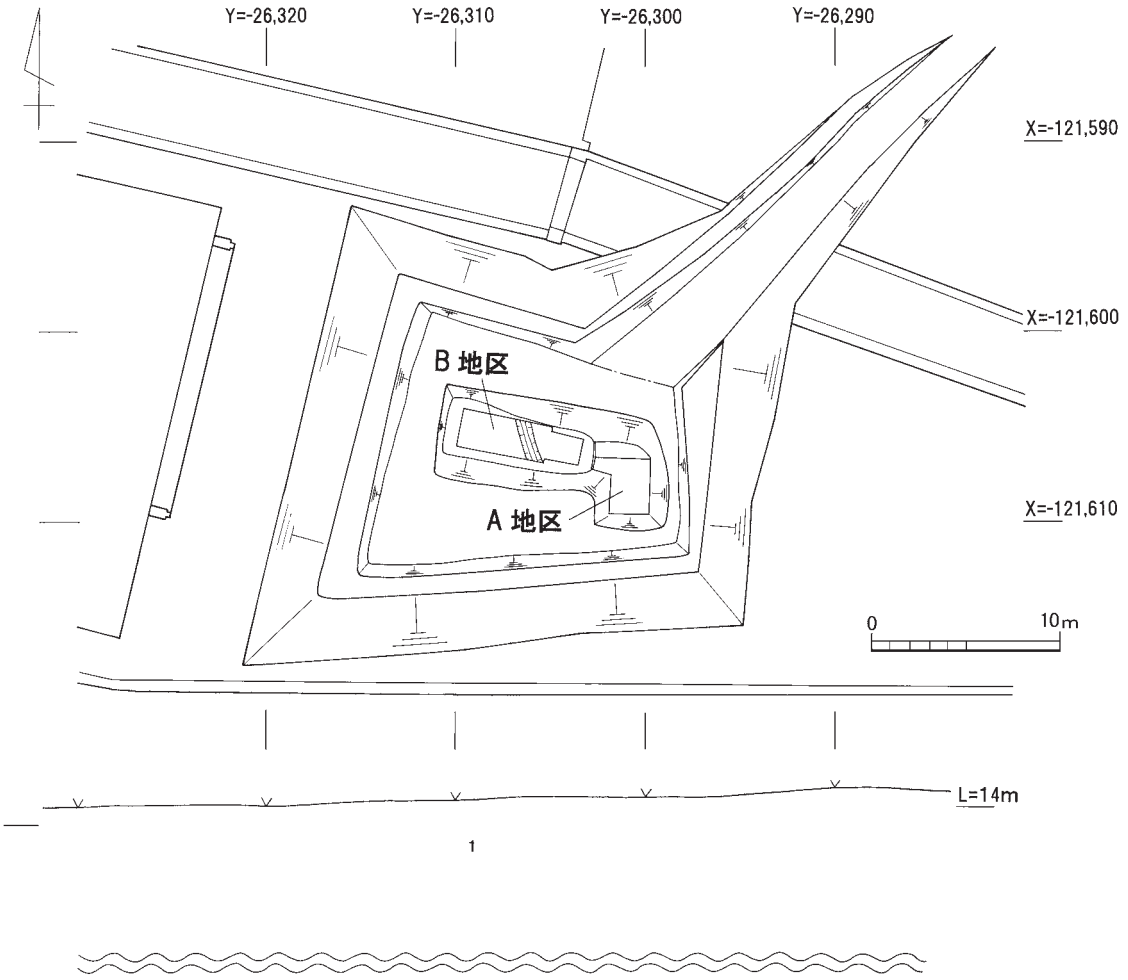
なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府流域下水道事務所が負担した。

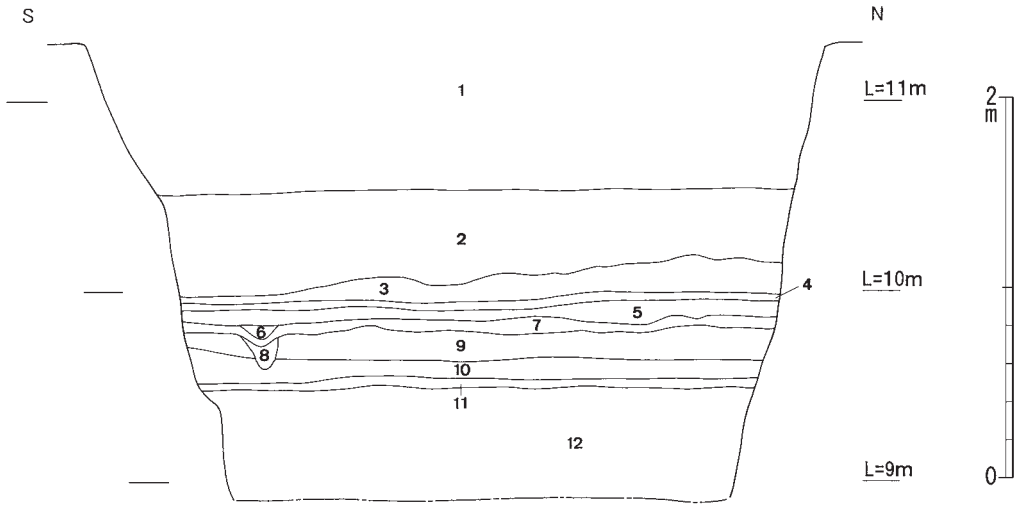
## ２．調査の内容

発掘調査は、まず、現浄化センター造成時の盛土を、草木を伐採した後、建築工事に支障のないように配慮しつつ、重機掘削を行った。表土下約２ｍで、約１ｍ幅の平坦地を設け、さらに約１ｍ掘り下げた。当初、この深度で湧水が懸念されていたが、比較的少量で止まった。この位置で、一旦平坦地を設けて、東北側に工事用進入路に重複するように発掘調査用の斜路を掘削した。この深さまでは現代盛土で、さらに下位に続いていた。発掘調査での掘削事故等の危険を避けるために、平地中央部に、東西９ｍ×南北５ｍのＢ地区と、東西４ｍ×南北６ｍのＡ地区を連結させてＬ字状に２調査地を設定した。Ａ地区を浅く、Ｂ地区はＡ地区より深く、段差をもって、堆積状況や遺構・遺物の有無を確認すべく、さらに約1.3m下位まで重機で掘り下げを実施した。その結果、標高約10mで旧耕作土を確認した。その上部はバラスを含めた旧整地面が堅くしまって、安定面を形成していた。これより以後は人力により徐々に掘削を繰り返しながら、両地区を約１ｍ下位まで丁寧に観察しながら掘り進めた。Ａ地区では足跡と溝１条(図版第３－２・３)を、Ｂ地区では溝１条(図版第４－２)を検出したが、出土遺物は皆無であった。Ｂ地区ではさらに南壁に沿って東西方向に断ち割りを約0.5mの深さで行ったが、耕作土あるいは沈澱堆積土と推察できる粘質土が下方に引き続いて堆積している状況であった。この作業で生じた排土はダンプカーとベルトコンベアーを使用して、場外へ搬出した(第２図上図参照)。

以上、発掘作業工程を簡略に記述した。次に表土下約４ｍの旧耕作土以下の堆積土及び検出した遺構を中心に、Ｂ地区西壁の層序を取り上げて順次上層から説明を加える(第２図下図参照)。最上層は、礫・砂利・粘土塊と共に廃材を含む現代盛土で、昭和47年から開始された現洛西浄化センター建設に伴う造成盛土で、その高さは約3.5mに達する。この現代盛土直下は上面を堅く叩きしめられたバラスで安定した整地層を成す。上層同様に、礫や廃材などを含むがバラス層が上面を被う点が相異する。黒灰色粘質土は造成前の旧耕作土で、一定の厚さをもって下位に緑黄色粘質土を薄く敷いていた。床土である。水田や畑地に利用されていたことが窺える。灰黄色土は若干褐色を帯びた土色で、0.4～0.5mの安定した厚さである。長期間使用された耕作土と考えられる。直下の緑黄色砂質土は粘着力が強く、床土に相応しい。灰黄色土と共にやはり水田・畑地を形成していたのであろう。これより約0.5m間の堆積土は、灰褐色砂混り粘質土・淡灰色粘質土と緑黄色粘質土、灰色粘質土と灰白色砂は、沈澱と洪水での堆積が相互に生じた結果であろう。最下層の灰褐色粘質土は緻密な砂粒を含む粘着力の強い堆積層である。

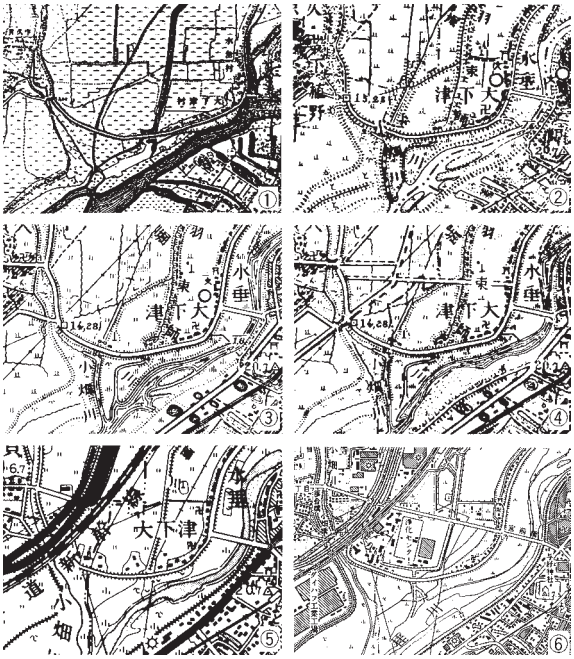
上記の堆積層の内、耕作土である灰黄色土内で北西→南東に斜走する一条の溝をＡ地区で確認した。黄褐色砂質土が埋土で、幅約0.3m、深さ約0.1mで、北西に向かって底面が下降する。そ




1 現代盛土
2 整地層
3 黒灰色粘質土（耕作土）
4 緑黄色粘質土（床土）
5 灰黄色土（耕作土）
6 灰褐色土
7 緑黄色砂質土（床土）
8 青灰色土
9 灰褐色砂混り粘質土
10 灰色粘質土
11 灰白色砂（洪水層）
12 灰褐色粘質土

第２図　調査地平面図・B 地区西壁断面図




第３図　土地利用変遷図
①明治 20 年代　②明治 42 年　③昭和７年
④昭和 24 年　⑤昭和 44 年　⑥昭和 54 年

の直下から有蹄類の足跡を検出した。足跡の形状から牛の可能性が高い(図版第３－２・３)。

Ｂ地区では、最下部から幅約0.8mの一条の溝を確認した。深さは約0.3mを測る。埋土は１cm程の厚さの白色砂を間層とし青灰色粘質土が充填されていた。底面は北西に下降する。

上記の遺構内からは何らの遺物も出土していないため、年代を推定することは困難ではあるが、大概、Ａ地区のそれらは近世に、Ｂ地区のそれは中世に想定して大過なかろう。

## ３．まとめ

第３図は明治20年代～昭和54年までのおよそ90年間の調査地付近の土地利用を検討するために提示した地形図である。①は明治年間には水田であったことを明示している。④の昭和24年作成図にあっても変化していないが、⑤の昭和44年に至っては、開墾・造成され、工場が建設されている。⑥の昭和54年では現在の浄化センターへと変貌する。④～⑥は水田→工場→浄化センターへの大変画期であったことを顕著に表現している。この変化は、堆積土として、バラスで整地された平坦面が工場建設時に対応し、上層盛土は浄化センター建設時のものであって、耕作土である黒灰色粘質土は①～④の水田を指図している。明治以前の江戸年間は、旧巨椋池を中心にした三川合流付近では豊臣秀吉による太閤堤や淀城に見るように、三河川の水利及び堤防の構築などによる強固な防禦施設が大規模に実施されたことで、自ずと本地域にも影響が及び、調査地南側に大きく緩やかな曲線を描く堤防とそこに営まれた大下津･水垂の集落が発達し、背後に水田地帯が展開することは既に記したところである。さらに、標高９m付近は、沈澱層である青灰色粘質土である。これは三河川合流点の西辺部に存するこの地が、三河川の水量の対応して淀みと化して生じたもので、この様相は旧巨椋池周辺に分布する諸遺跡でも確認できる。従って無遺物や小規模な溝一条のみからは速断はできないが、少なくとも中世段階では集落などの遺構はなく、水田等が広がる世界であったと推定する。

（松井忠春）

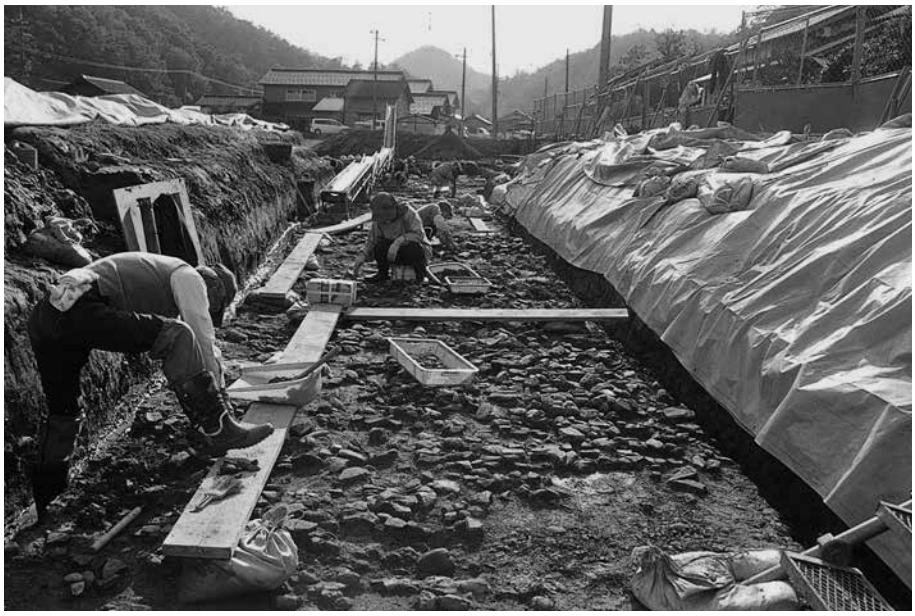
# 図　　版

⑴ 調査地遠景（南上空から）

⑵ Ｂ地区瓦堆積検出状況（北東から）

⑴ 調査地近景（北から）

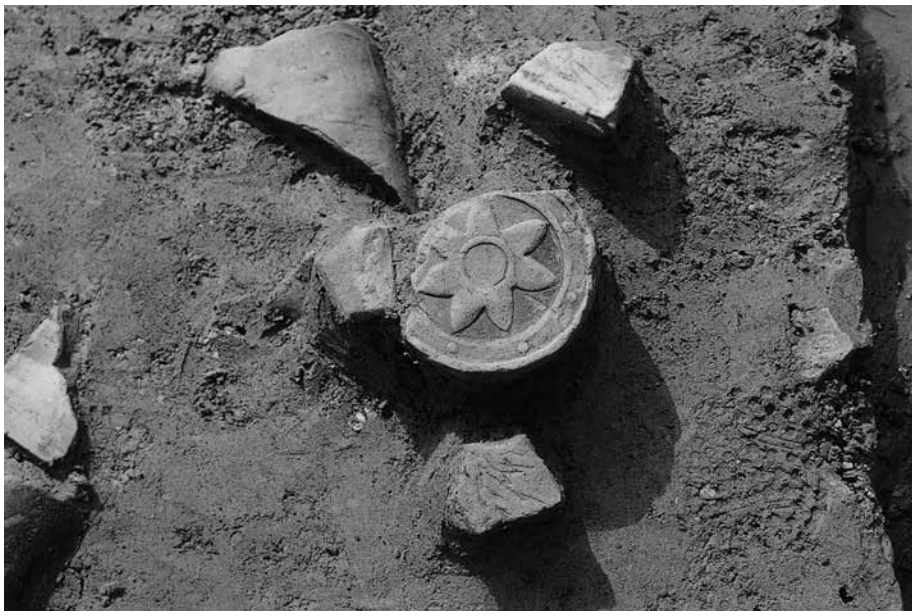
⑵ Ａ地区全景（北から）



⑶ Ａ地区瓦堆積検出作業風景
（北から）

⑴ Ａ地区瓦堆積南側遺物出土状況（北から）

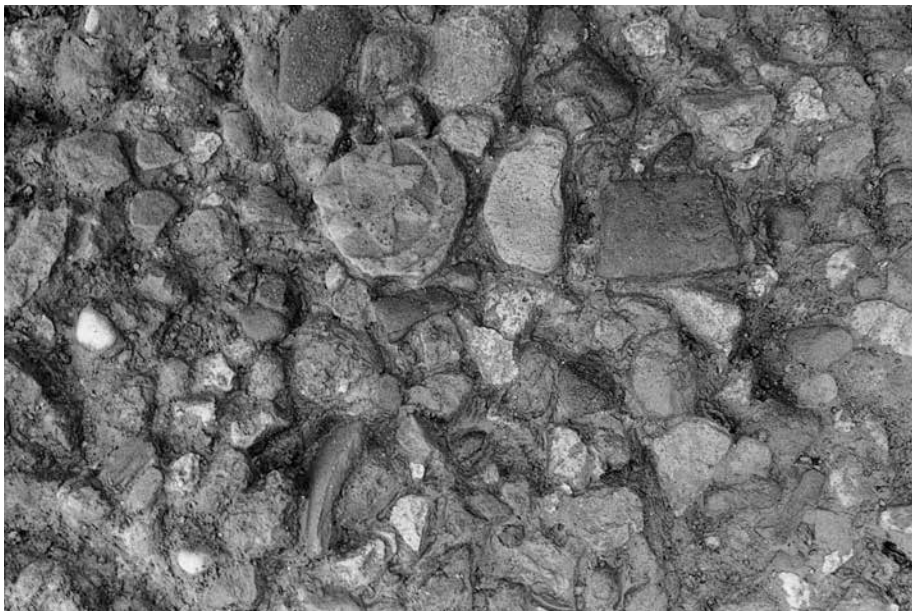
⑵ Ａ地区瓦堆積南側軒丸瓦(48)出土状況（北東から）



⑶ Ａ地区瓦堆積南側軒丸瓦(52)出土状況（北東から）

⑴ Ａ地区礫敷き遺構全景（北から）

⑵ Ａ地区礫敷き遺構検出作業風景
（北西から）



⑶ Ａ地区礫敷き遺構軒丸瓦⑸
出土状況（東から）

⑴ Ｂ地区全景（北から）

⑵ Ｂ地区瓦堆積南側検出状況（西から）

⑶ Ｂ地区瓦堆積北側検出状況（西から）

⑴ Ｂ地区東側軒丸瓦(54・55)
・平瓦出土状況（西から）

⑵ Ｂ地区護岸施設検出状況
（南西から）

⑶ Ｂ地区護岸施設検出状況
（南西から）

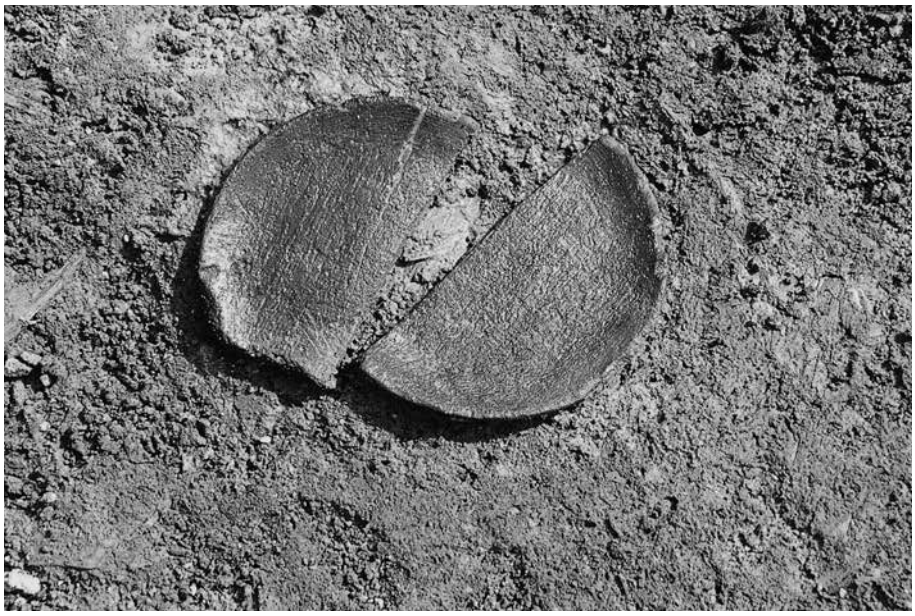
⑴ 現地説明会風景（北東から）

⑵ Ｃ地区全景（南西から）

⑶ Ｃ地区護岸施設検出状況
（南から）

⑴ Ｃ地区軒丸瓦 (58) 出土状況
（西から）

⑵ Ｃ地区軒丸瓦 (57)・丸瓦 (69)
出土状況（西から）



⑶ Ｃ地区南北溝内木製品 (78)
出土状況（北東から）

1

4

10

10

13

16

18

17

出土遺物　土器（1）

26

33

34

36

37

40

44

44

45

45

出土遺物　土器（2）

49

49

52

52

53

53

出土遺物　瓦（1）

54

55

55

55

57

58

出土遺物　瓦（2）

60

61

65

67

68

68

出土遺物　瓦（3）

出土遺物　瓦（4）

73

73

70

70

出土遺物　瓦（5）

75

77

76

77

78

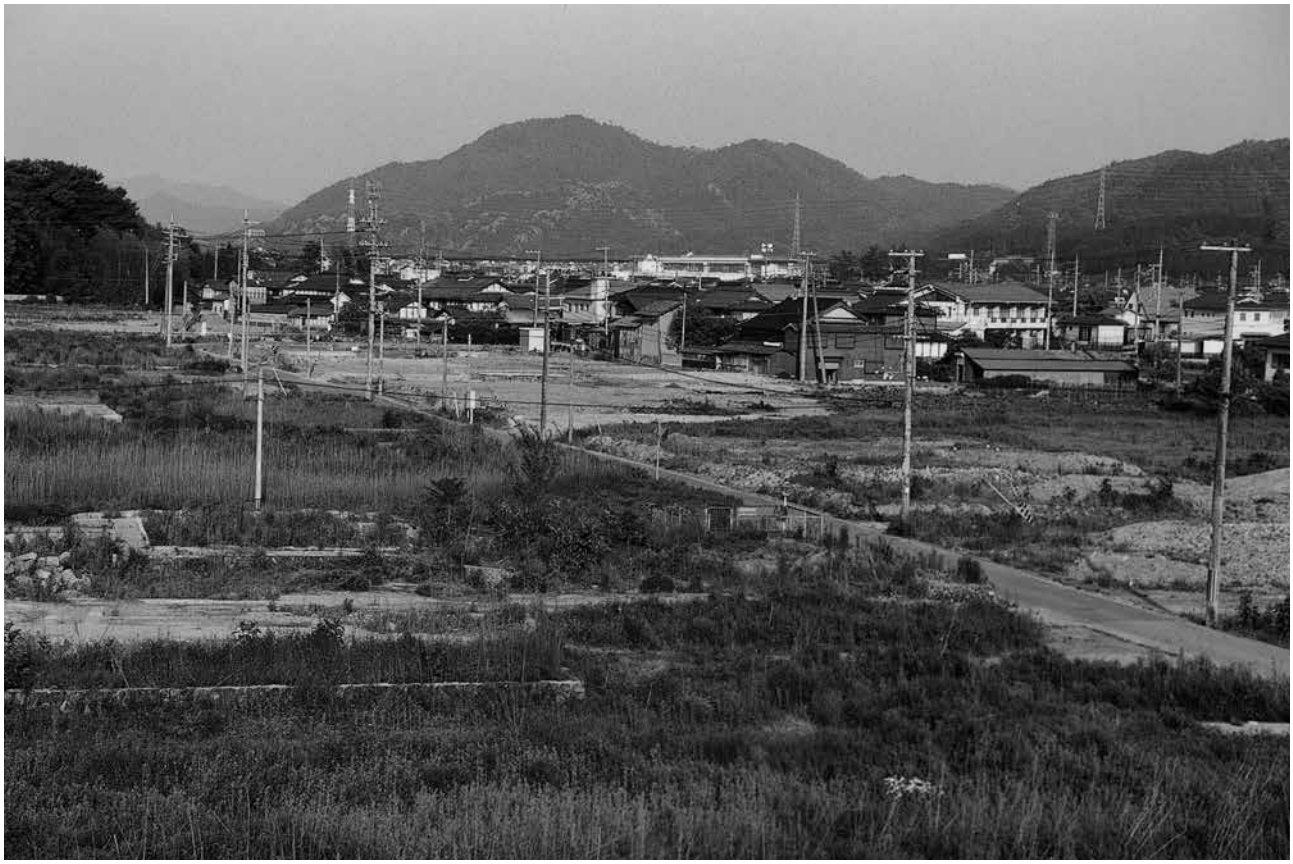
78

出土遺物　木製品

⑴ 調査前全景（西から）

⑵ Ａ地区調査前全景（北東から）

⑶ Ｂ地区調査前全景（東から）



⑴ 調査前全景（北西から）

⑵ 調査地全景（空撮・南から）

⑴ 調査地遠景（空撮・東から）

⑵ 調査地遠景（空撮・西から）

⑴ Ａ地区全景（空撮・上が北）

⑵ Ｂ・Ｃ地区全景（空撮・上が北）

⑴ Ａ地区全景（南西から）

⑵ Ａ地区土坑 SK07（南から）

⑶ Ａ地区石組溝 SX08（南東から）

(1)　Ａ地区池状遺構 SX510
（南東から）

(2) Ａ地区池状遺構 SX510
（南西から）

(3) Ａ地区池状遺構 SX510 部分
（南東から）

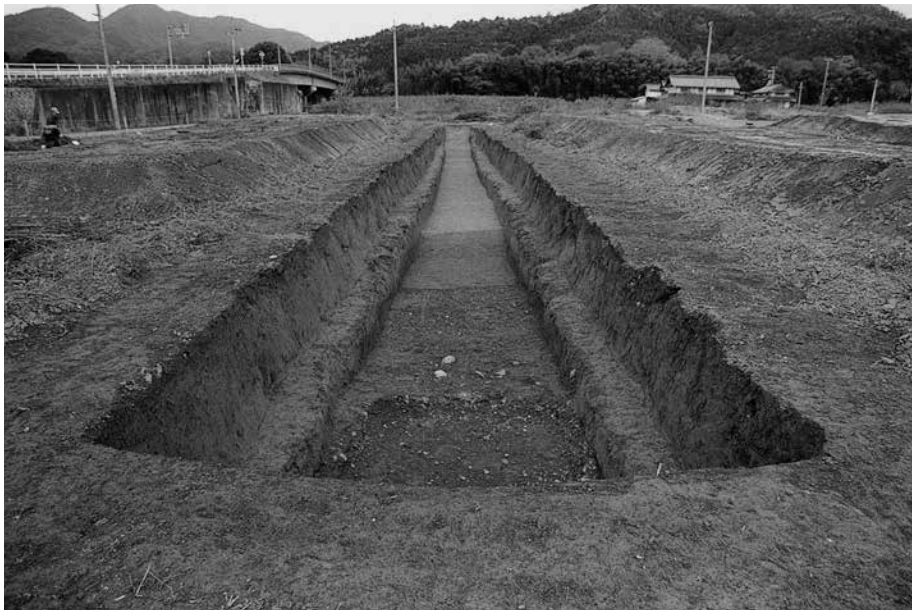
⑴ Ｂ地区全景（西から）

⑵ Ｂ地区溝 SD22 遺物出土状況（西から）

⑴ Ｂ地区全景（南東から）

⑵ Ｂ地区溝 SD22 遺物出土状況
（南東から）

⑶ Ｃ地区溝群（北東から）



⑴ ２トレンチ全景（南から）

⑵ ２トレンチ断割り断面
（南東から）

⑶ ４トレンチ拡張部分（南から）

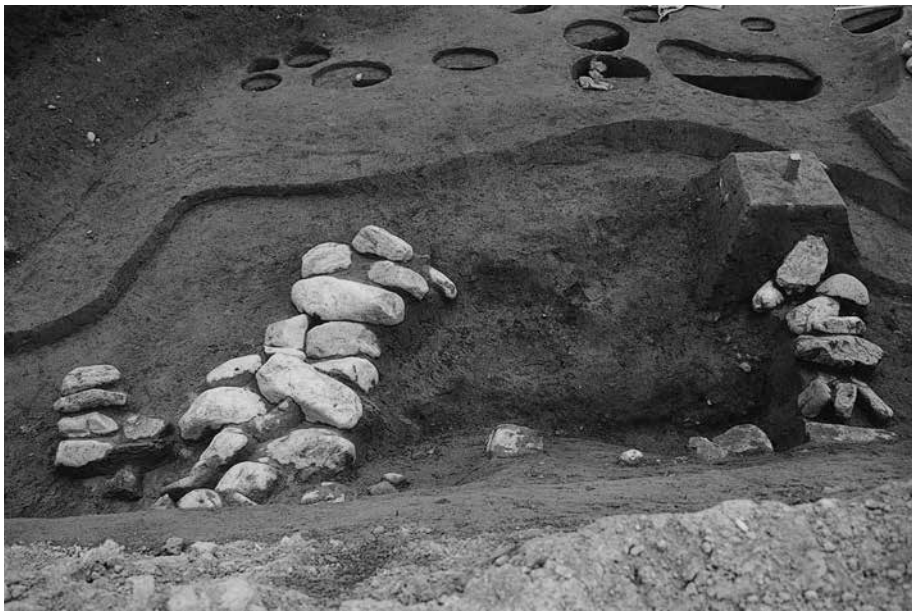
⑴ 7 トレンチ全景（南から）

⑵11 トレンチ全景（北から）

⑶15 トレンチ全景（北西から）

⑴16 トレンチ南半部（北西から）

⑵17 トレンチ全景（北から）



⑶20 トレンチ検出石組遺構
（東から）

79

72

165

166

155

170

148

149

157

158

160

161

162

182

出土遺物（1）瓦器・土師器

169

191

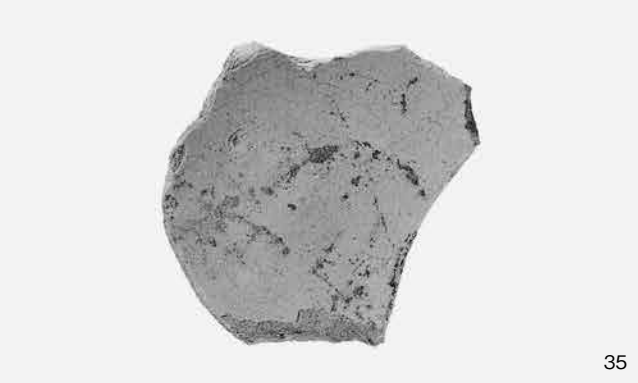
189

6

54

190

190


35

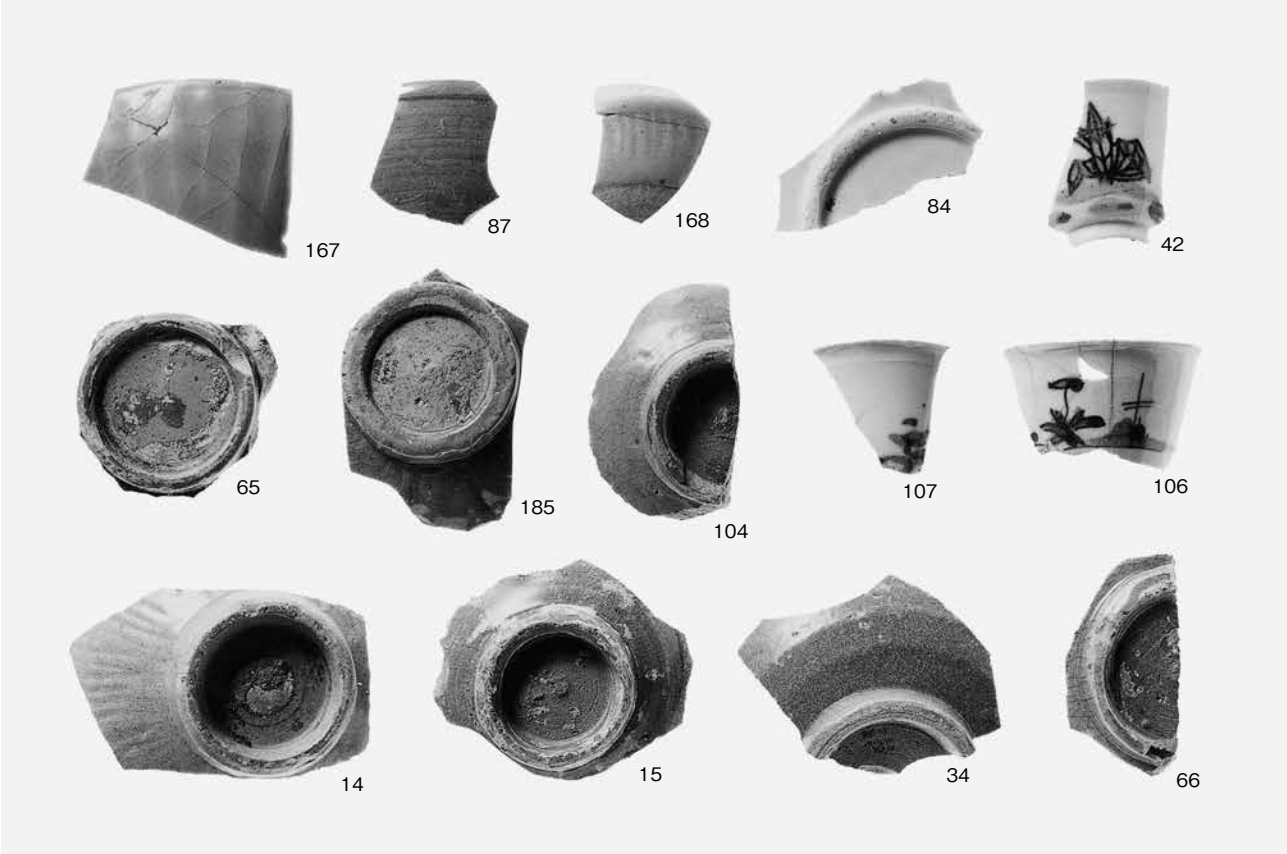
35

98

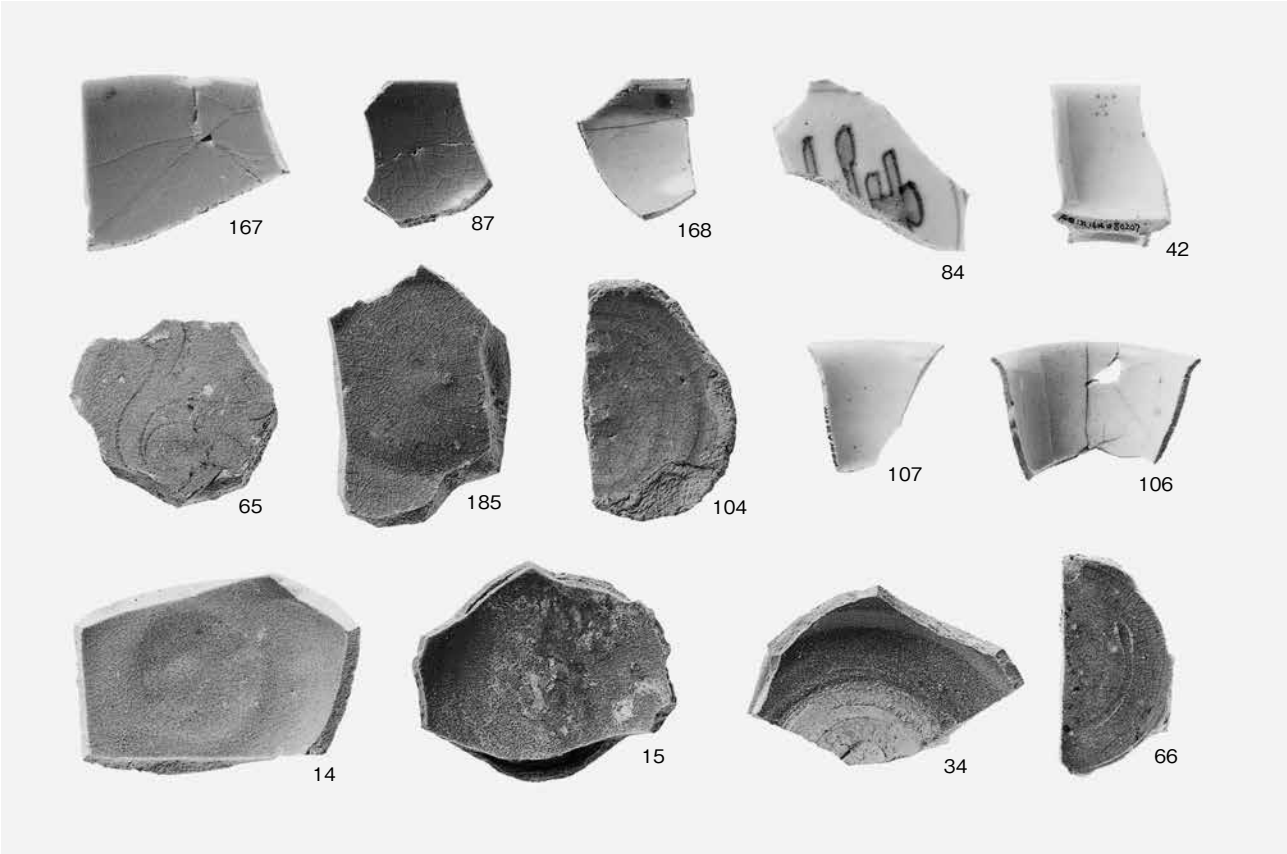
98

135

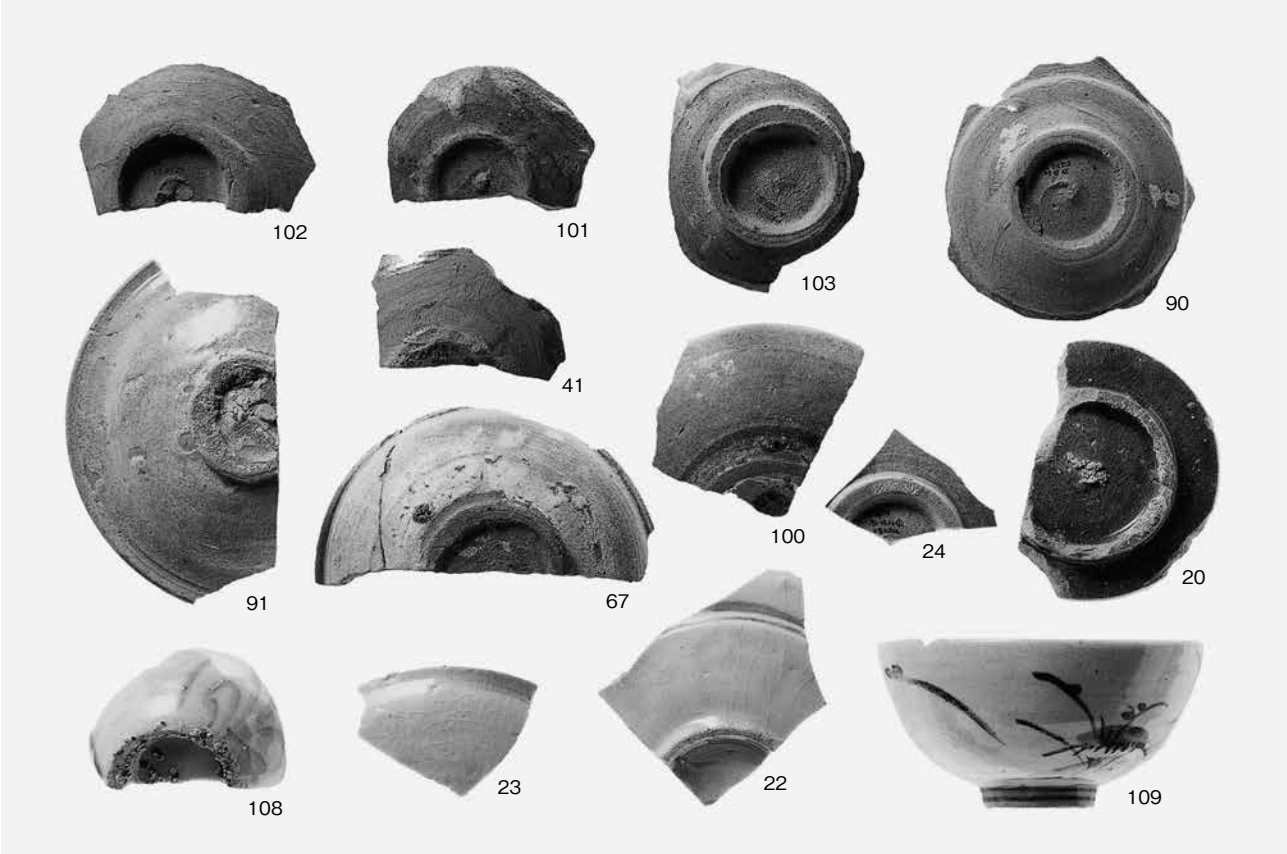
出土遺物（2）土器・陶磁器



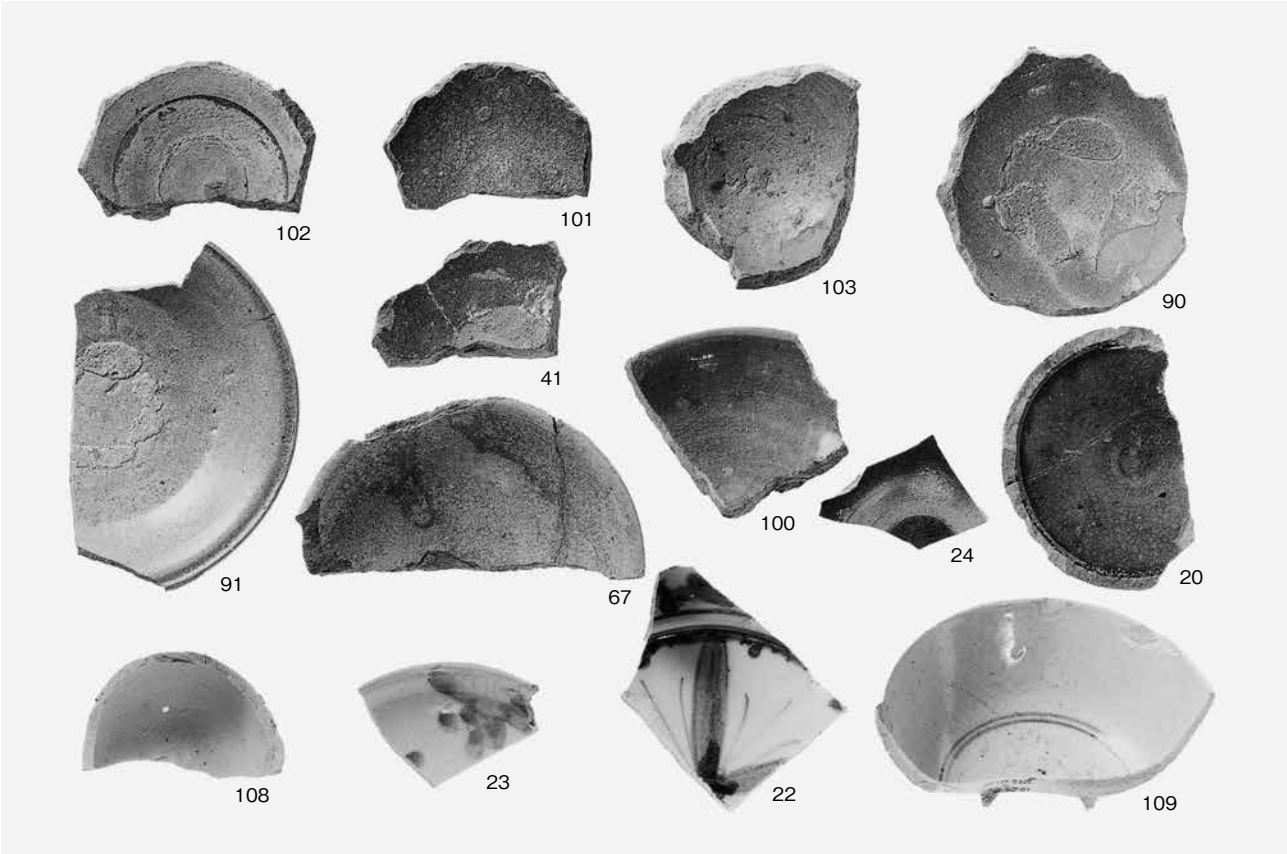

⑴ 出土遺物（3）中国製陶磁器、外面



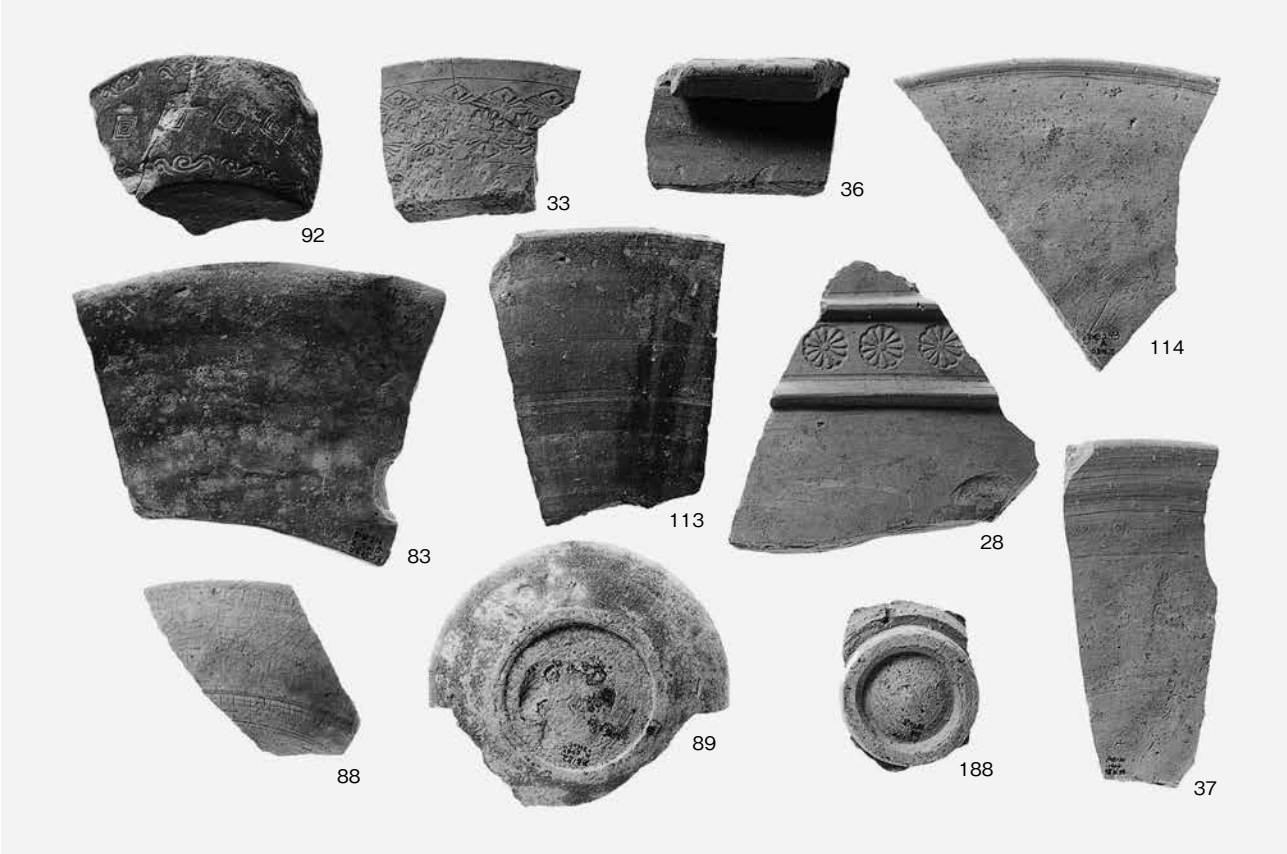

⑵ 出土遺物（3）中国製陶磁器、内面



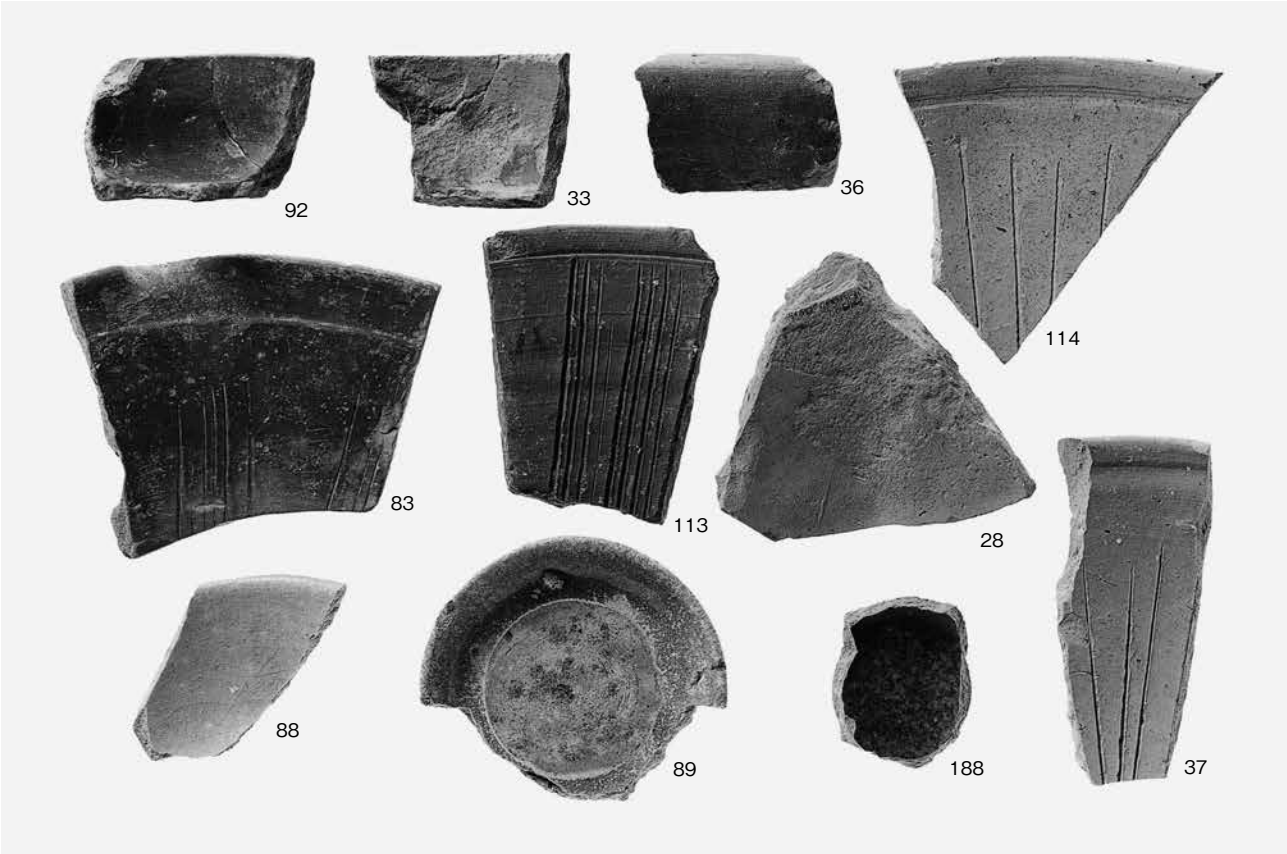

⑴ 出土遺物（4）肥前陶磁器、外面




⑵ 出土遺物（4）肥前陶磁器、内面




⑴ 出土遺物（5）土器・国産陶器、外面




⑵ 出土遺物（5）土器・国産陶器、内面

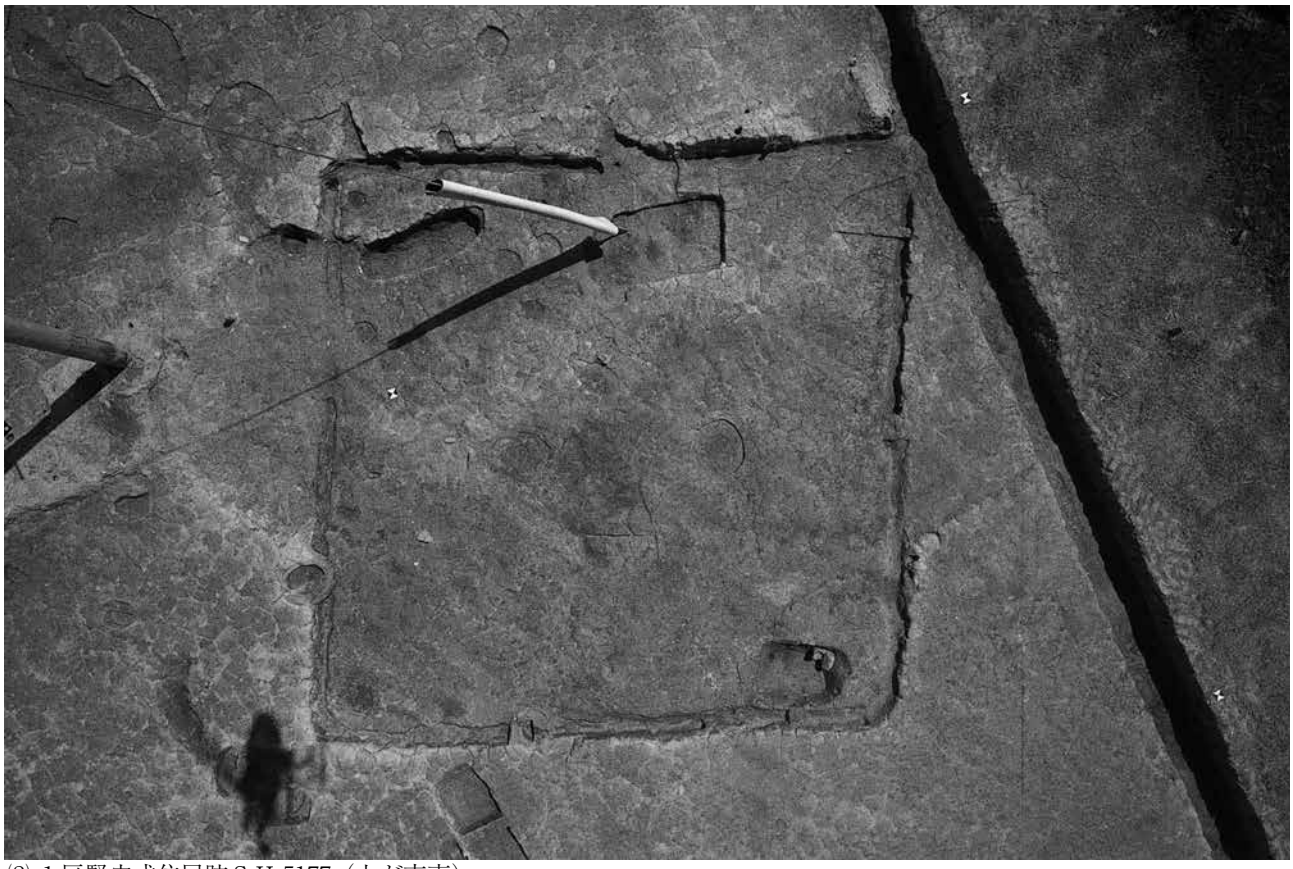
⑴ 新庄遺跡調査地遠景（上が北）

⑵ 新庄遺跡調査地遠景（上が西）

⑴ １区調査地全景（東から）

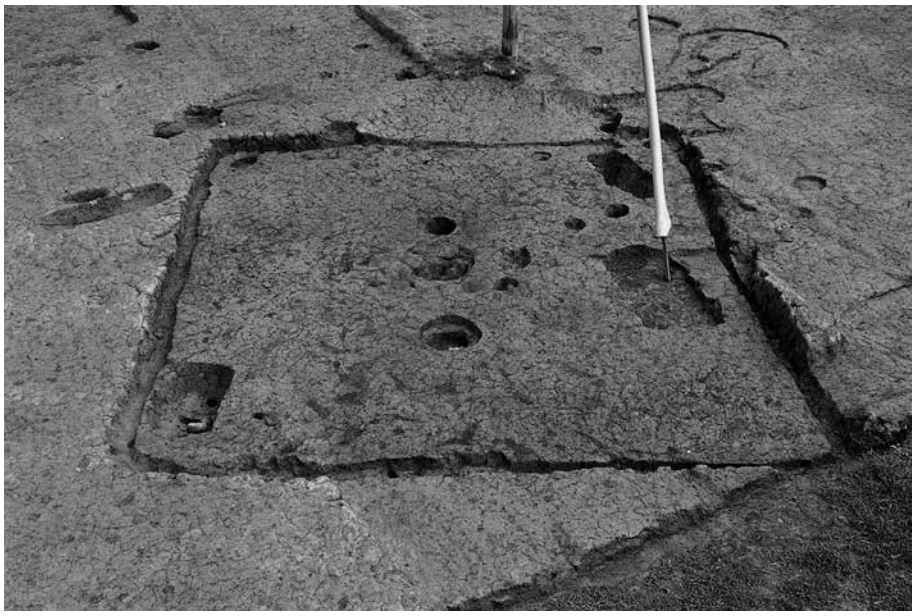
⑵ １区調査地全景（上が東）

⑴ １区竪穴式住居跡ＳＨ 5177（北東から）



⑵ １区竪穴式住居跡ＳＨ 5177（上が南東）

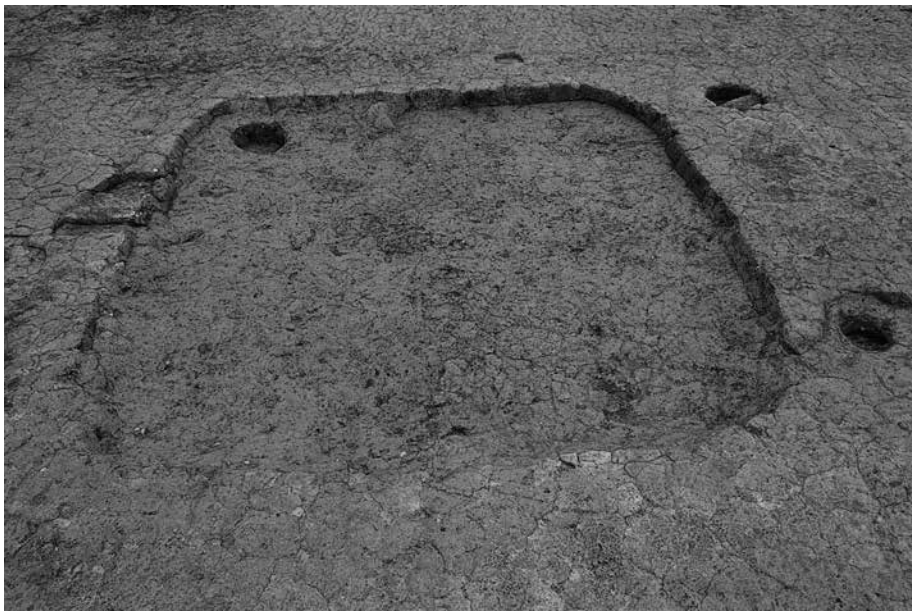
⑴ １区竪穴式住居跡ＳＨ 5177
（北西から）



⑵ １区竪穴式住居跡ＳＨ 5177
（南西から）

⑶ １区竪穴式住居跡ＳＨ 5177 内
土坑ＳＫ 5190（南西から）

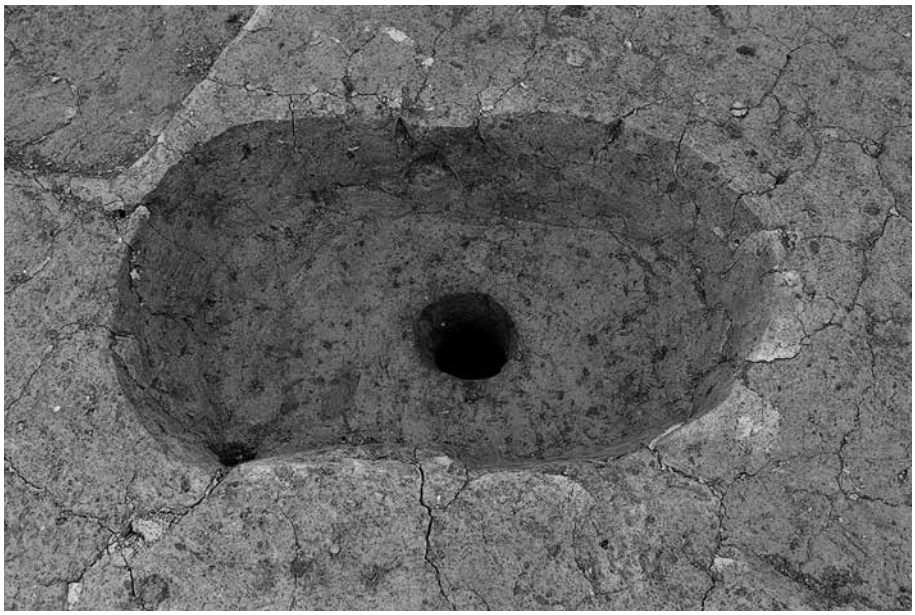
⑴ １区調査地西部柱穴群（南から）



⑵ １区土坑ＳＫ 5190（西から）

⑶ １区土坑ＳＫ 5179（東から）

⑴ １区土坑ＳＫ 5104（東から）



⑵ １区土坑ＳＫ 5143（東から）

⑶ １区土坑ＳＫ 5173（東から）

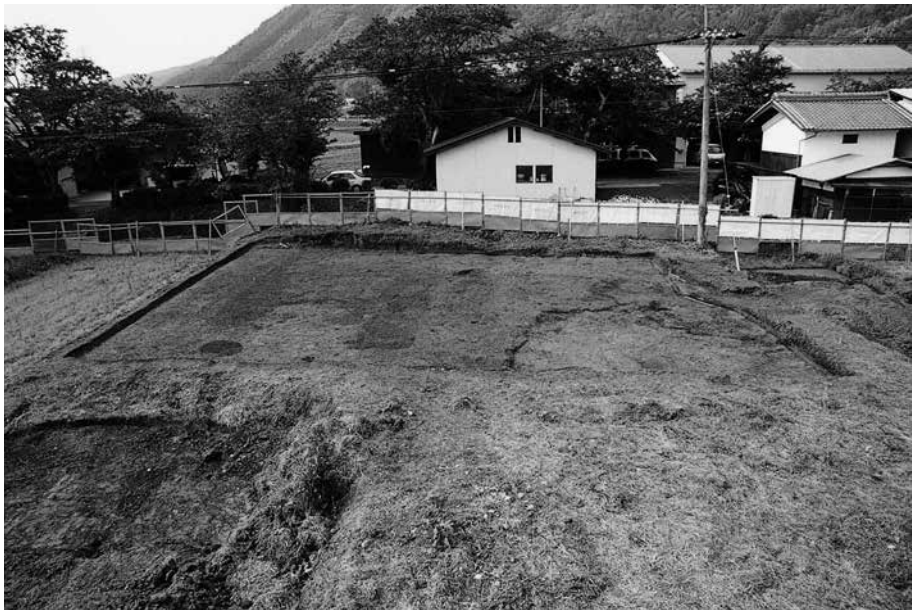
⑴ １区集石遺構ＳＸ 5158
（南西から）

⑵ １区集石遺構ＳＸ 5158（西から）

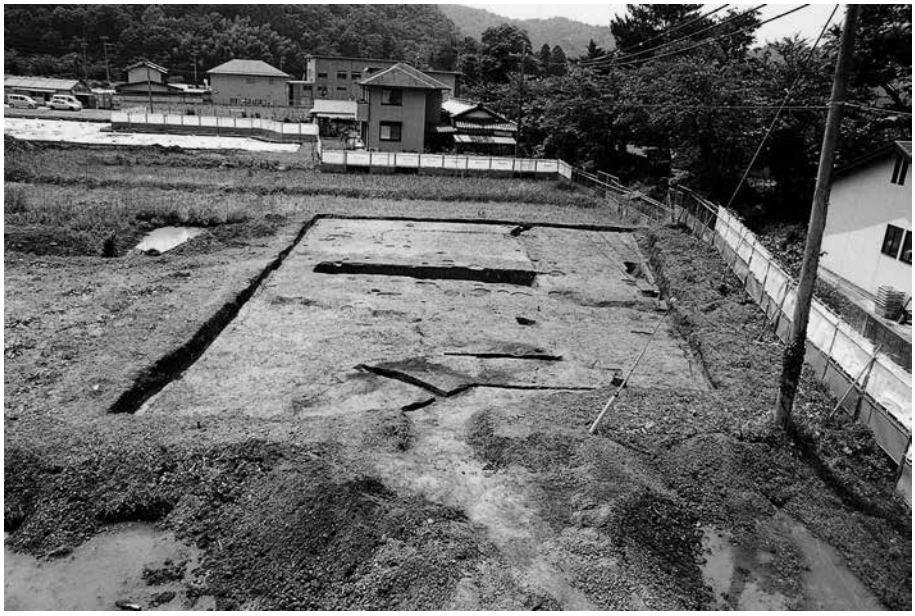
⑶ １区調査地北部粘土採掘土坑群
（東から）

⑴ ２区調査地全景（南から）

⑵ ２区調査地全景（上が北）



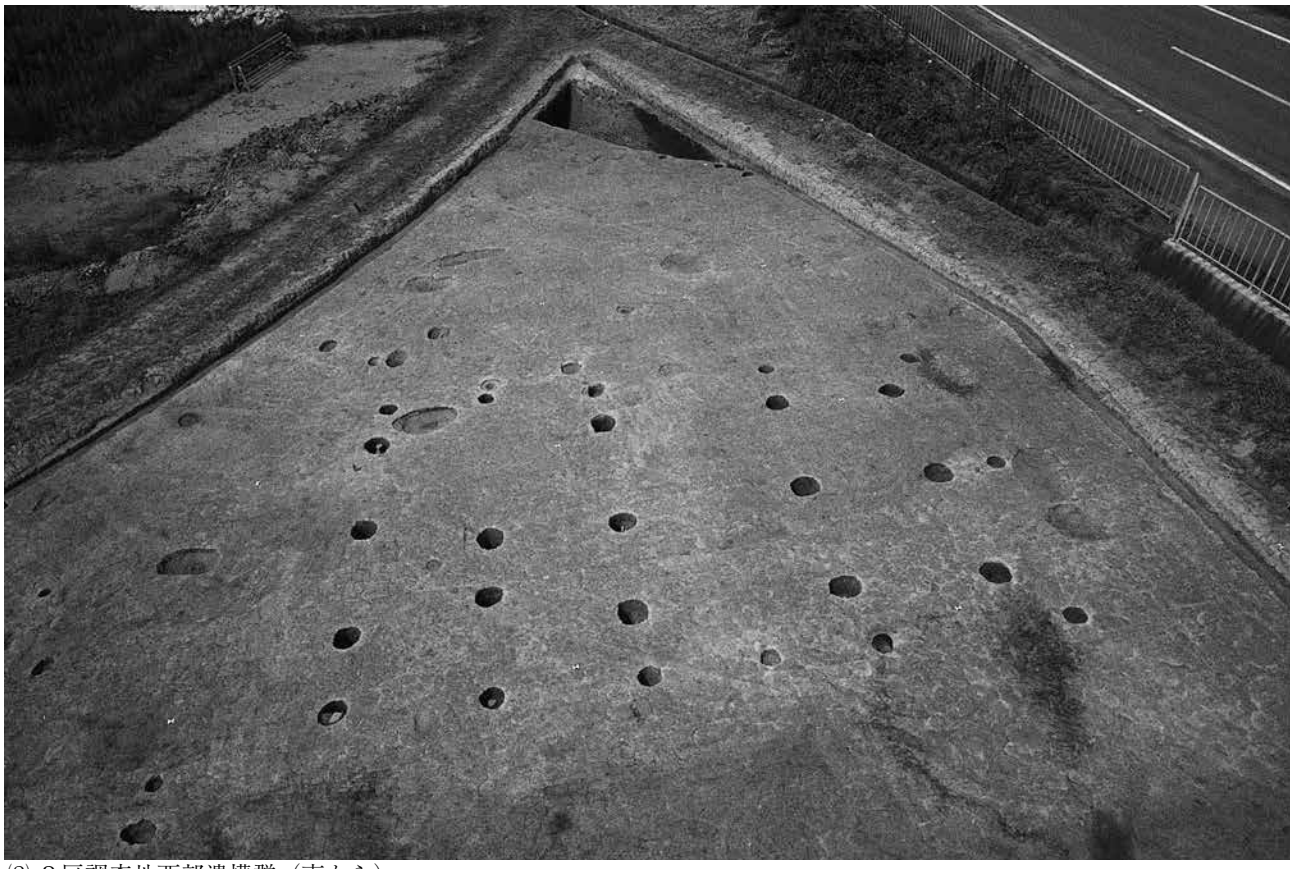
⑴ ２区調査状況（南から）



⑵ ２区調査状況（東から）

⑶ ２区西部柱穴状遺構（南西から）

⑴ ３区調査地全景（上が東）

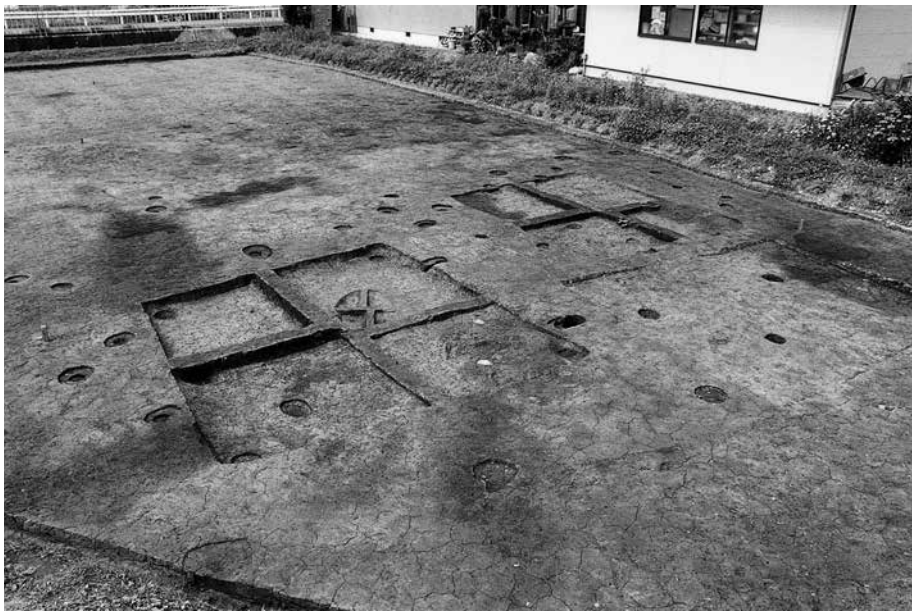


⑵ ３区調査地西部遺構群（東から）

⑴ ３区調査地東部遺構群（南東から）

⑵ ３区建物跡ＳＢ 5302（右）、ＳＢ 5305（左）（北から）

⑴ ３区建物跡ＳＢ 5302・5305
検出状況（東から）



⑵ ３区建物跡ＳＢ 5302・5305
検出状況（南東から）

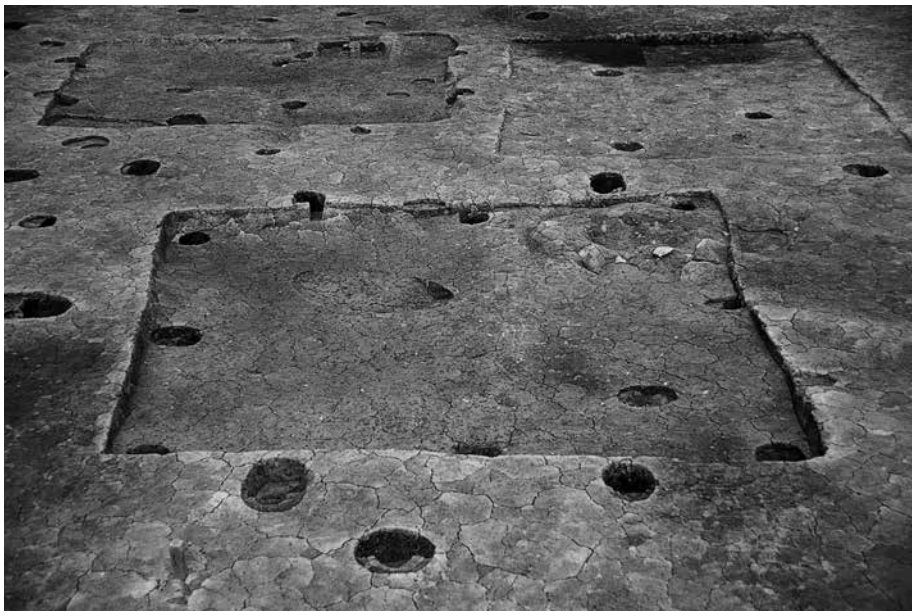
⑶ ３区建物跡ＳＢ 5302・5305
（左側）（北から）

⑴ ３区建物跡ＳＢ 5302（北から）

⑵ ３区建物跡ＳＢ 5302（西から）

⑶ ３区建物跡ＳＢ 5302 竈・
土坑Ｋ - ２（西から）

⑴ ３区建物跡ＳＢ 5305（北から）

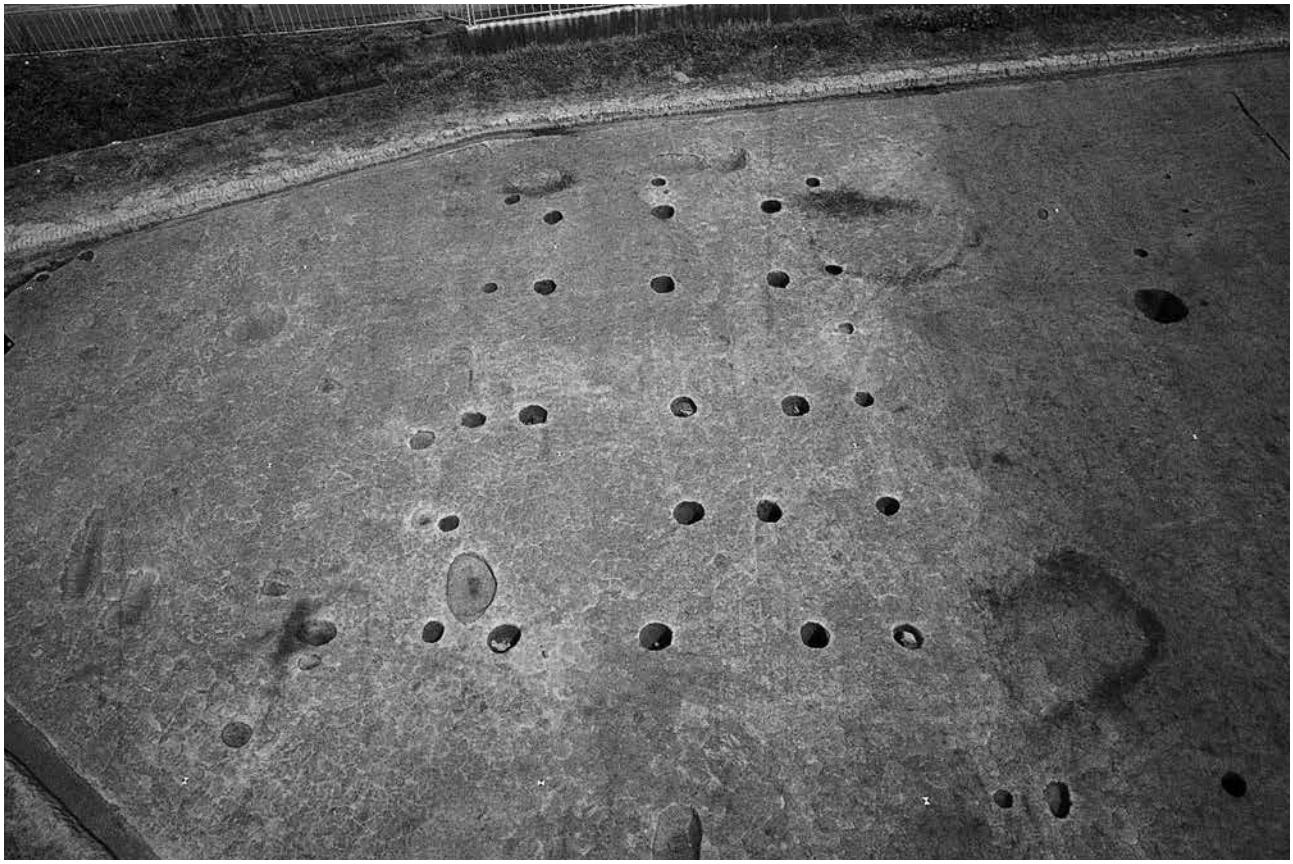


⑵ ３区建物跡ＳＢ 5305（西から）

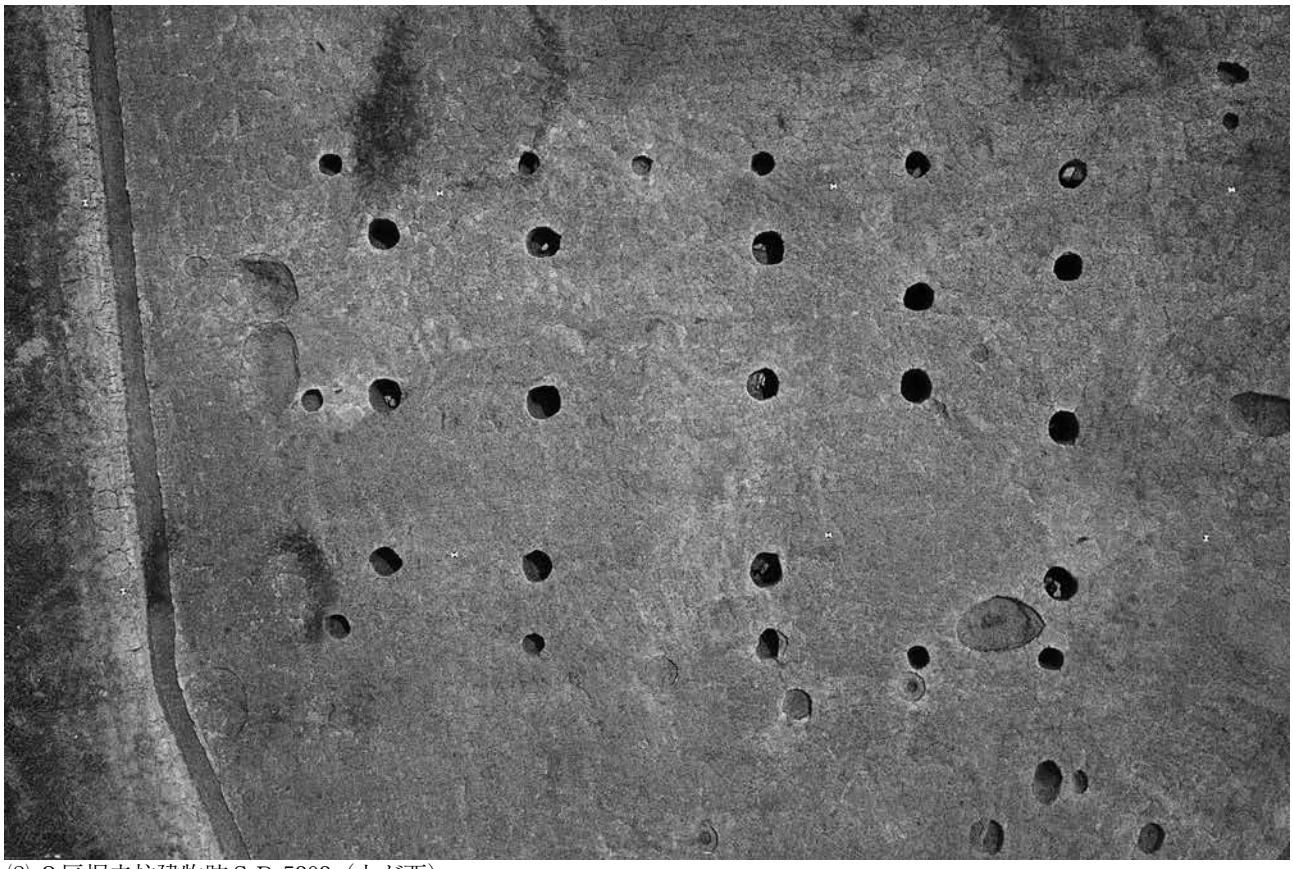
⑶ ３区建物跡ＳＢ 5305 竈
（西から）

⑴ ３区掘立柱建物跡ＳＢ 5303（西から）

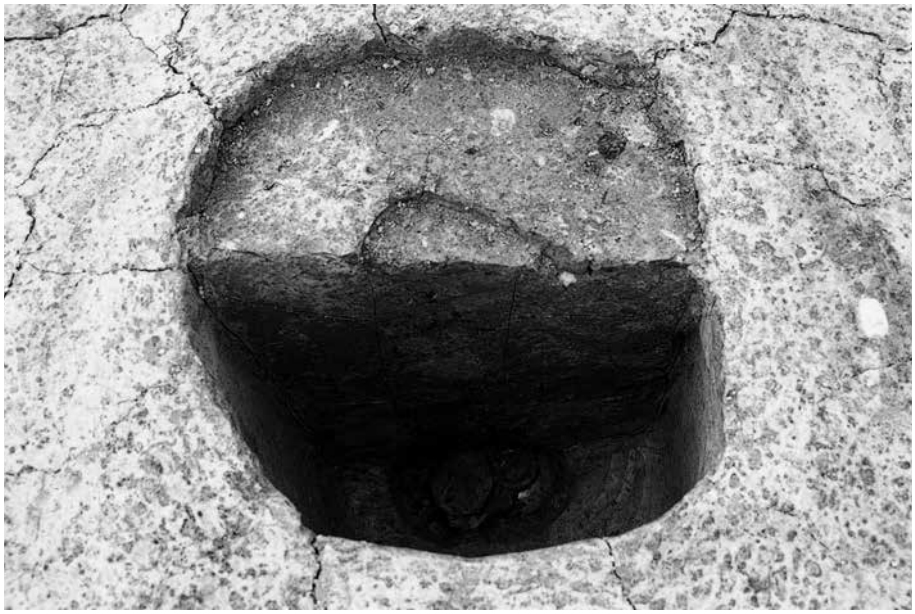
⑵ ３区掘立柱建物跡ＳＢ 5303（南から）



⑴ ３区掘立柱建物跡ＳＢ 5303（南から）



⑵ ３区掘立柱建物跡ＳＢ 5303（上が西）



⑴ 掘立柱建物跡ＳＢ 5303
柱穴Ｐ５断ち割り（南から）

⑵ 同柱穴Ｐ５底部土器埋納状況
（北から）

⑶ 同柱穴Ｐ５土器埋納状況
（北から）

⑴ 掘立柱建物跡ＳＢ 5303 柱穴Ｐ２（南から）

⑵ 同柱穴Ｐ４（南から）

⑶ 同柱穴Ｐ６（南から）

⑷ 同柱穴Ｐ７（南から）

⑸ 同柱穴Ｐ９（西から）

⑹ 同柱穴Ｐ 12（南から）

⑺ 同柱穴Ｐ 13（南から）

⑻ 同柱穴Ｐ 17（西から）

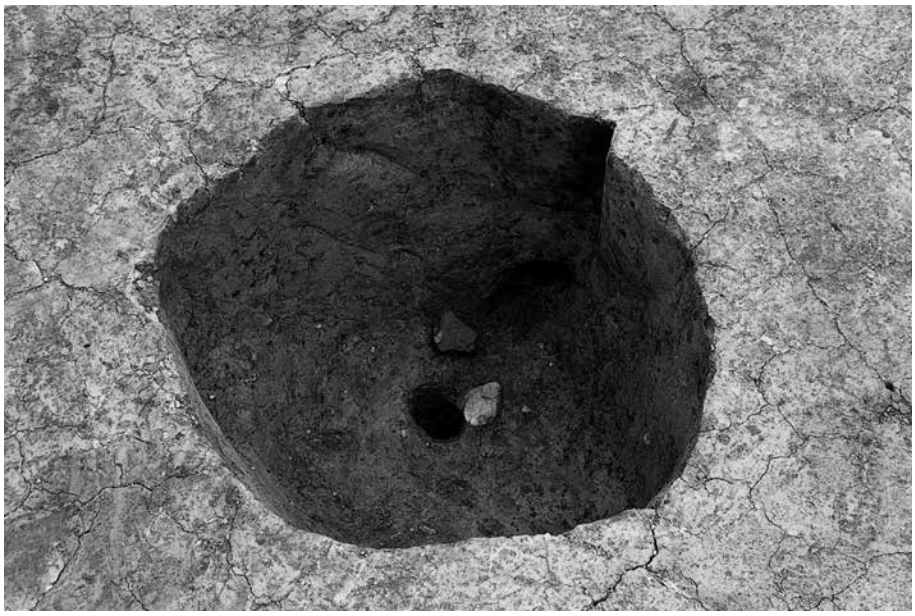
⑴ ３区溝ＳＤ 53001（南西から）

⑵ ３区溝ＳＤ 53001（北東から）

⑶ ３区溝ＳＤ 53001 断面
（南西から）

⑴ ３区土坑ＳＫ 5304（南から）

⑵ ３区土坑ＳＫ 5306（北から）



⑶ ３区土坑ＳＫ 5309（北から）

⑴ ４区調査地全景（南から）

⑵ ４区調査地全景（上が西）

⑴ ４区調査地全景（東から）

⑵ ４区竪穴式住居跡ＳＨ 5401・
掘立柱建物跡ＳＢ 5402
（北から）

⑶ ４区竪穴式住居跡ＳＨ 5401
床面石斧出土状況（南から）

⑴ ４区竪穴式住居跡ＳＨ 5401
（南から）

⑵ ４区竪穴式住居跡ＳＨ 5401 竈
（南から）

⑶ ４区竪穴式住居跡ＳＨ 5401 竈
断ち割り（南から）

2

3

4

5

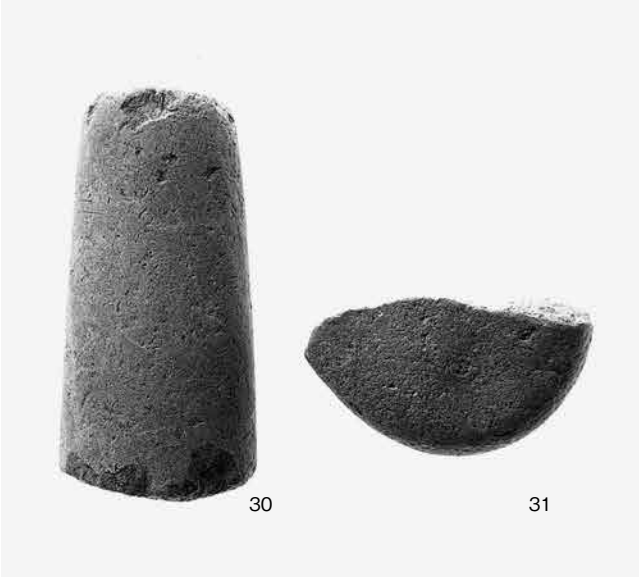
10

7

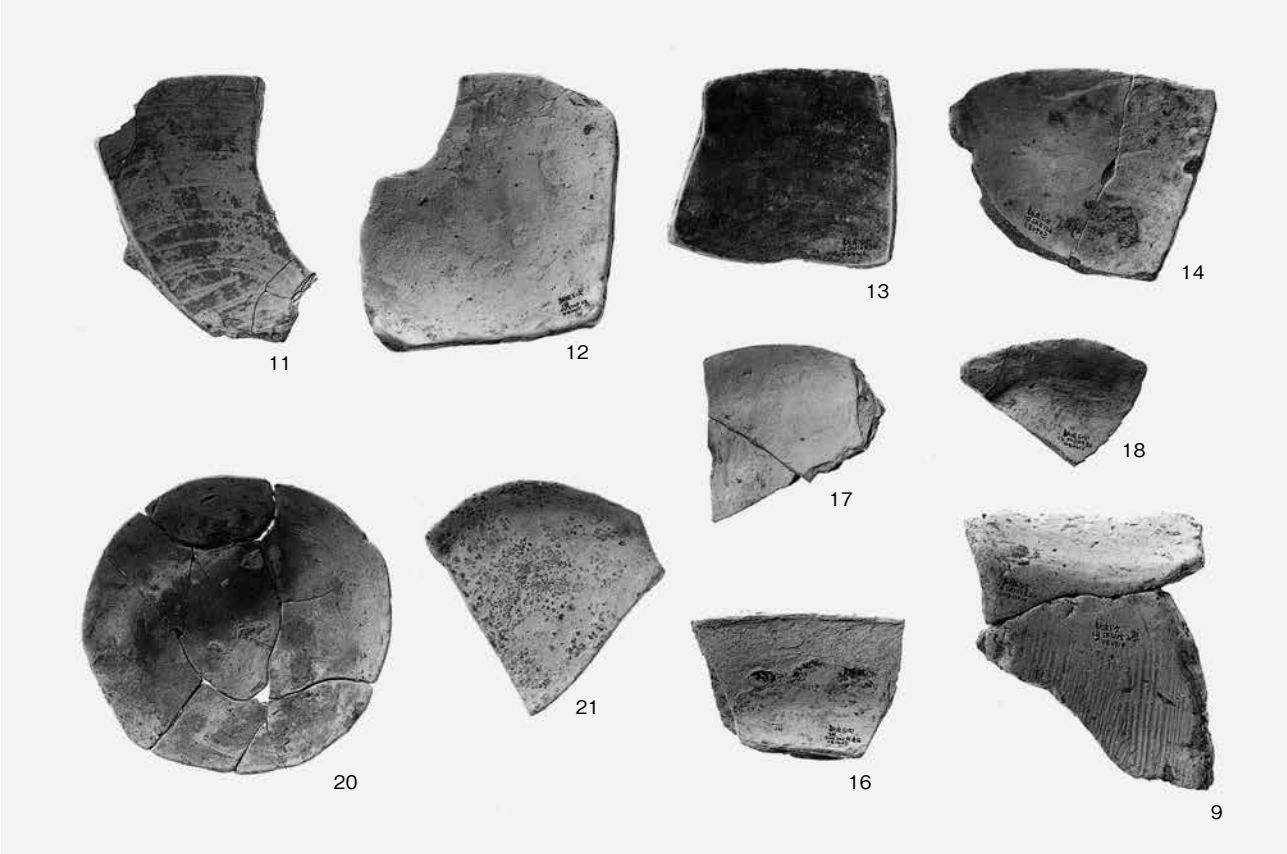
8

19

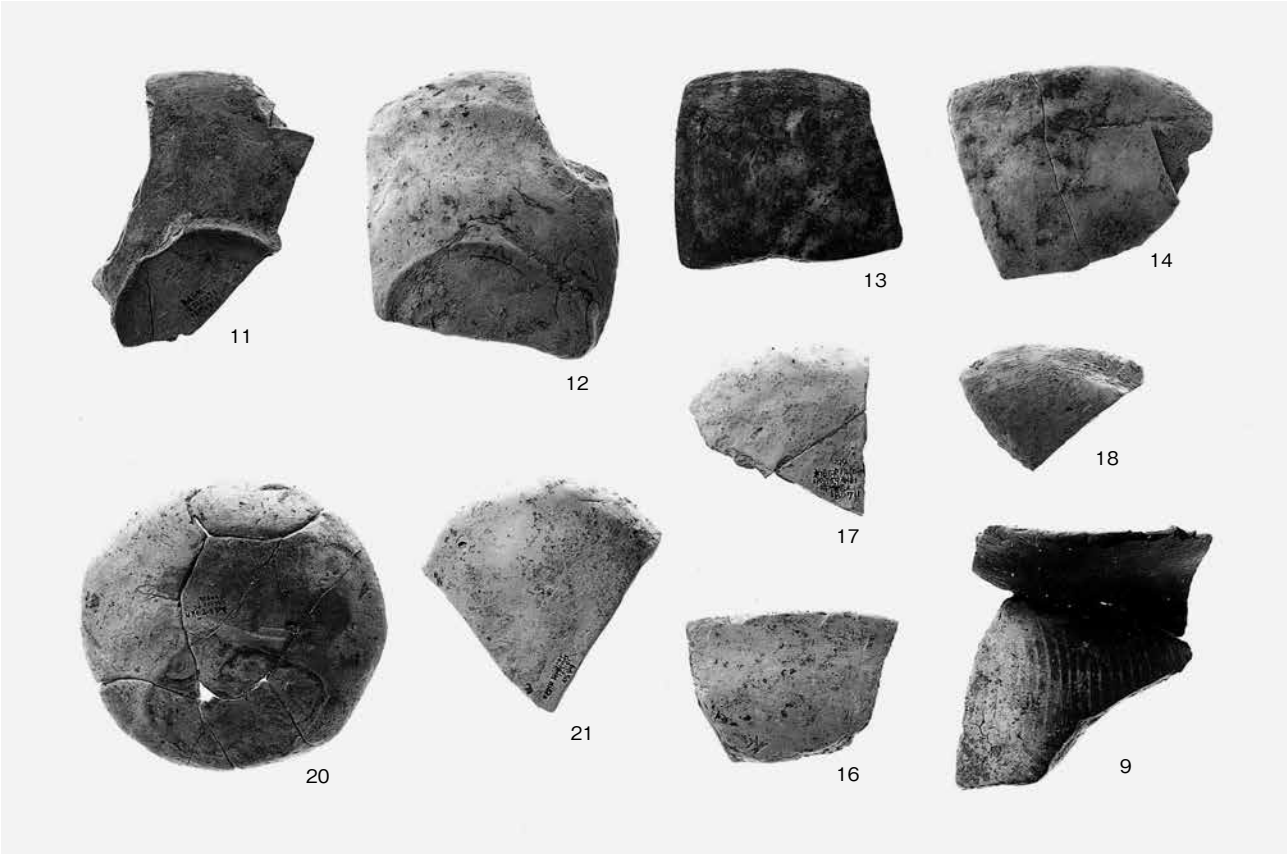
22


30 31

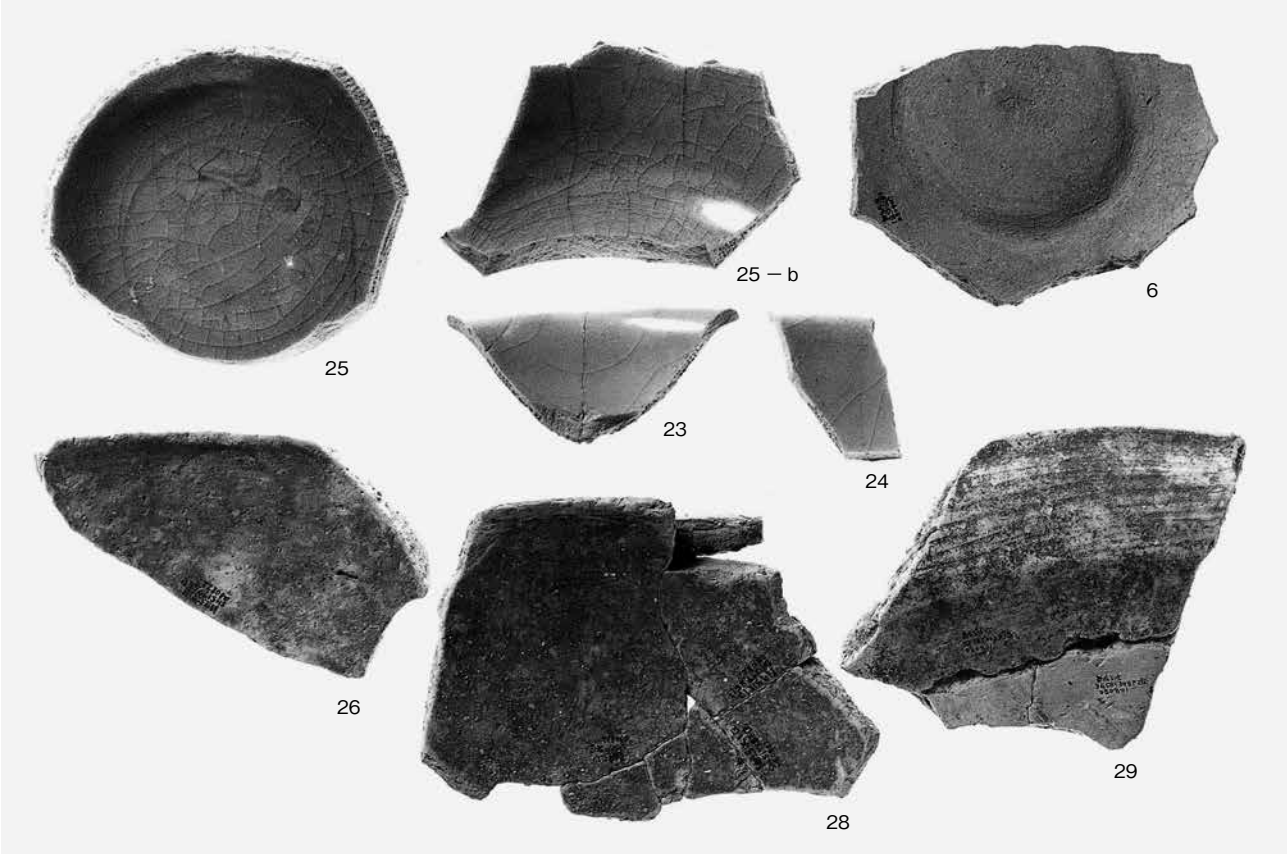
出土遺物（1）



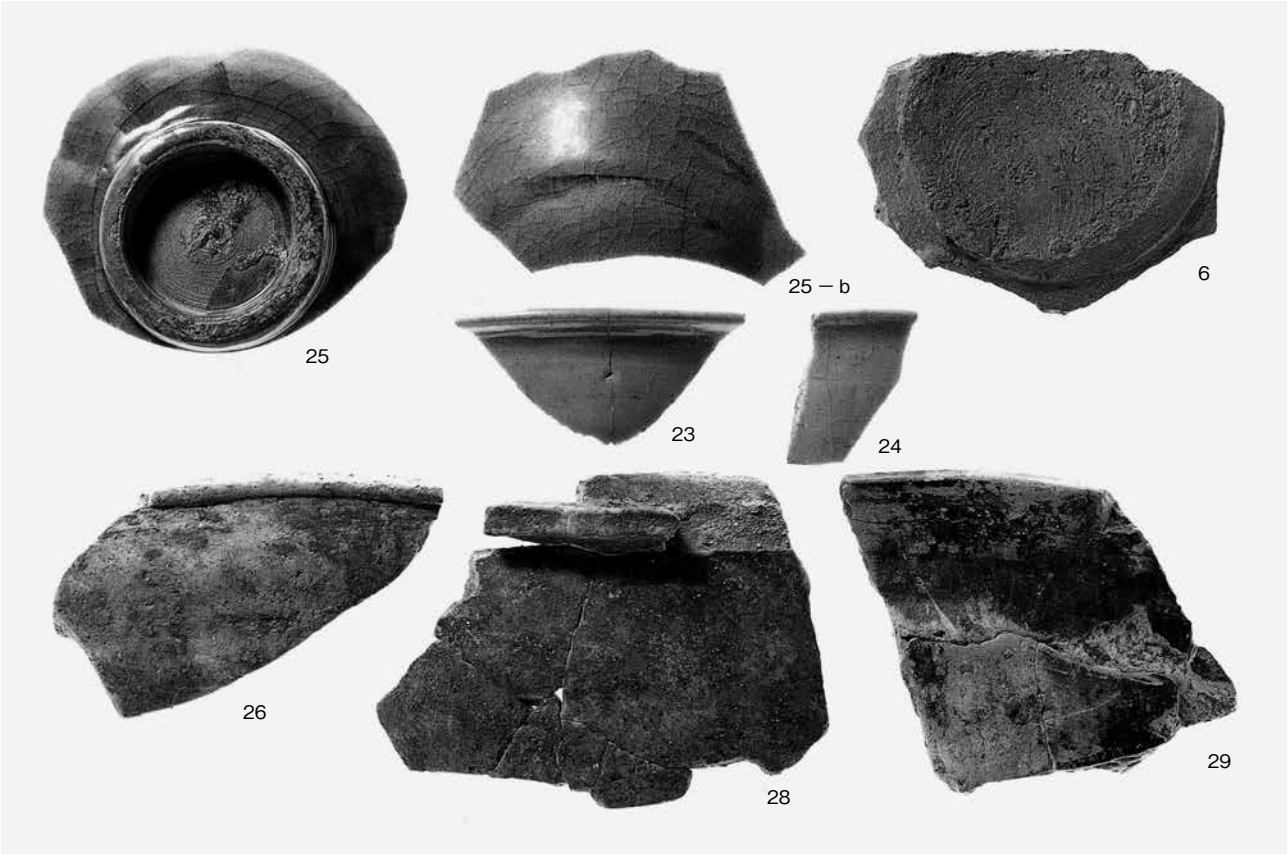

⑴ 出土遺物（2）内面




⑵ 出土遺物（2）外面




⑴ 出土遺物（3）内面




⑵ 出土遺物（3）外面

長岡京跡左京第 527 次（7ANYSK-1 地区）　図版第 1

⑴ 調査前全景（東から）

⑵ 調査前全景（南西から）

⑶ 調査地全景（南から）

長岡京跡左京第 527 次（7ANYSK-1 地区）　図版第 2

⑴ 調査地全景（東から）

⑵ 調査地全景（西から）

⑶ Ａ地区埋土堆積状況（北から）

⑴ A 地区全景（東から）

⑵ A 地区溝検出状況（北から）

⑶ A 地区遺構検出状況（北から）

⑴ Ｂ地区全景（東から）

⑵ Ｂ地区溝検出状況（南から）

⑶ Ｂ地区埋土堆積状況（東から）

報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | |
| 書名 | |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 京都府遺跡調査報告集 |
| シリーズ番号 | 第132冊 |
| 編著者名 | |
| 編集機関 | （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター |
| 所在地 | 〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　　Tel. 075（933）3877 |
| 発行年月日 | 西暦2009年3月31日 |

| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | °　′　″ | °　′　″ | | ㎡ | |
| たわらのはいじだいに・さんじ<br>俵野廃寺第２・３次 | きょうとふきょうたんごしあみのちょうたわらの<br>京都府京丹後市網野町俵野 | 26212 | 38 | 35°　38′　51″ | 134°　57′　49″ | 20071017～20080208<br>20080430～20080606 | 600<br>100 | 河川整備 |
| とだいせき<br>戸田遺跡 | きょうとふふくちやましとだ<br>京都府福知山市戸田 | 26201 | 186 | 35°　18′　30″ | 135°　10′　26″ | 20071128～20080222<br>20080423～20081022 | 1,780<br>2,300 | 築堤工事 |
| しんじょういせきだいごじ<br>新庄遺跡第５次 | きょうとふなんたんしやぎちょうしんじょう<br>京都府南丹市八木町新庄 | 26213 | 5 | 36°　06′　15″ | 135°　31′　30″ | 20070424～20080229 | 2,270 | 圃場整備 |
| ながおかきょうあとさきょうだいごひゃくにじゅうななじ<br>長岡京跡左京第527次 | きょうとふきょうとしふしみくよどおおしもつちょう<br>京都府京都市伏見区淀大下津町 | 26109 | 2002 | 34°　54′　24″ | 135°　42′　34″ | 20080722～20080825 | 500 | 建物建設 |

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 俵野廃寺第２・３次 | 寺院跡 | 古代 | 礫敷き遺構・瓦堆積・溝・護岸施設・杭列 | 軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・須恵器・土師器・木製品 | 飛鳥時代後期に創建され、平安時代中期に廃絶したと推定される古代寺院。 |
| 戸田遺跡 | 集落跡 | 中世～近世 | 溝・柱穴・土坑・池状遺構 | 土師器・瓦器・国産陶磁器・輸入陶磁器・土錘・古銭 | 集落が12世紀後半頃に成立したことを確認。 |
| 新庄遺跡第５次 | 集落跡 | 縄文<br>古墳<br>飛鳥<br>奈良<br>奈良～平安<br>鎌倉 | 陥穴状遺構<br>竪穴式住居跡<br>竪穴式住居跡<br>半地下式掘立柱建物跡<br>掘立柱建物跡<br>掘立柱建物跡 | 土師器・須恵器<br>土師器・須恵器<br>土師器<br>土師器・青磁 | 神社建築か。 |
| 長岡京跡左京第527次 | | 中世～近世 | 溝 | | |

| 所収遺跡名 | 要　　約 |
|---|---|
| 俵野廃寺第２・３次 | 飛鳥時代創建の古代寺院跡で、礫敷き遺構・瓦堆積のほか、寺域東を限るとみられる杭や板で護岸された溝などを確認した。出土遺物から、寺院は平安時代中期に廃絶したと推定される。 |
| 戸田遺跡 | 由良川左岸に近接する 12 世紀後半に成立した集落遺跡。養和元（1181）年頃までには立荘されていた松尾社領雀部庄関係文書に記された「富田」「とた」の一部にあたると推定される。 |
| 新庄遺跡第５次 | 亀岡盆地北端に位置する縄文～鎌倉時代の複合集落遺跡。古墳～平安時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡のほか、周囲を塀で囲まれた大社造りに復元できる鎌倉時代の掘立柱建物跡が検出された。 |
| 長岡京跡左京第 527 次 | 桂川と小畑川の合流点付近にあたり、中世～近世と推定される溝のほかには、顕著な遺構は検出されなかった。 |

京都府遺跡調査報告集 第132冊

平成21年３月31日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三 星 商 事 印 刷 株 式 会 社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141